

特12

166

持13  
638

釋迦  
相

倭文庫全集

万亭應賀先生著  
猩々曉齋先生補画

下之卷

東京書肆

金松堂發兌



賢愚經の詠  
零落の須達長者諸仏の加  
護小よつて栴檀香木の并  
得て元の大福長者とあり  
子孫榮久まふ

須達長者



毘婆沙論の意  
佛弟子の好苦梵士  
一口の酒より五戒と  
破り逐電せし終に  
隠悪重く獄の獄  
官の獄なり

好苦梵士

お蝶お豆屋



大論の説

世尊幼年の師鬱頭藍弗禪定の  
悪願了らるる後世魚鳥と取喰  
ふ飛狸身とある

譬喻經の説  
阿那律前世盜賊  
あり一矢の根  
と以て燈明と照  
せ一功德に依り  
今世十大弟子の中  
天眼第一の報と受る



釋迦八相倭文庫三十一編

去程に如來の諸大諸佛及び緊那羅親子に暇を告給ひて大迦葉に案内をさせ七金山を今已に  
下り給ふ折ころわれ最幽なる女子の聲にて如來くと呼たりける然ども隨ふ外々の者の耳  
へは更み知れず唯如來にのみ聞へしかば如來の須臾も徒弟等に打向ひてヤヨ皆々われ  
聞しか女の聲して呼たるいと宣ひすれば皆訝りて少も聞へ侍らずとやせしりば然れ先元の  
峯に立戻りて事の由を見聞せよと宣ひつゝ又峯に上らせ給へば徒弟の者も後邊に附て立戻  
り元の所も座を取らば如來の海を隔たる遙の那方へ指さし給ひて此峰より其間千里に近き海  
路を隔て摩竭國王の夫人磯邊に出て我名を呼其聲の我に聞ゆる事傍に在て物云ふが如し其  
故如何にと云ふに彼の夫人の身自ら邪淫嫉妬の心を清めて我へ衣を布施なさんと我此へ來  
る後を僅の供にて追來つるに我はや海を越しかば先非を悔し甲斐もなく後世を助る誓ひも  
絶て是非も泣くく一命を彼處の有磯に投抛んと覺悟を定めし女の念力信心決定の勇し  
さい男にも勝りし形勢なれば我是を見捨ちて此世で女人得脱の總鑑も有じと語り給ふを御  
弟子達も聞つゝも伸つ縮つ海面を夫人や有と見渡せども流石に隔つる浪の上影も容も見へ

べころ各自眉を擧る已なり其時如來の欣然と衣の袖を掻合せ印を結びて眼を閉観念しつゝ、  
 朝に懺悔滅罪南無佛と唱給へばあらず不思議やさしむに隔ちと波を越て那方の磯邊に如來の  
 御容の忽然と現れぬ然るに摩羯國王の夫人の身の上に重なる罪を懺悔して後世の苦患を助  
 からんと如來の御後を慕ひ來よ疾も海を越給ひて後に松風浪の音のみ外に事問ふ人もな  
 く携へ來る布施物と侶俱に海に沈ん覺悟なりしが其志の届てや懺悔滅罪南無佛と云ふ  
 聲侶俱も眼前に如來の御容の現るれば夫人の飛立思ひして捧持たる御衣を自ら獻じ奉れば  
 如來の其儘受給ひて妙なる教偈を授らる夫人に附添來りたる者までも之に洩ざりけり之夫  
 人の心を憐みて如來の神變奇特を施し救ひ取せ給ひしなり然る夫人の時後れて逢難かりし  
 を不圖も如來に見へて教偈を受夢かど計りに悦びて尙ほ南無佛の妙号を撓なく唱へつゝ、頓  
 て別れて戻られける扱又如來の徒弟達に夫人が獻せし御衣を異儀もなく受させ給ひたる  
 其奇特を俱も感ずれば如來の大迦葉に打向ひて夫人が再度我も逢て後世を助る縁と云ふの  
 汝ちが茲に來りし故なり左きく我疾くに茲を去殊更遠く隔たりて逢も會れもせざるべき  
 に今其報により此衣の汝ちも附屬致なりと云つゝ、やをら渡給へば大迦葉の有難く受戴きて

身に纏ひ夫より己れが先に立て如來と俱に七金山を急ぎ下りて往程三日を経て舍衛國の都  
 に出たり茲の殊更世に聞へし繁花の地にて最賑しく長者杯も多く在て其中にも名高き須  
 達長者と呼ぶ者なり藏の數も夥數表の町に千戸前裏の町に二千戸前都合せて三千の  
 外にも金藏文庫杯四五百も有とかや如來も法を弘るに宜敷所と思召て目蓮舍利弗其外と  
 も國の様子を語り乍ら來らせ給ふ其所へ白犬一匹走り來りて見馴ぬ如來を吠つゝも大迦葉  
 に戯狂ひて問もなく迦葉の家に來りければ如來の御入りて家内の者へ告んとて一人先に門  
 へぞ入りしに其犬も迦葉も附て遣入たりしが程もなく案内の者の出來りて如來を初め皆々  
 を一室へ案内せし所件の犬の又走り出て吠る事頻りなり追ども更に遊されば皆々も遇餘し  
 て居る程に犬の如來の衣の御袖を已に喰裂んと爲てければ如來の犬に打向ひ給て汝ちの財  
 を守るが故に生々世々犬なりと示し給へば件の犬の口を開き頭を垂て死たる如くに其  
 所へ轉りて伏つゝ、再度吼もせざれば大迦葉の其内も待遇の用意を何呉と調へて貧敷暮しに  
 品々の薄きを渥く詫けるを如來の深く愛歡び其志しを謝し給ひ緩々休息爲せらる兎角する  
 うちに大迦葉の家へ飼たる彼の白犬の太く弱り伏たるを見附て家内の者を詮議するも先の

様子を垣間見て知りたる者が云々と告るを聞て大迦葉の柔和忍辱の御僧達が坏て生ある者を撲りせまじ右も左も様子有んど如來に向ひて夫となく我家の犬が今云々なりと語れば如來の宣ひく然る那處なる白犬の前生の此れ汝が父なりき若し之を疑ひ能く那犬に問ふて見よがし前生より豫て汝に譲るべきとて伏藏せし物あり开を問ふて見べし尙ほ其因縁を聞度べ爾して後に云聞さんと宣ひするに打駭き大迦葉の犬に打向ひ汝若し我父ならば豫て伏藏の物ある所を示し我に譲り與へよと云ふ聲と俱に伏たる犬の勃然と起て先に立つ、導く如くに見へければ迦葉の犬も隨ひ往程に家の裏手へ赴きて頓て地を搔穿てば迦葉の點頭歡びて即座に下人を呼集め彼の犬の穿ちし所を横深く掘せけるに一の石櫃の現れたり早速蓋を開きて見てければ數多の金箱の其中に積込て有ゆへ下人どもは口元より一々に携へ出て迦葉の前へ並べければ迦葉の夢の如くも悦びて先一箱を携へつゝ如來のお前へ往たりける其後にて下人の癖とて密に語ひ掠取んと迦葉の居らぬ其隙に二箱を隠し持て其場を去んど爲る者ありしに彼の犬の初めよりして其傍りを守り居けるが之を見るよりも吼付て其逸足を妨げければ下人も呆れて猶豫うち迦葉の再度茲へ來りて金の箱の數を改め残らず一

室へ運せける實に如來の功力にて理れ果し無双の寶の世に現れし不思議こそ偕迦葉の如來の前へ進み出て述るやう何をか包み藏とべき某しの幼稚ころ父に別れてわび敷も貧しき中に人との成ども他所の富貴を羨まらず婆羅門沙門を見る時の頻りも是を憐みて檀施の心發るが故乏しき中にて布施する事已に年月を送りしかば今の暮しに差詰り今日の烟りも立兼る其中にして斯の如く如來を初め奉り諸君の待遇物を調へしを定めて御不審あるべきが最取敷事乍ら今より永く御宿を致さん爲る迎家に傳へる一つの寶を賣しるちして漸くに粗末の品々を求め來て勤め進らせし折柄に神通不可思議なる法力もて夢の如くに斯く莫大なる寶をば得さしめ給ふ嬉しき響ふるに物も無けれども先の仰せに我父の犬ある由を承り是に心も轉倒せり願くば其因縁を宜敷示し給へかしと打歎きて請ひせせば如來の御前なる響應の膳部を片寄給ひ容を正つゝ汝が迦葉近く進め詳細論し得さすべし其宿縁を按るに汝が父の都提と云ふ者の律義を守りて奢を省き信心殊に厚かりし故其家富榮へしかど臨終の時其伏藏の寶を思ひ詰たる一念にて今の世に犬と生れて門戸を守るなり什麼短命の殺生の報にて長命の不殺の報ひよころ汝の今斯る寶を得るも貧苦の中より布施を爲し報の眼

前斯の如し如何にも疑なかるべし汝父と知されば彼の犬をも是迄の打叩きせし事も有んば  
 令父に是無とも畜類及び草木とて皆成佛を遂る時の人にもや劣まら其中にも牛の大成徳を  
 具足し馬の観音の三形にして其外大鼠鹿猿の類又鳥類に至りても鶴 鷄 鷹 鳩 鳥 又 草木の  
 其中にも蓮華の彌陀観音の三形を具し柳及び夜合木の過去の佛の菩提樹なり其外器物に至  
 る迄皆神佛の三形なれば敢て踐踏すべからず此踐踏と踏躪る事なりき扱目蓮舍利佛其外  
 の者共も儘に聞出家の身として牛馬及び輿車に乗事を慎むべし一日輿に乗時五百日の  
 齋を減すと云ふ况や悩し得る時の大罪を受るなり又虫杯も侮りて殺生するを慎めよ是も佛  
 となるが故に踐踏すべからず况や人間の身と云ふ小天地なるが故に我召仕ふ下人と云ふとも  
 足にて踐つ蹴つすれば天理又違ふ恐れあり詰る所の一切衆生も畢竟じて佛となる者なれば  
 有情非情も盡く我友なりと心得て能く憐みを懸可きなりと最有難く説給へば其座の面々  
 の頭を傾けて殊更殊勝に聞居たる其時俄然に表の方にて其方の此處のと下人ども大勢噓き  
 て駈廻れば大迦葉の何事にやと走り出て之を見れば彼の白犬を五人の者共が棒もて打と騷程  
 又遮止めて様子を問へば男共の口を揃へて此犬何も我家の臺所へ来て炊女の末利と云ふ女





計りに能く馴たれど其外の者の誰を見ても喰ひ付んとして憎ければ押片附んとて追來れり  
いざ速に犬を渡せよ但し隠して出さず我々踐込て手込にするど大音聲に罵れバ迦葉の  
下人に詫るやう扱ひ其方達の隣家なる須達長者の男共よな何事にやと思ひしよ開の餅事の  
限りなり察するに各自の兼て此犬を酷くする故喰付んとする成べし構のぬ者を畜生とて抗  
敵事の有べきや兎も角も我謝らん若し須達殿の指揮ならバ汝等より好に詫て呉られよ夫  
にても尙ほ濟すバ我往ん斯ても尙ほ聞入なき其時の此方にも亦了簡ありぬ能く思ひ見られ  
よ些少の事にて生あるものを殺さんとの非道至極なり去ながら是非にも殺さんどわらバ先  
犬に劣りたる汝等五人を我打殺さて措べきかど氣色を變て威し掛バ皆尻込する其内より  
棒を構へたる一人が這の聞憎し迦葉殿犬に劣つた汝等どの見下過たる一言なり仮令我々  
の奴僕にて須達に仕れたりとて其方の如くに貧苦に逼りて食物着類も人並ならぬ風の神  
どの同じからず貧すれば鈍になりて眼の玉迄が鈍りてや犬と人どが見分らぬか若し見分ら  
ずバ見分るやうに此の棒以て脊骨を挫ぎて人並に爲て呉んず犬を出さずバ其方が敵手ある  
予何とくと噓けども迦葉の少しも驚かず汝等ハ我貧苦を侮りて長者の冷飯食ふを自慢

にするか能く聞かし犬の元此れ畜類にして道理を知らぬの尤もなり汝等ハ人にて在なが  
ら我構の垣を踰越て狼藉するのが世界の法なるか世界の法をも辨へぬバ犬に劣りし人非人  
なり人の家に門戸のありぬ若し用あらバ其門より入て挨拶したる其上にて兎も角も致せ  
かして理を述べられて流石に五人ハ尤もどの思へども常より其貧苦を侮りし迦葉亦れバ皆々  
棒を打振て犬と言れし腹愈に之を受よとて打て掛るを迦葉ハ手疾く搔潜り先一人の棒を奪  
ひて四人を敵手ハ打合所へ件の犬ハ走り來て四人の足に喰ひ付んと爲るを之れを防げバ迦  
葉に打れ迦葉が棒を支んと爲れバ又犬に膺を噛附れ双方見返る隙もなく竟に防ぎ兼て皆々  
荆の垣を潜りつゝ逃入りけるを迦葉ハ見送りて冷笑はや立去んと爲てけるに彼の寶を掘出  
せし穴の内より尊大に迦葉殿待れよと云つゝ出るハ此れ須達長者なり邊り狭しと突立たる  
鳩の杖さへ欲の道に色の手傳ふ侍女を引連出る其途端表の口よりハ又以前の奴輩が得物  
を携へ馳入りて迦葉を取込捕へんとすれバ迦葉も身構へしてヤア這奴等の云合せて我を手  
込に横道を働く所存と思ひるハなり寄らバ目に物見せんずと云ハ長者ハ聲を勵まして横道  
どの汝ちが事ヲ我最前藏の窓より見置たり能くも地を掘我藏の寶を家に運びし予夫故我れ

今汝を捕縛て國王へ出すに何の異儀有べきや然ながら若し後悔せば盜し寶を速に其數を  
 揃へて不足なく戻さば此儘免す可し否まば附縛懸んとされて迦葉の胸を突扱の堀得し  
 那貧の長者の藏の物なるかと吠と計りに氣も挫け再度夢の心地して右左の返答も出べし  
 長者の怯みし色を見て如何に最前我奴僕共が垣を踰しを大杯と云しか汝の藏の屋瓦を切  
 て人の寶を奪ひたるが夫にても尙ほ人か但し犬かサ、犬か人か返答の如何に此事に付て  
 の一句も有まじ夫擲めよと言ふも証據無ければ違背ならず不圖手入る寶の仕末其仔  
 細の云々と云も分疏の立ばこ此身の科の免れず親と聞たる犬も亦犬に有て余の物か若  
 しや狐か但し又寶の佛か何者かと思ひ煩ひ居る所へ如來の徐々出させ給ひ途方に暮し迦葉  
 に向ひ汝が聊か歎くべからず我能く長者を論とべしと云つ、彼方に打向ひヤヨ須達先徐に  
 せよ嚮に爲したる迦葉が業の皆此れ我のさする所あり夫に附て汝が身の一大事且何呉と  
 示すべき事の種々有まづ此方へ來よかしと最爽然に宣ふ御聲の凡人ならず聞ゆれば流石  
 に須達の心の内は是唯者にて有まじく左のわれ盜賊惡黨とも見ざれば何程の事有りん詰  
 聞きして盜まれし寶を術よく取返して戻るべしと思案を定め下人共を庭に待せて如來の

お後に引續き奥の一室へ入りけるに各自座席も定りて後如來の詞を正しうし須達に示し給  
 ふやう汝が儘に承へれ抑々世に過去未來現在の三世有るかし之を近く譬れば昨日今日  
 明日なり然る昨日勤めず今日の糧のあかるべし今日又能く勤めず明日の糧の空き事  
 推量りて悟るべし抑々是に斯の如に積上たる金の是汝が貯ふ寶も非ず其譯を今詳細云聞  
 さん此方へ進めと懇切に須達を近附給ひける諸如來の再度宣ふやう此金の元を押へ開も今  
 より遙の昔此處の主迦葉の父にて名を都提と名乗し時外に並ぶ者もなく家富榮へて百千  
 の藏有しを汝が父は殊なふ其れを羨み都提の果敢なくなりし時大欲心の余りて予密に下  
 人を語ひて大膽不敵の舉動爲つ、今藏の有所の地を穿ちて都提の藏の金を偷て我家へ持返  
 りて今の富貴の種とせり然る迦葉及汝を初め誰知る者の之なきも知りたる者の我外に唯  
 一人の女人ありぬ夫故に我迦葉に知らせ取戻させたる數多の金を汝が物と心得し開  
 も昔を知らぬ故にこる斯ても尙ほ疑ひ汝が家の炊女なる末利に詳細尋ねべし渠の其事  
 を能く知りぬ汝が現世の福人あれども來世の資糧に乏しきがゆへ最と憫然なりいて其譯を  
 諭すべし扱此國に祇陀太子と云ふ者ありて汝が父の所有する大なる其園に一面の黄金を敷

て求めたれば其時園生の太子黄金の須達と世に普く聞へたり斯て祇陀太子の左計りの黄金を以て園生を買し園の内に橘のありて此實を一つ喰ふ時の齡千歳を持たれば其一本の欲き故なり扱愚にも汝ちが父の八十にして歿去時に臨みての金銀も身に添ず彼の橘を持てあるならば尚ほ千年も生べきに口惜き今の最期と彼の一本を思ひ詰たる最期の一念の恐る敷も彼の橘に執着して其迷ひの魂魄の此木より止りて夫より橘は實と雖も人面の形となり是を撮り血を出すことありぬ千歳を壽く橘も今の果敢なき實を結ぶ人面樹との變りたり我現在の眼を以て未だ一度も見ずと雖も三世に渡る眞眼力より見拔置たり疑ひあらば糺して見よ是等の宿因を能解悟あして疾く正念發起して後世の冥福を受ずやと凜然たる御聲を以て論し給ふ有難き然ども須達の一つとして其れを實と思ひぬ者から空嘯て居たりし夕這の無禮なり尋ねも致さぬ我父の讒詐三昧哉然る事の聞てもよし唯盗まれたる金の事一儀なり大膽にも程こそあれ盗をしながら我父を盜賊に陥さんといふ是予所謂盜賊の猛々敷と云ふ譬へなり見れば黄金も茲より直素直戻されず國王へ訴へて迦葉の勿論汝ち等迄も一味の科を負するぞサ、戻とか如何又渡さずやと悪口ケ問敷云誇れば如來の尚ほ莞

爾として因業深き須達哉然此なる黄金の箱に鍵や有と宣へば我金箱に侍る物を鍵のなき事の有べきや然らば其鍵を出されよ若し鍵なくば渡されずと仰せの下に人を走らせ有と所有金藏の鍵を残らず取寄て夫を合せ是を當捨て穿ても開べころ長者の焦ちて我家に戻り尚ほも鍵を詮議せしに合ふべき鍵の一つもなければ腹立餘りに炊女の末利を呼出して云々ど先に如來の宣ひせし事共を問ひ試みしに未利女の如何にも其如く我母歿去其時に妾に向ひて宣ひける其方が永く此長者の家に勤めて居る其内に若し云々の事の有時の云々と答へよと言れしが年寄の愚痴に何を宣ふにやと覺束なくも思ひしに世に不思議も有者かな今日この今ころ母の詞の現れ侍る嬉しさに唯是已を思ふが故に女の身にて有れもなく日大勢の食物を妾一手で捧ゆる水汲米炊薪割夫も炊女の勤めなれば是非もなければ夫より尚ほも辛き五人の男衆に間がな隙まにいやらしき事を言れて駟る、开を堪忍ぶも母上の詞の重しと思ふ故なり夫に又不思議なる日頃馴初し隣りの犬が昨夜妾の枕上に立てて人の物云ふ如くにて悦べしげに告るやう是迄厚きお恤にて食物數多給はりしが明日の我等も此世を去愛度身と成に附て其方も此上なき悦びあり是迄情の禮謝に見へ侍ると正々しくやすと夢見し

が何が扱炊女杯の悦びならん知れたる事と思ひしが其夢の告に違ひて母の遺言も達する上  
 ははや首尾能身の暇を賜われかしと述る詞の志ほらしくいと不便に聞ゆれども須達ハ僻  
 みて怒りを發し汝ぢの母より我家の飯にて命を繋ぎ乍ら其報ひのせて我家の仇となるべき  
 不届至極の女なり今までの畜生同前の者ども知らて二季の仕着せも致したり願はず追  
 出せば身の皮剥て出て失より主の恩を知らぬ者を犬猫に譬へたり己れが犬の心われハ隣  
 りの犬を可愛がり毎日何かを人に匿して食ひせしも今となりてハ腹が立ぬはや片時も置れ  
 ぬハ直に失よと上着を剝取身に添襦袢一重にして踏附蹴除突のめせば末利女の泣々起上り  
 私しも賤しき奉公の致せども聊かお主の仇となる僻事せし覺へなし唯今中せし事どもハ善  
 惡に拘わらず有の儘に答へ侍りぬ又お隣りの犬とても炊女の業の片手間に人々の食餘しを  
 日に三度拾置て粗末にせじと心得て食させ侍りしあり开を呵らるゝ已ならず明暮五人  
 の男共夜寐遊女か辻君の如くに侮られ附廻されて鞠らるゝ今の愛身に比ぶれば乞食非人  
 が増すかしいと暇を戴き侍ると云つゝ立て身の座を搔拂ひく朝餉の膳に食餘せし食  
 物を取出して裏手の方へ密に往つ迦葉の犬を呼ければ何處よりか入り來りて末利女の與へ

し食物を悦び食ひ了りて異なる聲して泣にけるよぞ是を聞て舍利弗目蓮ハ迦葉の家の一  
 室より其邊りを伺ふ所へ如來もやをら立出給ひお弟子達に打向ひて皆われを見よ那の破垣  
 の内にぞみて何をか犬は施し居るみすばらしき女ころ世に珍敷善女なり皆疾く出て禮を爲  
 せと宣ふゆへ我もく破垣の傍へ往て末利女を敬ひ禮拜するを末利女の不圖心附而なげ  
 に見て云けるやう妾ハ今此内の門を出れば其處よりして非人乞食と成者を坏てや左程に敬  
 ひ給ふや妾を不便と思ふ人の唯此犬に物を與へて今より隣りへおこすまじ若し妾が居らぬ  
 後に此犬の來らば僕共に打も殺しもせらる可しわな不便やと云をも待はず目蓮ハ膝を進めて  
 末利女に向ひ我師如來の見定め給ふ所ありて教に任せて我々共ハ皆禮をなす上からの善女  
 の難儀を救ふべし其儘此方へ來らせ給へと云を打聞末利女の悦びてわら有難や足らぬ者  
 を養ふてだに給いらば何様やうにも身に掛て炊女の業を勤むべし是身の勝手をやすに非ず  
 唯此犬を養ふ爲す然ハ今よりお詞に任せてお世話に成べきか茲ハ往べき道ならず表の口よ  
 り參るべしとて程も有せず迦葉が宿の表門より入り來れば迦葉等の太く憐みて如來ハ此由  
 を云上れば如來ハ直ちよ見へ給ひて大迦葉を呼出し此乙女の中々に炊の業などする者なら

ず近くい今日遠く明日玉の輿に乗べき者なり深く勞り措べしと示し給ふ其所へ須達ハ五人の下人を引連れて無体に彼の金箱を取戻さんと入り来るを舍利弗ハ立て之を支へ遣り理不盡なり先の程如來の既に仰せし如くあの箱の鍵あくハ我物どの言れまじと云ハ須達ハ進み出爲て其方にハ鍵ありや余も我金箱の鍵ハ其方ハ有べき様やあると詰るを如來ハ見返りて由なき事を我何言んや迦葉の寶ハ極まれる其証據を目前現すべしヤヨ目蓮最前の犬を茲へと仰せの下に吠返答て立上り呼んどすれば彼の犬ハはや庭前へ跪き障子越に三度なげハ如來ハ端近く出させられ犬の項を撫給ひ汝等都提發菩提心今速に前世執着の念を懺悔して一心一向ハ安樂の佛どのなりぬかしと法を授給ひしかハ犬ハ頭を地ハ垂て涙を流して吠よと見へしが口より何を吐出して其儘其處に呼吸絶たり如來ハ其吐たる物を目蓮に取上させて如何に須達アレ那れこそハ彼の金箱の鍵なれ又此犬ハ迦葉の父都提の成れる所にて我豫て伏藏せし物に執着して畜生となり門を守る淺間敷も又不便の者なり然ども今や前世の念を捨て畜生を免れたりいと其鍵を合せて見よと鍵を迦葉に渡さすれば室中に積上し金の箱の錠前を件の鍵以て開試むに迦葉が一念の籠る所ハ速に開ければ皆ハ駭き打

守る時に如來又須達に仰せらるハにはヤヨ長者あれを見たるか是にても尙ほ云分わりや扱又汝ちが家に仕ふたる炊女の末利女が母ハ都提が母の成る所なり然ハ斯る時の証人どの成たるなり茲を以て速に疑念を晴して迦葉と睦て亡父の罪を購へかし开も又我を誰どか見たる予摩迦陀の悉達なり亡母及ハ衆生の爲に世を棄て行を積今諸天諸菩薩に渴仰せらるハ身の譽れハ富貴を棄ての功しなり我言に偽りの無し之をも尙ほ未だ疑ハハ頓て末利女の光景を見て衆生を度する我々が欺かざるを悟るべし又其處に居る五人の僕共是迄末利女を侮りしが今にも汝等の渠が履を掴むべしヤヨ其處ハ不具者穢れたる身を以て我立庭を穢すが上ハ其棒ハ何の爲予犬ハ劣りし身の行末報ひも已に遠からじと云棄て奥へ入り給ふ折柄須達の宿所より速敷使ひの來りて長者に向ひて息を切り唯今波斯匿大王より勅使の來らせ給ひたり急ぎ見へ給ふべしと告るを聞て須達の夫を志ほに急を戻り往く我門前ハ勅使の供人夥敷居が中に百人余りの官女達の門の外に居餘れる夫れ已ならず立關ハ玉の輿を昇据たれば遣り國王の後ハ又姫宮の御入りかど悦び遽て内へ馳入り欲心深き了簡以て遣り如何なる幸福に逢ふ事かど一人浮立損すれば又斯の如く徳の廻るも疾き者この形狀を何卒して

隣りの乞食に見せ度杯と左も仰山に取囉しつゝ上下の人数を算へさせて末々の者迄も町  
 畔に馳走をさせ頼て勅使の前に出バ勅使の饗應を賞美せし上にて扱勅使の儀の外ならず其  
 方の召仕に末利女と云ふ女ある山波斯匿王聞召て其者を御后に差上べき輪言なりと言れて  
 須達の面脹らし扱其外に何の御用も御座らぬにやと尋れバイヤ其外に別儀非ず急ぎ末利  
 女を渡すべし受取用意の疾く致せりと寐耳に水の詔りよ夢かど計り呆れしが帝よりの勅  
 使とあれば何事を措ても上ぬべ成ずとの云末利女の今はや暇を出せし後にして隣りに  
 居る由なれども今更斯ども言れぬ中と思案に暮其座を下りて子息の金童に語りければ金童  
 父を諫るやう開然事に侍れども先御怒りを忍ばれて隣りに在す如來とやらへ疾く説て末  
 利女を貰ひ受て勅使に渡さバ家の爲も悪かるまじと言せも果ず須達の子息を儲と睨付ヤイ  
 不所存者何を云々已は大金を奪ひ取れ其上にも親の取まで吐露し其者に何を以て謝り説る  
 やうわらんや今勅使の御入り無くバ何が措き召仕の五人の男を不具杯と悪口爲たるを聞棄  
 ず舌の根扱て措くべきか家臣の取の主の取なり我子の是を聞流すか假令國王の勅定な  
 りとも末利女の暇を出しぬと云バ夫にて濟事よ唯出費の大勢に馳走を爲たるが無念ありと

云バ金童尙ほ云ふやう開の父上のお詞なれども茲に一つの不思議あり是迄の不肖も有間敷  
 事と思ひて聞流して置たるが今日初めて駭きし彼の末利女と五人の男に深き因縁ある由  
 なり其仔細を聞へ上ん日外或人不肖も明白に告げる此程阿私陀仙人と云ふ者願婆娑羅の  
 宮へ來りて韋提希夫人の相を見し時須達長者の炊女なる末利女と云るの唯今こゝ賤き身な  
 れど末々の玉の輿に乗相あり又其家も召仕ふ五人の下男に扇提羅と云ふ不具あり這の是前  
 世もケ様くの罪あるが故も不具と成て此世に生れし者なれば昔の罪を購ふ爲も末利女の  
 玉の輿を昇よし詳か又語りしが聞しに違ぬ今日といふ今に至りて如來とやらの明言に  
 て萬の事を量り給へ若し直々に詫悪く思召バ不肖が参りて術よく作做して末利女を屹度貫  
 ふべし爾して五人の下男どもをバ殘らず暇を遣はしたし斯る不男の不具者の脇目他所目に  
 見てだも穢らぬ敷思ふが故馴近附る人もなき不吉の者に扶持を呉召仕はん事の思ひも依  
 らず是迄の知らぬとなり過つて改むるに何憚りの有べきと事賢くも諫めければ須達への  
 にて怒りも挫け然バ汝ぢの然るべく取計へとぞ云附ける扱又隣りの迦葉の家にて此奔走  
 に引替て彼の犬の死を深く悼み件の金を掘出せし所へ厚く葬り營みてやゝ事の終りし其所

へ須達の子息金童の入來りて迦葉に而會禮を厚くし且敬ひて云々と末利女の事を頼めば迦  
 葉の心得て其旨如來に告げせよ如來の金童を近く召れて汝等の未だ若しと雖も悟り賢き者  
 なるゆへ親の恥をも雪ぐなり異儀なく末利女の渡す可けれど其方が家の五人の下男に興を  
 昇せて迎ひに來よと宣ふ詞に彌々恐れて加何にも其儀の先程より覺悟致して侍るなりとす  
 せば如來も駭き給ひて汝等如何なる手段ありてか五人の扇提羅が今末利夫人の乘輿を昇べ  
 き由を疾く知れりや宿明通の得間敷にと宣ふを聞金童半伏て某し争不思議ある宿明通とや  
 らんを得べきぞ這は是日外阿私陀仙が云々の由をせしと人傳に聞ける故纒に知りて侍る  
 かしと有の儘も告ぬるを聞て如來も點頭給ひ如何にも左にて有んかし然らば返りて迎ひをお  
 越ぬ疾々せよとの仰せに任せ金童の急ぎ宿所に返りて須達に様子を告たる上五人の者を呼  
 出して其方達の罪業深くして不具者と生れしを我々の悟らざりしが智識の見定め給ひしよ  
 り人並々の交りも成ぬを今日こそ現に知られたり是迄穢れし素性を隠せば然とも心附ずし  
 て召仕しは是非もなし唯今よりの末利夫人の興昇に身を變て宿世の科を購へかし若し又此  
 儀に背きなば國中に觸流して不通の者と致すべし然とも分疏あるならば銘々に云聞せよ如

何に〜と云詰られて五人の下男の一言もなく頭を掻つゝ而赤らめて斯迄事の露れし上の  
 何をか違背仕らん如何なる事をも勤むべし唯穩便に願ひ奉ると云ふ金童も面色を直して  
 再度夫を言ずして即座に衣服を更めさせ玉の興を昇持せ迦葉の家へ赴けり迦葉の頓て末利  
 夫人を件の興に載ける程に如來の自ら五戒の内なる飲酒戒の一を除きて殘る四戒を授け給  
 ふ這は是如何なる謂れぞや後にて具に知らるべし扱も末利女の五人の者も我乗物を昇を見  
 て奢る心の更になく唯身の果報を悦びつゝ如來を初め弟子達の申に及んず迦葉に厚く禮  
 謝を述暇を告て往空も身も晴やかに鶴の波斯匿王の奥殿へ須達の家より上りける此れ  
 ぞ前代未聞の例と云ふべし扱又金童の其後よて父須達に打向ひ凡人ならぬ如來の功力の尊  
 ばずんば有べからず何卒我家へ請じて瀝く待遇進らせなば末々好事もあるべきにと勸れど  
 も須達の更に聞入らず開の僻事の極りなり那の様なる者を呼なば又々損の上塗なり夫よりも  
 國王より末利を召れたる御挨拶に下されし那菓物の我是まで竟しか見聞せぬ者なり帝より  
 の賜なれば唯の菓よの有まじく汝等夫れを持往て何なるかを聞て來よ必ず我家に來よ杯  
 と忘れても云ふべからずと云附られて金童の其菓物を携へて隣りへ往て敬しく如來に其

名を尋ねずせば如來の熟々と御覽じて這の世に稀なる菓物にて名を檀奈羅樹と唱ふるもの  
 きて此れの有所の補陀洛山と呼ぶ觀音の淨土ありて此山に已生するが故輒く人手に渡ら  
 ぬ者あり流石の波斯匿大王の心ある賜かな最珍かなり誰々も疾く來て見よと仰すれば皆  
 く集りつゝ篤と見て歡ぶ事限りなし此形狀に金童も俄然に尊く思ひれて尙ほ又如來尋  
 るやう爲て此物の爲に如何ある益の侍るにや然れば此菓物を一つ食すれば七日の其内の  
 物欲からぬ奇特あり此菓物にて一條の物語りを聞すと可し扱昔去方に長那と云る者ありて其  
 妻を摩尸羅女とて夫婦の中に二人の子あり兄の方を早利と呼び弟の方を速利と呼ぶ然るも  
 其母の病にて死せしうべ長那の深くも歎きしが世の中の習ひにて後妻を入れて暮せしに間  
 もなく國に飢饉のありてければ彼の長那の其餓死を助らんと思案して旃那羅山と云ふ山  
 此菓物の有と聞これを取に往たる後にて後妻の心不良者よて二人の子を舟に乗て渺々たる  
 海に漕出し一つの嶋に棄て返りぬ二人の子供の哀き餘りに迎も死ぬべき命ならば潔く此  
 世を去て我々のより一切衆生の貧苦を救ふべき誓ひを立んと云つゝも二人偕亡けるが  
 其誓願の空しからて早利速利の觀音勢至の二菩薩に成れたり母摩尸羅女の阿彌陀となりて

親子三人が斯の如く三尊の契りを爲しつゝ一切衆生の苦患を救ふことにこそ其二人の子の  
 棄られたる嶋と云ふは是即ち補陀洛山に侍るかし二人の死したる其所へ此檀奈羅樹の生じ  
 つゝ今に木の實を結ぶとかや察するに今須達の黄金に満たる長者なれば國王の餘の物を以  
 てせず斯の實の木の實を以て末利夫人の報ひとせられぬ然乍ら此菓物につきては須達の苦  
 々數も身の差合となるとありいてや未來の事を示さん此檀奈羅の種を蒔り千日にして必ず  
 花開き實を結ぶ事百余年なり此時須達の死門に入らん夫已ならず此の花の咲迄は勿難の者  
 百八人あり此儀聊かも違ひなれば日月の地に墮なん此の果の他所に在ては實なれども汝等の  
 家に植ては意圖の如しと宣はするを聞て金童の恐れつゝ其意圖と云ふ者の矢張一種の樹木  
 なりや然ればなり此木の一枝一葉を臭者の即座に其臭香に酔臥て死門に入ると云ふ毒木な  
 り然れば上なき實と雖も須達の爲に大毒なれば意圖の如しと云たるなり尤も其毒木も栴檀  
 と云ふものありて仮令四十里に連りし意圖の林の中と云ふとも二葉に足らぬ栴檀の苗の生  
 出る其時に其芳しき香を以て毒氣を挫く徳あるなり彼の檀奈羅樹も須達の身に差合て毒  
 どなれども爰に好堅樹を植る時其愛を免れん此好堅樹と云ふ木の實の芥子よりも尙ほ小



さけれども一夜の内に百丈程育ちて其木影にの五百の車を隠す程に茂るなり是等の事を立返りて須達へ具に傳へよと彼の菓物を戻さるれば金童の有難く受取て急ぎ我家へ持返り父又向ひて如來の仰せを詳かに傳へければ須達の暫時考へ居たりしが這の我深く察するに世に二つと無き菓物の實なれば彼等の羨みて毒杯と偽るならん其淺量ころ可笑ければ實ども言るゝものが争て毒となるべき謂れなし毒に成り實でなき物を國王より謝禮よ下さる謂れもなし何と言ふとも實一つにて七日の食を持とあらば此實を伏て培養んと即座よ木造りの者を呼て地を撰みつゝ其實を伏させ花咲實るを待けるが千日立て如來の仰せに少しも違はず須達が身に大災難の出来る事の後巻に詳細説くべし扱又如來の茲よりして古郷の摩迦陀國なる迦毘羅城へ立戻りて父淨飯王へ不孝の罪を詫橋曼彌耶輪陀羅女優陀夷夫婦を初めとして群臣に會度旨を舍利弗に宣ひて即ち渠を以て其御使の役に當させ給ひける

釋迦八相倭文庫三十一編終

釋迦八相倭文庫三十二編

然れば爰に又摩迦陀國なる迦毘羅城にての悉達太子の王宮を出給ひてより淨飯王を初めとして橋曼彌夫人其外の御親族のやすに及はず優陀夷夫婦光明大臣數多の群臣達も皆く力なく思ふが上に種々の障り事のみ有て無狀はや十二年を越たれども太子の安否の更も聞はず勿論先般阿私陀仙が告たりし詞にの太子一度の還幸爲せ給ふとありし故其を候みて待甲斐もなく斯星霜を積と雖も其沙汰のなれば自ら皆仙人の詞を疑ひて淨飯王も此程のいどい御心を惱せられて政事さへ疎なりしが或夜御寢の御夢に摩耶夫人の遺骸の埋り給ひし彼の夕陽山の御廟の傍りに在しつゝ麒麟鳳凰の現れ出しを御覽じて夢覺給ひしが豫て此二つの物は聖賢の現るゝ證に出ると知し召は頃日の御體氣に力を得給ひて殊なふ歡びて其夢を優陀夷光明にも語り聞せて俱に心を慰めんと其拂曉に二人を召れて云々と語り給へば優陀夷の手を拍て大きに歡び某しも亦正しく昨夜如右なる夢を見侍りぬ日も夜も違はざりけるの最も不思議にいはずや左有は極めて悉達太子の此節還幸有べき事疑ひもいれまじと聞へ上れば光明も近く進みてやすやう君の御夢に違ひなき優陀夷が夢の物語り實に難有き例

しなり开も麒麟鳳凰の生たる虫を食す又生たる草を踏す尤も吉瑞の靈物なりよしや尙ほ空  
 頼みにて太子の戻らせ給はずとも御代萬歳の其歡びに此宜性にて知られたり必ず御心安か  
 れと祝しやて退きぬ優陀夷の尙ほも近く進みて豫て御聞に入れ置し某しん太子の御還幸及  
 ひ子息榮特が智慧祈りの其爲も鶏足山の帝釋天へ日々參詣の其日限りも今日を限りには得  
 ばはや身の暇を給われかしと云つゝ直ちに御前を退りて衣服を更め榮特の何處に予疾々ど  
 急し立れば女房の今より例の如くに御參詣爲さるゝにや榮特の今も方奥の方へ參りしが毎  
 度妾が聞ゆる如く足らぬ者を引連て遠方の御參詣なれば道とて婿の明されば御腹の立の  
 お道理なれど戻り給ひて何迎も夫の是のとお呵りを聞度毎に胸迫りて妾が身骨を痛むれば  
 今日御參詣に一人が宜しからんと存じます愚鈍な者を伴ひて道入て腹立給ひての穢  
 れを厭ふ神參り宜敷事の侍るまじと良人を思ひ子を思ふ利發の詞に優陀夷の點頭實に其詞  
 の道理なり唯一筋に子を思ふ間にのあらぬと家の爲如何にも爲て彼れが身の愚鈍を祈り直  
 さん迎連往度に何一つ是の好と云ふ事もなく往も復りも腹のみの立を思へば尊き神佛の何  
 逆利益ある可き予此方の心清ければこそ願ひも納受有べきと噫我ながら迷ひたり然る今日

の我一人馬に鞭うち走らせて潔く參りて來ん欲に限り無きものされど何卒して榮特が  
 人並にいろはのいの字も知るならべ外に望の更なすと云ふ内に支度も調ひつゝ麻より馬  
 を引かせて閃らりと打乗りて乗出しぬ女房の良人を見送りて扇の廊下へ戻り來しに先に立  
 した侍女が噓と云つゝ打伏に予駭き那方を伺へば白き小袖を身に纏ひ面眞黒なる化性の者あ  
 り流石の女房も肝を冷して詰合の侍士衆早來られよと呼聲に那方の一室に詰合侍士何事な  
 るやと出來りしかど是も亦一目見るより驚きて進み兼たる其内に彼の變化の奥の方へと駈  
 往後容を疾も女房の見留て面色を直し彼の侍女と武士に向ひてノウ恐れまし那の者の妾  
 が見知りし所われは今にも捕へて憂目を見せん先穩便にして給と云つゝ急ぎ我部屋へ返り  
 來て戸を開入らんと爲るに件の變化の内に居て又も聲立威せども女房の恐るゝ色もなく早  
 速に捕へて冠りし衣を掻ぐり除れば思ふよ違はず而眞黒に我子の榮特の口を明舌を出して  
 笑へる狀の白呆鳥と見へにける女房の呆れて語さへ言れず面つれくと打守りて唯泪のみ  
 降溢すを見つゝ彌笑ひ出す斯る所へ近き部屋に住せらるゝ耶輪陀羅女の扇の來て女房  
 に打向ひ優陀夷様の最早御參詣に入らせ給ひしかと問れて女房の泪を拂ひつゝ扇のか夫

ハ早先に出で往たるが此樂特を見て給へれ此間より優陀夷に連れられ俱に參詣又往けるが道にて何を致すや優陀夷の部屋に戻るや否や何の事も言はずして唯此子が足らぬ事を愚鈍く口多に良人を輕しむ事と思ひて唯聞て居る其辛さ今日の尙更滿願ゆへ伴ひるゝの知れて有と後にて又もや阿らるゝを聞か否かに其方を頼みてお部屋の内に隠して貰ひ今日の一人遣りたるがマア此形狀を見て給れ面の眞黒衣の白服定めて姫のお小袖ならん是を着て廊下に立出人を却す惡徒ら左程の智慧が有ならん少しの物の弁へも有んに親の面さへ見覺ぬ白痴者も父の恐きの少と計り知りて居れども母親を侮り過たる此仕末呆れ果たることにころ我子の白痴の恨みぬと此身の因果が悲ひと儲と突除いと尙ほ泪に咽て伏たるを局の見兼て種々に慰め勞りて樂特の面の墨を洗ひ落し身繕ひ杯を致させつゝ實に此方さんとした事が過し頃より手習を初め今日も先迄温和お部屋に習ふて居給ひしが何の問にやら而を染耶輪陀羅様の御服を持出惡さも事に依るもの予惣別人の子たる者が母様や父様を侮る事の有へきや之から岐度温和く手習を精出さやんせ其方とお部屋の羅喉羅様との親と子程年の違

ど若様の毎日々日お手本も能く上り暗て誦遊すよサ母様への託事に先刻教たいろはにほへど好く書てお見せ成れ硯や机を持って來んど身も氣も軽く立出て部屋へ返りて親と子の機嫌執成手習道具之急ぎ持て來て座敷に直しつゝ墨摺手本押披き筆を持せて草紙を披き手を取つゝも教ゆれば手計り任せて他見を爲し局が書に異ならぬいろはにはほどの仮名文字も美事に出來しを局の持てゆき女房の側に寄りて是これを御覽せよ是ほど文字さへ書給ふに愚痴と思ふの其方の僻めと宥る詞に女房も不圖其草紙を手に取て見れば文字の出來の好さ局に向ひて打微笑之の毎も辱けなし其方のお世話にて是程に出來し事の歡バしき優陀夷殿も今日參詣の出來いろはの一字なりとも書せ度と言れし故返らば見せて歡バせん毎もお世話に成計りにてお禮の中様もあしと厚く勞ひ樂特が持出したる姫の小袖を渡してよしなに執成をと頼みて局を返し遣机の側へ立寄りて見れば樂特の早手本にもなき物杯草紙に書て紙を費し居たりければ遣や樂特父様が今にもお戻りありたなら今書た此草紙のいろはにはほへどを又書て支へぬやうに讀給へ日外より局も妾も此字の讀を教じが能覺へて居るかやと問へば賢く心得面に點頭者から女房の悦びてさらば母に讀て聞しやハア何と

云たが又忘れたる見よかし夫ならば今一度教るから心に留て忘れぬやう覺へて居やと手  
 本開けて一字宛いろはにほへど何と腹讀てか「イヤ飲込ぬ其様に長くての竟一口に飲込  
 ぬモ少と短く爲て下され」ナ、其苦なり其様ならい「其様ならい」其様ならいの入らぬ唯  
 と計りてよし「其様ならい入らぬ唯いと計りてよし」はて扱いと計り「はて扱いと計り」い  
 「S」ろ「ろ」は「は」サア腹讀しか「短く成てのみ込ました」ナ、腹讀だら一人て讀て見や「エ  
 、何とやら云ふた此頭の字の何とやら云ふたげな」夫れはい「ほんにい」其次の「其次の何と  
 やら忘れた」夫れいろ「ほんにろ」其次の「是の何とやら」夫れも忘れたか「是も忘れた」エ、  
 何と云ふ愚鈍かや四つ五つの小兒でさへもいろはにほへどの仮名文字位の聞覺へにも讀者  
 を唯いろはの只三字を日に千度万度も嘴で合て教ても側より忘るゝ白痴者少し鏡でも見た  
 がよひ願にの髻も生ながら何故に身に染ぬか其次のはの字で有りと聲荒らげて字を突立て  
 教ゆれば是母様其やうに大きな聲で教へられての咽に支へて飲込ぬま少と小音な聲をして  
 飲込せて下されとあどなき事の可笑さも親の身に最辛く持ち扱ふて居る所へ一人の侍女  
 馳來りて優陀夷様のお返りなされて直様御前へ出給ひし由を只今お口の者がすせしと告る

を女房打聞て然バ今に下り給へんう先其方の耶輸陀羅様のお部屋へ往て温和く若宮の御對  
 手せよ扱父様が支度も替やらずして直に御前へ出られし如何なる仔細氣懸りなり様子  
 を見んと急がぬ敷身繕ひして繁特が手を取つゝ立出て耶輸陀羅女の部屋へ連往局に頼みて  
 其身の奥へ赴きける扱又優陀夷の先の程鷄足山へ赴かんとて恒河の邊りに着ける時向ひよ  
 り一個の沙門の杖を浮めて夫れに打乗此方の岸へ渡り來るあり又河の邊りに人立して是  
 を望めて居たりける舟場の騒ぎの大方ならず中よも優陀夷の來るに皆々駭き道片寄て扣  
 へたり優陀夷も亦之を訝りて河の岸邊の渡し場まで馬乗寄て見てけるに如何にも不思議の  
 沙門なれば今向ひより漕寄たる渡しの船長に詞を懸て渠が様子を尋れば船長答へてさんい  
 われなる者の代も出さて此船に乗よと云ふ故我の國王の許可を受けて此船渡しを業とすれば  
 價なき者として犬猫とても乗ぬなり船の我等の命の親なり渡り度の代を出されよ代なくば  
 適のぬ事と云放してあの者一人を後に殘して此船を漕出せしかばあの如くに杖を投込河を  
 渡る奇異さよ渠が如き者のありての我等が業の妨げなり一体茲等に見馴ぬ熊形なれば油斷  
 のならぬ曲者なり茲へ來らば打倒して世の見せ示に爲て呉んずと吻きつゝも船を差寄優陀

夷を乗て渡さんとするも優陀夷の之れに乗りもせて彼の沙門の陸へ上るを見るよりも家臣に云附て何國より何國へ通る者あるやと尋ねさせれば彼の沙門の此御國なる迦毘羅城へ推參する由を答へければ優陀夷の忽ち馬より下りて近く進み沙門に向ひて御坊の開如何なる筋ありて迦毘羅城へ參らるゝやと問ひければ此方を熟々と見て俄然に敬ひ述るやう遣ひ何人と思しに迦毘羅城の御一老なる優陀夷大臣にて在せしかまた拜顔致せし事なければ御存じの有問敷が愚僧の舊獅子嶽と名乗し者にてしが唯今の釋迦如來の御弟子の一人にて舍利弗と呼ばれ侍りぬ又彼の釋迦如來と上るの即ち迦毘羅城の若宮様悉達太子に在すなり今其御使を蒙りて茲まで遙々参りたりと聞よりも優陀夷の飛立思ひにて御身は若宮の御使とあらば片時も猶豫ならず疾々君に聞へ上ん我の茲より早馬にて急ぎ侍れば御坊に後より緩々來られよと云も終らず再度馬に閃りと飛乗て諸鎧に鞭を加へて馳去ぬ程も有せず迦毘羅城の門外まで乗若て見れば不思議や遣ひ如何に舍利弗のはや我より先に來りて彼處よりみ居たるが優陀夷が唯今來るを見て大臣杯て遅かりしぞ待詫たりと云懸られ大ひに驚きて其神變の奇特にいよく感じ入り馬より下りて會釋を爲つゝ先に立て宮中へ伴ひ二室に

請じて此由を優陀夷より直々に奏聞を遂しかば淨飯王の夢かど計りに歡び勇て早速廣書院に出給ひて御前に召れければ舍利弗の進み出禮拜しつゝ敬しく如來の仰せを述るやう恐れ乍ら直々に聞へ上奉るゝ如來發心報謝の御爲に密に王宮を出させ給ひて檀特雪山の難行を十二ヶ年間勤め給ひて成道正覺を遂させられ鹿野苑を初めとして國々を廻りつゝ所有衆生を度し給ひて今舍衛國は渡らせられ父帝を初め奉り御親族御家臣等にも御對面有度として愚僧を先御使として御機嫌を伺はせらる何卒如來越方の御不孝の罪を免されて歸洛の勅を下し給ひし如來を初め奉り徒弟の面々に至るまで大慶至極此上やいへべきと言上すれば淨飯王の彼の優曇華の庭前に咲し如くに悦び給ひてあら嬉しき如來の傳言哉渠飽迄も節を守りて父を敬ふ孝心律義などか昔の罪を咎めんや唯々疾く對面致たし汝ぢの我家臣を伴ひ舍衛國へ赴きて急ぎ歸洛を致し呉よと悦びつゝ涙を拭ひて仰せ有ころ有難けれ舍利弗も亦深く打悦び遣ひ有難き仰せかな尤も先に舍衛國より同じき徒弟の目蓮を摩羯國の竹林精舍へ御使に遣はさる是御歸洛の御思召ゆへ彼の精舍に残れる者を呼寄給ふ爲になん然る愚僧舍衛國を發砌りに如來の再度愚僧に仰せらるゝには我の此より久耶尼國婆羅婆國を打廻

りて迦毘羅衛國と摩迦陀國の境なる波優祇耶の市にて再會致す可しと示し給ひたれば愚僧  
 の此より彼の市へ志し侍るなりとすせば淨飯王の尙ほ歡び給ひ开の我國に近き所なり急  
 き車駕を飾らしめ官人數百を差添て俱に迎ひに遣す川しと嬉敷餘りに宣へば开の以ての外  
 ところ如來の正覺を遂給ひての野に伏山に伏給ひて更に淨世の美を好み給はずお衣迎も徒  
 弟等と異りし事もなき程なれば警護の人數及び吳服の詮議の堅く御無川たる可きなり給て  
 御歸洛の事に附ての愚僧が奉行仕れれば愚意に任せ給ふ事は何より如來への御待遇に侍  
 るかして告奉れば淨飯王も實に然る事も有らん扱さる尊き身と成て淨世の塵の積りた  
 る王宮の如何ならん若し穢れども成ものならば俄然に新宮を造り立夫へ迎へ侍らんや此儀  
 の如何にと宣へば舍利弗答へやすやう其御案事も然る事なり左のわれ新たの御造營の思ひ  
 も寄ぬ事にとる夫より若し如來の御爲を思召なば御母上摩耶夫人の埋り給ひし夕陽山の  
 麓なる青龍殿に迎へ給ひ、嘸御悦び有べしと告げれば王も开の何より心安し其儀にこそ定  
 むべけれ然らば優陀夷の舍利弗に附て件の市に赴く可しと嚴に仰ある此時迄も優陀夷の女  
 房の簾の小陰に立聞せしが今若宮の御歸館有べき様子を密に伺ひ知りて心漫に飛立計り

堪へ兼御前へ出て淨飯王へやすやうあら嬉しき私しも夫と俱に参りて少しも疾く御目見を  
 仕つり度侍るか此儀御免蒙り度と願ひすせば淨飯王开の如何にも尤もなり餘人と違ひて  
 其方の太子が生れし時より抱き懐へて守立し故我子よりも愛の増す思ひも爲ん左もわれ今  
 の凡人ならぬ太子の身の上なれば女の身として途中迄出迎も如何なり先差扣て優陀夷を遣  
 し迎へたる上にて緩々我と俱に對面せよと余儀なき仰せに女房も今のは非なく其儘に止り  
 ぬ扱又優陀夷の詞を改めて私の子息樂特の異なる生れよて中々以て國家の役儀の勤らぬ  
 ば今回何卒如來の御弟子に差上度と願ひけるに心任せに爲よとの仰せなれば有難くお請を  
 なし又舍利弗が恒河にて云々の事ありしと渡し船の不思議を奏せば帝の其神通を尊び給ひ  
 て然らば此より川々の渡し船及橋々に至るまで僧たる者の無錢よて渡す可しと勅あれは優陀  
 夷の是を悦びて其道々へ觸令しける是今の世までも出家の類の渡し場無錢の初めなりとす  
 斯て優陀夷の樂特を伴ひ舍利弗に隨ひて波優祇耶の市へと出立ける「去程に迦毘羅城に  
 今回如來不圖も御歸洛まします由に付夕陽山の御墓守初大臣を召出されて其御用意を何異  
 と仰せ示させ給ひ又御一門の方々へも此旨を聞へ知らせ新しき絹杯を贈られて太子御歸洛

の節の夕陽山に参す可しとぞ觸られける然るに何の故ありてう難陀太子羅喉羅の君及ひ耶  
 輸陀羅女好容夫人已への聊かも此御沙汰さかりしかば人々太く怪みしが這の全く過つる頃  
 彼是葛藤の事ありし故の事なるにや扱又橋邊彌の御方の此御沙汰を聞も敢ず一度の此上な  
 くも歡べれしが又太く哀み給ふも道理なり太子此宮に在せし時の假にも母君の御扱ひにて  
 世に時めきし甲斐も亦く今の眼も瞽果て物の色めも別たずなりて太子に見へ侍る事の悲し  
 くも辛さは限りなし無かし賢き御容に成れたる事ならん一目見もして其後の兎も角も成  
 なれ何卒歸洛の日計りの此眼を明て唯一目見進らせ度思ふなりと贈り越されし巻絹を探り  
 つ掻撫て身を悔給ふ泪の雨側の見る目もいぢらしく何と言山ん詞も亦く威々袖を予濡せし  
 が堪へ兼てや年長なるお側頭と思敷女中が進み寄て諫るやう這の怪しからぬお歎きかな如  
 何にお眼が不自由に成せ給ひしとて开の御病に侍るものを何か苦しう侍らんや人の高下に  
 拘わらず病あるの世の習ひなり然るころ人の身を病の器どのやすならずや病を憚り給ひ  
 ての片時世に在し難かりき其所を能々思召て久敷お別れ遊したる太子に見へ給へかし太  
 子も無や御前様に逢度思して在さんに御遠慮遊ばす事かいとやせと御頭を振給ひて否々左

にの非ずかし其方が詞は尤もなれと妾に受られず开を何故と云ふならん唯是病計りなら  
 何の恥らふ事なきが妾の昔より種々の行ひ有ゆへに此儘太子に見へるが見よ不肖なる心  
 より斯不具の身と成し杯思ひるゝが最幸し何様考へても思ひても此絹の受難し其方の之を  
 持行て優陀夷の女房に差戻し女人と云ひ斯計りに不自由の身をも願みず晴々敷所に出るの  
 先第一帝の御恥なり妾の太子の戻らせられたる上にて緩々後日に對面すべし御歸洛の日  
 参らずと斷り云ふて来よかしと宣ひするを押返して御意の旨の畏み侍りぬ然ながら開の  
 圖の御心慮哉恐れ乍ら貴君様の御御事より侍らずや餘人が扱て然る事に心を附る事の侍ら  
 ん唯お氣もじの濟ぬのも御自分様のお心一つあり切角の此お贈り物をと云ふを打消橋邊彌  
 の兎も角も妾が言附しとを辭まで疾々斷りてよと又の仰せよ是非も亦く女中の彼の絹を持  
 行て優陀夷の女房に斯と告げ不審乍らも受取ら女中の其儘立返り斷り来しよしを告居る  
 所へ優陀夷の女房の彼の絹を自身又持て入り来り橋邊彌のお前に出て唯今云々の仰に侍れ  
 ども御前様に如何思すや彼程に愛度事どもの又有べうも存せねば此方より願ひても御出  
 の有可きに御眼不自由なるを言立て御不参を遊ばしての君への聞へも如何あらん押ても

入らせ給ふやう私し存じ侍るなり併し外に又思召も在すならん包まず仰せ下されかしと  
 流石女房の道理を盡して述べければ橋邊彌の取らひ給ふ氣色なりしが如何にも開の尤の事な  
 り別儀とての外でもなし不圖開侍るに難陀の君羅喉羅の君への是等の絹も贈り遣りし給ひ  
 ぬ由左すれば歸洛の當日も御對面ひなかる可し是の定めて日外の事の有るころも道理と  
 云ふもの、羅喉羅の君には聊かも罪科の有様なれば願くは妾が戴く此絹を羅喉羅に下さ  
 れて當日父に會せ給ひ我か悦びの如何計り予何卒よしなに取計ひて返すくも此絹を羅  
 喉羅又贈りて自らの代りを勤めさせて給と羅喉羅の君を重んじ宣へば開に至極も道理なり  
 併し上にも何か深き思召の有るころ御兩君を初めにて其腹も今回のお指揮なき事に侍  
 れど夫も御歸洛遊す其日に何様か御沙汰の有べき故貴女様も其思召にて帝の御意又任せ  
 給ひ先御心能御對面遊ばさるゝが宜しかる可くと憚り乍ら存じますとて割口説つゝ漸くに  
 先御得心をさせたりける扱又耶輸陀羅女の部屋の内には樂特の居たりしに何か知らず俄  
 然に迎ひの來りしより御部屋の間は何事なるかと心を付て見聞するに其様子の一方ならぬ  
 ど年頃日頃親敷中なる優陀夷夫婦も其仔細を明さぬば耶輸陀羅女も深く怪みて又何か事の

葛藤の出來もせしかと案事られ先橋邊彌の御前へ出なば大概様子も知られなんと夫どなく  
 橋邊彌の御前へ参りしに消き絹の包みわれ何心なく其品の麗しさを賞ければ開の今回羅  
 喉羅の父歸洛に附ての下され物予と聞より吠と耶輸陀羅女の飛立計りに嬉しやと悦び乍ら  
 も哀しきの誰より先に優陀夷夫婦が妾に知らせて呉べきに左になくて茲にて初めて開知り  
 たる恨めしきよと思ひしかと流石慎みの深ければ其色の少も見せず先橋邊彌に打向ひて私  
 しとの未だ左様の事を承まはり申さざりしが開の實かわら嬉しやあら歡ぱし、此上共何か  
 のお指揮を宜敷と風も柳のなごやかに云つゝ一人氣の急儘又御前を退りて部屋に立返り先  
 羅喉羅の君と局に打語りて今にも御沙汰の有べしと心待に予待にける借又此際何の間に  
 か破利舎那殿なる好容夫人の部屋に侍女が聞出して是の兼々難陀太子と人知れず契る者ゆ  
 へ今日悉達太子の御使に云々の者來りしと告れば難陀太子の打駭き先好容夫人に斯と云は  
 好容夫人も太く力を落して餘も返り有まじきと思ひの外にこそ扱ひ彌其方様の御  
 世繼に成れまじ然乍ら悉達太子の御世を繼るゝ憎からず羅喉羅の君に繼れて其道違  
 へば口惜し然乍ら事荒立て道理を述んも如何なり今にも夫等の御沙汰があれは快よく何事



も扣へ目よして在せかし命と頼む命婦も失て便り少な御身あれども然とて同じく帝の御胤なれに左迄に幸くのせられまじ斯る時節の尙更に御父上が大切なり急ぎ先御機嫌を伺ひに出給へ左わらば何とか御様子も分りやさんと最賢くも教て出し遣りにける間もなく此方へ下り来て御前にて更に左様の噂杯あかりしと告れば好容夫人の怪敷思ひて借の偽りなるべきり其侍女に今一度妾が直に聞へしとて膝元近くに呼寄つ能々事を糺し問ふに彼の侍女の忠實に實其事の儘めて已に早優陀夷殿の其お使と同道してお迎に往給ひし由内々にて聞侍りぬ違ひの有じと明白に告るを聞て好容夫人扱の紛れもなき事ならん左わらば歸洛在してより其御沙汰の有べきあり此上の越方の違ひし事ども已に云償ひて安心のせしもの又橋邊彌の方より兎や角どなき事をも有じ如くに悉達太子に告じ上此方又害心あるもの杯どの説言も御身侶俱を苦しめらるゝ事もわらば誰を力に頼む可きと他所眼憚る縁事も身を知ればころ今更に好容夫人の胸の内唯行末を思ひつゝ川浪風立も道理なり扱又今回本國へ如來の御歸洛在す事の忽ちに諸々へ聞へしかば御親族なる阿難太子の御父の歿去て今の阿難太子が國家の主なれば其御悦びの使として老女を越れしかば優陀夷の女房の

之れを客間へ通させて其口上を聞程に使の老女の阿難王よりの進物の品を差出して今回御國の御長男なる悉達太子の御歸洛の由を聞傳へ給ふに依り御悦びの爲此品を進ぜらるれば其方より宜敷御披露下さる可しと述るを聞て優陀夷の女房這の御念もじの御使御太儀も存じ侍るあり然乍ら阿難様の儀の帝を初め臣家の者も一同に後目だと思が故此度太子歸洛の事も此方よりの知らせ給はず然るを斯御悦びのお使者と申て御進物まで贈り越給ふとも素直にの計ひ難かり先帝へ伺ひ奉るべし御沙汰の有まては須臾の程是にお扣へ下さる可しと言れて老女の面色變道の不審なる仰せかな帝と阿難様との叔父甥の御仲らひ悉達の君との御従弟どちなり斯る親しき御間柄にて其音信絶へて濟まじきに然るを帝を初めとして御家臣迄も我君を後ろ目だと思ふゝどの如何の儀も侍るにや仔細をお聞せ下され度と云に女房容を改ため然らば彼の御方ご此方へ對せし不品行を搔摘てす可し開の過し頃悉達太子の御伽なる瞿陀彌の方の御暇給のりしが以前此御殿に居給ふ頃よりして阿難様の密通を語らひ給ひて御臺柳花夫人の有が上に彼の瞿陀彌を愛給ひて表向の可難様又娶する事と偽りて柳華様を賺し拵へ契り給ふも今の早誰知らぬ者かと聞くと又可難様とても彼の瞿陀彌の事

に附て道ならぬ事のおれば白飯王の怒給ひて御勘當ありし旨此方へも聞へたれば此方も矢  
 はり御同様なり況んや阿難様の事の其罪いと重き故之も程なく此方より御勘氣あらんも  
 圖られず斯る次第に侍るがゆへ今日の御使の是迄にして上ぬが却てお爲なる可ければお  
 氣もじ乍ら御進物を御持返り下さるべしと阿難太子が不義放埒の形勢を説示しければ件の  
 老女の一言一句の返す詞も中々に只面赤らめて吐息を繼仰せ聊か御無理に非ず其旨戻りて  
 聞へ上可いながら此上とも又宜しくお取扱を願ひ侍る事もあらんと詞を殘しつゝ進物  
 の品を引下させ立際悪く暇を告朔然と立戻り來て扱重役の者に彼處の不首尾を具に告又云  
 くのお腹立にて御進物の云ふも更なり御口上さへ御披露なく此方の君阿難様にも淨飯王よ  
 り御勘當有可き様子又侍るなり遣り開も誰が業と云ふに此れ皆瞿陀彌女が徒らよりの事な  
 れば御思案なくて適ふまじと告れば重役も頭を掻如何様左も有べしと兼々怪み居たる  
 なり假令君の御愛女なりとも迦里羅城に那の瞿陀彌を見返る事の成べきや何よも手術を旋  
 して御勘當を詫されば國家を安く保難し兎も角も先我君を諫せんば有可からずいざ侶俱よ  
 と老女を伴ひて阿難王の前へ出けるに阿難王の此程終日唯瞿陀彌女とのみ語ひて一室に垂

籠居たまふ故老女の瞿陀彌を呼出して密々の事おればとて須臾那方へ遠避つゝ二人お前に  
 進み出先老臣の諫るやう扱兩人改めて唯今言上仕るを御心に能く聞召開も日外より瞿陀  
 彌を此所に止め給ふの御臺様の兄君なる可難太子の御爲と承給り侍りし所開の跡方なき  
 虚事にて君潜かに睦給ふに以ての外の事にころ定めてお聞も有可きが可難様の瞿陀彌の事  
 にて御勘當になり給ふ開の何の故といふに渠迦里羅城を下りしかど一方ならぬ御親族の後  
 妃に一旦据りし者と不義の風聞あればなり白飯王の斯迄に義を立られて迦里羅城を敬ひ給  
 ふ其中に君の彼を引入給ひて閨のお伽に爲せられ親御様の免し給ひし柳華様を情なくも見  
 棄給ふどりの義とや言ん非道とややす可き更に人倫の所爲あらず何卒御思慮在せられ度臣  
 等が願ふ所なりと云ふ老女も片邊より然らば此度悉達太子の御歸洛に附私し儀其御歡びの御  
 使を承給りて御進物の品を薦し侍りしに優陀夷の女房應對の上殊の外に戒められて彼の  
 品々も受取らず右の譯にて淨飯王の我君をも可難様と御同様にて御勘當遊さる可き御様子なり  
 と密に示し侍りきと苦々敷申ければ又老臣の斯れば唯速に御心を改られて瞿陀彌を遠避  
 給ふころ科を購ふべき第一の御誠心にては可し然迎も尙ほ懲すまよ此義をお用ひなけれ

微臣等ハ如何とも只潔白なる計ハ致す覺悟にひなりと詞正しく云詰られ阿難王ハ差俯き  
 右左の返答も爲さざりしが暫わりて兩人に向ひアラ頼母敷君なればころ臣なればなり斯計り  
 に我失策を諫めたれ是皆國家を思ふ所なれば嬉しきとぞやと如何も我心底を疑ひつらん  
 然乍ら我強ちに瞿陀彌を愛て柳華を棄る心なきが日を積月を積其内に不圖等閑なる事に  
 なり道ならぬ事と思へども今更すべき様も無し無かし可難ハ如何計りか我を恨て居る可  
 しと胸に更に忘れぬと又止難きハ男女の道なり我心さへ我心て解り兼るは是即ち迷ひ  
 なり然とも今二人の諫言を争空敷聞棄べき我遠からず分別して天晴事を謀りつゝ迦毘羅城  
 の勘氣も詫又可難柳華の恨までも晴して見せん兎も角も今須臾免して呉と左も潔く宣ふ  
 を聞て二人ハ三拜しつゝわら有難き仰せかな愚なる詞をも速に聞召されて御得心下され  
 し段實に國家の幸福なり尙ほ此上とも御油斷なく宜敷計ひ給られかしと詞を揃へ述終りて  
 二人ハ其座を下りける去程に阿難王ハ左迄瞿陀彌を愛るにわらぬと渠執念くも戀慕ひて片  
 時も側を離れぬバ流石に阿難王も心迷ひて一日く契りも染て竟に柳華に見替つゝ深く  
 睦て暮しけるが今老臣老女の諫言を聞て俄然に身の不義を顧み今是を退けずバ後に詮方

なかる可しと已に心を決したれども色には少も現さず頓て瞿陀彌を呼するに瞿陀彌ハ最前  
 二人の年寄より側を退けられ夫より物の陰に泣伏居たるを侍女どもが運來りてお側へ進  
 め侍くれバ阿難王ハ不審の面色して這何故に泣ぞや我呼事の待兼てかど賺せバ瞿陀彌ハ  
 泪を拂ひ何か知り侍らねども二人の重役が御前へ出られ妾を避てのお物語りの唯事なら  
 ずと思ふより頼り又哀く咽り來る泪の身を知る雨と云バ若しや我身を追出すべき事ならず  
 やと案事られて其れを歎く事にこそと云懸て尙ほも泣止ねバ態と駭きたる様にてイヤ決し  
 て然る事ならず彼の兩人ハ久敷我機嫌を聞ねバなりイエく夫ハ偽りなり妾が事又違ひ  
 ひなし然らバ實を明す可し何を隠さん其方をバ可難に娶ハす積りにて是迄匿圍置たるを  
 斯割なく契る事となりたれば此事既に迦毘羅城へ洩聞へて我御勘當を蒙りたり其方も眞實  
 我を思ハ是非可難に添て給らぬか左すれば勘氣も免されて可難も無かし歎ばんと穩便に  
 云聞すれば嬰陀彌は袖に縋り付ろりや嘘となり眞實妾に愛想を盡給ひて事を設て妾を追出  
 し柳華様と陸敷契り度御心の早神懸て遠から知れて居ります如何なる事のあれば迎妾は  
 御側を離ればせず今世は愚二世三世其先つ其世迄も夫婦や過つる頃のお詞に父さへなく

心安しと仰せ有しが實ならん父上のはや歿去給ひて君の御世と定まれん見棄給ふ善いな  
 しと身を震ひせて掻口説執念深き詞を聞流石は阿難王もあやましく呆れ果しが今早渠を  
 殺すか我死すかの二つに一つの手詰となりて胸の張裂計りなれど其氣振を悟られじと其夜  
 の殊に深く契りて心を落居さすと雖も罪陀彌の更も浮立ず唯泣て已添臥を持扱ふて居た  
 りしが不圖罪陀彌の起上り襖を開て立出る後影を見送る阿難王の思案は呉し胸の内迎も討  
 より外になしと思ひ詰はせしもの、是迄深く契り乍ら些少な科もなき者を討どの鬼畜の業  
 ならんといふ云へ此儘に棄置て我身の破滅の兎も角も開國家に替難し噫何と爲んや、夫  
 よ畜類とも云ふ云へ恨は恨め此期の迎も延しがたしと枕元なる差添を手に取直し夜着掻遣  
 りて氣を鎮めつゝ扱事を告て斬べきか欺し討に討べきか事を告なば女の常にて直ぐ素直に  
 の討れまじ殊に執念も深からん左にいへ欺し討に爲ならん最憫然の事どもなりと能いぬ思  
 案は胸轟き途つ追つ折こそわれ胸に聞ゆる足音に仕損じて甲斐なしと闇の燈火吹消て  
 欺し討に心を定め息をこらして居る處へ探り足にて來る音を透せと見へぬ死出の闇漸々間  
 近く入來りて寒間搔探る其手先の此方へ障りて打駭きて逃んとする裾引止め引戻さんとし

てければ掻拂ひれ放し遺口惜きとて追廻り又引損の衣ならて結び目ほぐれしまごき帯其ど  
 も知らず得たりと思ひ眞後より斬懸しに帯の半を切裂つゝ其端手元に残りたり罪陀彌の刃  
 の光りを見るよりも玉切聲して逃様に片邊に立たる對建に痛と厭きつゝ次の間に予轉ひけ  
 る阿難王の氣を焦ちて罪陀彌の何處へ逃す可きと云ふ聲聞より次の間に潜り居たる者あり  
 て踊り出つゝ當るを僥倖己れ罪陀彌思ひ知れど襟髪擱て首討たり折柄老女侶俱に數多の女  
 中も出來り燈火差出し聲々に何事にやと立騒ぐを老女の押留篤と見て這り誰かど見進らす  
 れば可難様に在るかや开も其首の何者のと云ふ可難太子の眉釣上ヤア我誰が首をか討ん  
 不義放埒なる阿難めど罪陀彌が死面見ん爲ふ取を忍びて今日迄の辛苦の詞に盡されずいざ  
 此上の阿難が在所を包み匿さて案内せよ妨げ爲ば盛しにせん何となくと身構つゝ血走る  
 眼の凄敷を少も恐れぬ阿難王斯と見るより走り出アラ久しや可難太子我親族の交誼を忘れ  
 卓法の業にて仇となることい今更臍を嚙に絶へたり斯れば尋常其科に服す可きの勿論あれ  
 ども先一通り仔細を聞れよ我強ちに罪陀彌を愛るにあらぬども渠よりして深くも思ひ慕ふ  
 が故竟戀慕の間に入り不圖不義となりたるも如何なる天魔の魅りてか畜生道の業を爲せし

事の恥かしきよ今に迷ひも覺悟て已に心を改められたれば瞿陀彌にも種々と理解を説とも用ひぬば是非に及ばず我手も懸て首討落し其元まで贈り届て我り越方の科を分疏爲んとて斯今宵の振舞なり抑この瞿陀彌故に貴殿の勿論某と迄彼是科を來せしゆへ此の嬰陀彌を討果しなば又身を立る事もあらんと思ひ定めし折も折其方に討せて我存念の立ずなりしも口惜しと語る内にも老女の目疾く件の死骸を熟々見て此の瞿陀彌どのに非ずと云ふに駭く可難太子の持たる首級を燈に照して睨つ腕つ見るよりもヤ、是いと云敢ず腰打抜して刀を捨側なる死骸を改めつ又首を見つ仰天し這り我妹柳華なり此の如何にと呆れ果たる片邊より阿難王も篤と見てヤア其首級の紛れもなく如何にも柳華我妻なり何迎妹を討たるやと心も漫又詰寄べ可難太子の泪を浮て扱我の今宵忍び來りし其仔細を具に明す可し开も先つ頃瞿陀彌の事よりして我親の勘氣を受流浪の中も折を得て妹柳華に説させて事濟べ其時に瞿陀彌を我に添せんと和殿の詞の頼母敢待と暮せど勘氣の死す愛も重ぬる月や日の恤も絶てや其内に約せし我を他所にして何時り御邊と瞿陀彌女と密に契る事となりて妹柳華も此程の瞿陀彌に圍を取れしと女共の物語り我其由を聞よりも從兄の誼も義理も無人非人

の所行りなど絶ぬ恨も今の身を思は雲時の慎し日々に想ひの暮來て今日に忍に忍れず密に柳華の元に来て何卒阿難と瞿陀彌をば同じ枕に討殺よと教諭せと聞も道理夫婦の中となれば然らば我手も討べければ案内せよと執念も責つ威つ志たりしうば余儀なく我を導て茲も待て寢所へ入ぐ程なく内より逃出る者ありて瞿陀彌と呼懸し聲侶俱に某へ突當しうば天の與と討たる者の妹なりシテ瞿陀彌の何處も在やと問は阿難王も歎息して然らば開の思ぬ過なり既に先にも言つる如く我瞿陀彌を刺と思ひ燈火消て待所へ摺足して來る者ありぬ此瞿陀彌より外になしと暗き紛に見も糺さず引捕つ討たりしに刀短く仕損じて帯切裂て逃せしうば追止ん迎渠名を呼り即ち某となり左すれば科の此身にあり何の兎もあれ先疾く瞿陀彌が行方を索來よと有合女中達ハ吠と返答て茲を立出各自手配をなしにける其時可難太子の容を繕否某こそ過どの云ながら貴殿の妻を討たる者なり速に首討よと襟くつろげて差寄る否我こそ一言の過より貴殿の妹を討たり某の即ち貴殿の妹の敵なりイザ我首を討るべし否我を討否我をど互ひも義を争ひて暫時の議論も止ざりけり

釋迦八相倭文庫三十二編終

釋迦八相倭文庫三十三編

女房どん今戻つたぞ是女房どんく又何處かへ失居つて日暮も知らず居くさるか噫生憎  
 な日ていゝるぞ爲て嬪伽羅の奥居あるか這や嬪伽羅く是も亦居あらぬか何よしても此  
 儘よての家内へ上られず先此様又濡まぼれた衣服を脱て然バ此儘烟草一吸やるべしヤア  
 く火柄売も濡て水がたる、エ、而倒な何様したら宜かる這りや最筆そ此儘で一寐入やり  
 くさるべしヤンく草臥あつた嗟痛々、己を踏あつた誰だく這りや何じや人間か膝を  
 冷した誰じやいのヤイ誰じやも無ひ者だ此日暮も何處を何様消遙て居くさるぞ是己を見た  
 がよひ此様お成て戻つて先刻から何する氣も無く斯して居るぞよさう云ふ聲ハ我眞人圓滿  
 殿て御座んすか此暗き臺所お寐て居たが其方の誤り堪忍した宜いひの夫のさうと何やら  
 茲等が水だらけなり又酒を飲過して沼川へてもはまらまやんしたな毎迎もく泥たん坊お  
 も困り切ヤイく其様な妄言を吐す隙ふきりくど火を燈して己を見るエ、今燈す所じや  
 はいな遣奴の何を言ても一つく口答へのみするが三度ふ一度ハ夫の云ふ事を唯はいど  
 受たが宜ぞや左様ならはいくく又云ふとて其様又唄々を累ねずとも一つ云ハ事が

足る後の二つの唄々の明日の分取て置其様なら唄之て御意又適ひましたりと云つ、漸々  
 お行燈を灯して夫を熱々ど見て這りやまわ何様して其態の何様も斯も入らぬ疾く若替の衣  
 服を出せ酒と替つた泥水又酔倒れた咄しがある今聞すうら早速とせひテ、其酔倒れて氣が  
 附た未だ酒のあるてあろ是から一杯祝ひの酒を飲其支度を爲て呉ぬ一ありや未だ飯も食ぬ  
 ぞよヤ未だ夕飯も食ずより爲て祝ひ酒どのそりや何故然バ聞やれ己や今日命を拾つて  
 來たぞよエ、命を拾ひしやんしたどの其拾つた命を何處に置いて戻らんした私しや未だ命ど  
 云ふ物の何様物だう見た事かあひ鳥渡見せて下さんせコノ年又不足もなひ癖お白呆いふお  
 も程がある拾つた命の茲お在だれ何處に此茲又滑稽しやんすな夫やお前の大な鼻だ然バ此  
 鼻様の命を拾つたお祝ひは昨日せしめた猪の肉を廻し載て來れ其處の火が起たらバ疾く  
 酒の字を頼むぞよあつと合點疾茲又騰立も爲て置やした夫の御馳走お働きどりや先落膽し  
 く此の腹へ手酌で一献祝ふかア、旨ひぞ宜氣味よ成て來た扱女房よ聞て呉今日ハ飛だ危ひ  
 目お逢てありや今頃の十萬億土の半分路へも往く所を未だ運の尽ぬと見へて助かつた事を  
 聞す可し昨日猪を打た山へ今日も又往たりしよ大なる獸の出來れば又々猪を得たりと思ひ

て急しく銃器を向たりしと猪よのあらして佛々と云ふ猛獸ふして其形の猿の功を経たるお似て人を看ど笑ひ懸而して后又忽ち喰ふ又此獸の猛き事の鬼神お對しても必ず勝と豫てより聞ける故近くへ寄ての適いじと唯銃器を力草玉の有限りみ打けれども皆其玉のそれて打損ぬ間近く来る故遠敷有合松お駈上りて伺ふ所へ又もや近寄つゝ如何も佛々の大力あて松の根元よ手を掛て一捻々れれば件の松させる大木もあらざれば捻倒さる可く見へしうば落なば渠が一口よと思へば高き梢の方へ辛ふじて上りし其枝撓て裂るや否や枝侶俱も眞下なる川へ水入と落けるが固より深き山川の流鋭くして四五丁の瞬く隙お流されしが尙ほ止まる可き方も無く心細くも命の綱と頼むの松ケ枝のみ力限り又絶り居て浮つ沈つよいよ遠く流さるゝと既よ三十丁も及びければ身をも勞れて足も弱り彼の枝をさへ涙よ取れて半死半生の時しもあれ水の上よ物有て我翼よ取絶れと云ふ聲するよ心婚敷其よ絶れば安々と陸よ上られ氣を鎮めて疾見れば不思議や其物の人よ有りて翼さへ八つありて異なる鳥なれば如何も靈あるものと見ゆれば我敬ひて神謝して此報ひの何をか爲んと云ければ彼の鳥のいふよ我の唯水草をとり食として外よ食する物なければ望好む事も無し

恩を思ひ今よりして殺生を堅く止る可し又我茲よ在事を必ず人よな語るまじと人語を爲して云ける故何が扱我已よ死ぬ可き命を助かれ殺生の屹度止め且其方の茲よ在事杯の誰おも知らずする事ての無しと誓ひを立て漸くよ命を拾ひて戻りたりヤア遣りや過つたり其鳥が必ず我事を語るまじと言たるを酒お浮れて打忘れ竟其方よ云ふたるとの噫迂濶な事をしてけり遣りや可笑何も彼も語て仕舞た其後よて自分の口を閉ひだとして問あふ事ての御座んせぬ夫の宜れとお前が又なんぼ年が寄たり迎其様お氣弱く成れての私や苦勞が増ひひの何故と云ふなら眼前今千人と云ふ子を持って追々廣がる鬼界の悦び物の報ひの情のどの夫や人間なんぞの事よして私なら其鳥を賺し生捕て食よするお开の右も左も過し事なり私しの稼も頃日の何處も彼處も子の在所の早懲果て隠し置バ一個も見當らず最早近邊よての仕事もなし今日の迦毘羅衛の市へ忍び往たるよ那處も早國王より觸を廻して最嚴敷出口へ關所を建人の出人を改めさする其仕打の面憎ければ國王の一子を偷て逃出す處を見附られ危ふりしを我術よて姿を消て奪ひ來り今妹摩尼鉢の部屋へ隠し置たるが眼の寄る所へ玉とやら豫て噂の悉達太子が已よ正覺を遂て先頃山を出て暫時舍衛國の迦葉が家お留りし

今回古郷の摩迦陀國へ立還る由を聞たるが定めて此邊を通るべしお前の父御の妙顯殿の  
 提婆様の扶持も預りて敬ゆる者なればお前勿論私しとて提婆様の味方附過し頃身を  
 變じて迦毘羅城の奥向へ入込し甲斐も無くわの優陀夷め妨げられ耶輸陀羅姫も奪ひ損ね  
 危ふき目を見て漸く又恙もなく戻り來しが彌憎き迦毘羅の小子息挫の實此時なり明日疾  
 く妙顯様へ此由を告て提婆様も御用意あるやう致したしヤア開りや實か悦ばし親父  
 お知らする迄も無し我手も挫きて目も物見せん這りや今日思ひも依らぬ旨き酒マ一つ徳  
 利を替て呉よ兎角前祝ひが肝腎だ○開り休題釋迦如來の大迦葉の家も於て迦旃延目蓮を優  
 樓頻螺が許へ遣りし舍利弗を古郷なる迦毘羅城へ遣りされ何れも波優祇耶の市も於て再會  
 す可しと示し給ひて御身の家の主なる大迦葉一人を御供も運られて舍衛國を御立わりし  
 日を累ね往々て迦毘羅衛國も着給ふ此入り口も關所あれ先大迦葉の門外の警護の者も打  
 向ひて我等二人の抖擻の者なり何卒御關を通されよと最懇懃も述るを聞棒を構へし青侍の  
 威權ケ間敷答ふるやう常ふ此關所無ければと過つる年より國中の四民の童子男女も限  
 らず失る事の日も増ものうら其怪みを糺さん爲め處々も斯く新關を立て出入の者を改るよ

今日又國王の若宮の失させ給ひたれば其在所の知る迄一切出入も相ならず夫が爲り斯  
 の如く外番も出されたる程のとなれば中々通しがたし殊も其方達が如き容の者の國中の通  
 がたし戻れくと呵りければ迦葉の再度小腰を屈め御疑ひの尤もなれど我々の身の素性  
 を言んとするを如來の聞て後ろより押し止め遣や待ね我等が身分を明白も名乗まじとて警護  
 の者も打向ひ實も余儀無き御國の控弁を押して言難けれど我等の雲水抖擻の者もて寄  
 邊定めぬ身の上を憐み給ひて通行を偏も頼み進らすると宣ふを聞彼の番人の左迄も茲を通  
 り度バ國元名前を書認め名刺を出して門内なる役人衆へ願ふて見よと言れて如來の困じ果  
 迦葉も私語給ふやう此處の古郷も早近き所なれば慈名乗ば禍ひあらん道を尋て往り  
 如じ其外路の有や如何も問ひ試みよと宣へば迦葉かこみ進み寄て彼の足輕も云けるやう  
 何角手重き掟とわれは關所の通路願ふまじ去乍ら我々の波優祇耶の市へ往者なるが外  
 む路の有問敷や有らば教へ給ひれと言へば足輕打點頭チ、波優祇耶へ赴くよ此山斜段を下り  
 てわれ那處も幽も見ゆるが白濟道の内もて提婆の父解飯王の領内なる猫王山と云ふ山なり  
 おの峰を踰れば直様も波優祇耶の市へ出らる、此關を越て往より見れば百四五十里も



近し然ど如何なる故ありてや昔よりあの山へ入る者の再度び出る事なしとて其道の費を厭  
 いず此所より往者計りなり夫故人倫の往來に絶ぬ茲より那所への三百余里ありて波優祇耶  
 への近路なり此外の皆岩屈などおて往所ある事なしと教らるゝ内如來のはや何の間よか山  
 斜段を余程降させ給ひしを迦葉の是等の問答をかまけて少しも知らざりしが不圖見て駭き  
 つゝ一禮もそこゝゝ云棄て逸足出して御後を慕ひ追附時刻も黄昏時酉の刻よも近けれバ  
 日の西門を鎖して四方の山より雲の湧出魍魎魍魎の叫ぶかと思ふばかりも物音凄じく右  
 も左りも魅のみ響きて最心細き岩坂をも如來の事ども爲給はず御足の進み速なる事恰も  
 之飛鳥の如くよして瞬く隙お猫王山へ上らせ給ふぞ不思議なり扱又この猫王山おの世も類  
 無き仙屈あり其主の歡喜大王と自ら名乗て奢りを極め尤も邪術も秀たり此歡喜が娘も訶利  
 と云ふ者あり或の鬼子母と名乗しを今より遙の先つ年俱足圓滿夜叉も娶せて已も子を千人  
 持り此子五百人の下部の天上も在後五百人の下界も在て常も此歡喜の元も宮仕を爲さしめ  
 つゝ或の謠いせ舞せ杯して世も云ふ盆踊りの如くさしも大勢の孫どもが拍子を揃へて庭  
 前より繰出しつゝ眼前を數多度踊り廻るを見て余念なく打戯れて殊なふ樂みの限りとす折

しも其事の最中と覺ゆる時しもわれ遙麓の方も當り靈々たる金光の輝きて而も我住山の  
 傍りも近寄來る形勢を歡喜の眼下も見出すより滿面嚇と憤りを發し一聲叫べバ忽然として  
 其目前も娘の訶利が現れ出て附居たり歡喜の其光りを渠も見せしめて唯事ならぬ變事なり  
 急ぎ事を見定めよと詞急しく命ずれば訶利も深く怪みて鳥獸さへ音信ざる深山と云ひ殊も  
 又人倫の通路も絶て無き此山路も斯る怪みのある事のは是等閑の事ならず先身を變じて見て  
 參らんと術を以て容を變忽ち天女の装ひをなし麓の方へぞ下り往去程も如來の早茲へ進み  
 給ひて無量の神變を施し給へバ光明より光明の輝きて赫耀たる其光りより惡獸毒虫も近寄  
 らず魍魎魍魎も遠退て安々と山の半腹まで上り給ふと思ひも依らず岩屈の間も石門ありて此  
 ら火影の差ける故茲も雲時休ひて迦葉の足をくつろがせんと石門近くへ寄て見れば天女の  
 如き一人の婦人がイみ居て右見左見て情御身達の何人よ何の爲も茲迄の上り來りし事お  
 やと問ひければ如來の其素振を疾くも悟らせ給へども左有ぬ面もて我々の抖擻の者よて以  
 ぐ岩石も最と足を痛めて甚だ惱み困じたり憐れ聊か休めしめよ説法なして報ひを爲んと宣  
 へバ迦葉も俱お手を下て頼めと婦人の最強面否々茲も人倫の入る可き所も有されバ疾々往

と云敢ず岩の扉を引立て内へ入りたる其後の山清水の音より外の無かりけり「如來の是非も無く門外へ須臾立休ひ給へば迦葉の咽喉を潤さんどて邊りの清水を手お結び先如來へと持來れは如來の夫を搔捨させ汝知らずや其水の水も水も非ず今出たりし鬼女の爲よ殺されたる小兒等の血汐なり能見よとて白光の光りを以て闇夜を照し見せ示給へば迦葉の俄然お駭きて扱ひ先刻迦里羅衛國の關所の者言たりし童を取り那なるや如何も渠なり最憎むべし我此愛を見棄てて正覺發心の甲斐もなし何れども度す可しと語り給ふ其所へ二三才なる童の來りて其處な母様乳飲せて下されと絶るを如來の疾く見給ひ否我の旅の者なり汝ちが母どの誰なるぞ私が母様どの矢つ張私が母様じや先刻乳飲せて居給ひしが私を振捨た故父様お聞たれば母の祖母様の所へ行たゆへ父と察るが厭ならは一人お山へ往と云れて母様の後を逐ふて來まじた開の能こそ來しぞ母様の今來る程も我お抱れて棄せよと如何も柔和宣へば人見知りもせず抱れて小兒の癖かすやくと快氣お眠りければ如來不覺の法を行ひて迦葉が負し負籠を開かせて其内へ密と匿し置素知らぬ面して居給ひける偕又訶利の如來を見定め立戻りて歡喜の前へ進み出て言けるやう渠の是豫て囀の悉達太子と違

いぬは我家へ伴ひ來て亡の御身と小兒は怪我無きやう岩戸を堅く立置たれば這入る事相ならず然れば此より宿へ立戻りて害する手術の豫てより拵へ置たる釣棟の一室へ寐くして一挫ぎ然りと云ふ聲侶俱お其儘姿を打消て均く我家お立現れ圓満の寐たるを呼覺し彼の悉達太子の來り來り猫王山まで恙なく上る程の法を知れば仮初の事にて往ぬ奴御身の急ぎ此由を提婆の方へ告られよあの一室で殺す時の網の鳥と云ながら若しもの事のある時の千日お妨た茅と奇りぬ吳々も妙顯殿又姉の灸匿どのふも夫婦心を一致して提婆よ力を添給へと言次て下さる可しと語れば圓満起て得たり賢し一飛は走らんと爲るを引止めまア待んせ夫の夫と嬪伽羅童子の何處へ往しぞチ、嬪伽羅の先お其方がお山へ往たる後で嬪伽羅云ふて泣くされば一人お山へ往と言し又後逐ふて往たるを余り寵愛過る故己お少しも馴染ずして其方が後のみ退歩行少と責苦を爲たが宜ひコソ何言んす嬪伽羅の産納の男なれば片時も忘られず夫故又祖母の手元へも遣らず措くて有まひか私が寵愛過るじやなひ其方が邪見よする者故夫て馴染が薄ひのじや何卒胎の鳥杯遣ませんか日頃毎日獸の肉計りて育ての虫の毒なり何處お逍遙居る事かどれ見て來ようと云つゝも夫婦の西と東へ立別れて

互ふ出行ぬ夫より鬼子母の歡喜の前へ復び現れ出て云ふやうの扱云々の謀計めて二個とも  
 亡ふ巧なり御心安かる可し夫よりも先氣懸りの我未子の嬪伽羅が此方より未だ来ざりし  
 かど問へば歡喜を初めとし誰々も皆否嬪伽羅の今日の一度も未だ来らず影も見せずと答ふ  
 る故鬼子母の深く案事つゝ血眼となりて此處彼處と探せども知れざる儘に如來の前へ出來  
 りて茲へ云々の童が一人來りせざりしやと索るお如來の頭を打振給ひて否然る者へ來らざ  
 りし扱我々二人を何卒して此の主を聞へ上一夜を明させ給へかしと宣ひすれば渠も亦頭を  
 打振て云けるやう然らば其事なり我我方衆を憐みて種々お願へども更も免されぬ此より纒  
 籠の方より我家のあれは宿賃べしいさ二人とも來られよと云ふよ任せて其宿へ伴ひれつゝ往  
 見れば浦葎いたく生茂りて寂實たる其構へよて物怪しき門口へ訶刺の妹摩尼鉢を呼出して  
 潜かお私語つゝ嬪伽羅のはや返りしかど問へば未だ返らずと云ふや否や満面お朱を洒ぎて  
 開け此儘より置難しま一度索ねて來る可し御客達の緩々と奥の一室へ休給へと云ふ詞さへ  
 口吃る我子の闇を迷へるの鬼神も人より異ならず去程は如來と迦葉の一室お籠られ居たまひ  
 しよ夜も深々と更渡りて最物凄き一家の遙奥へ悲し氣入りの將死なんとする其聲音の

小兒も似たれば如來の他處へ聞乘難く密か一室を出給ひ聲を知べし偵ひ行給ふは怪き一室  
 ありければ物の問より覗き見るよ先は訶刺が私語たる乙女が庖丁を逆手し持環濤して二三  
 才なる小兒を粗お寐かして衣服剝取今已は切裂んとする形状なれば如來のヤ、と聲懸乍  
 ら開き乙女須臾待と宣ひするよ打駭きて持たる刃を後へ匿し此方を見返りて此處は是其方  
 衆の來るべき所ならず疾く戻られよ戻らずば此斯ふと刃を振上如來を自懸突掛る最も危ふ  
 き其所へ不思議や忽然一圓の雲の舞下ると見へたるか四天王達の髣髴と現れ給ひ摩尼鉢を  
 支へ止めて縛繩以て七重八重お縊し上れど渠が眼より些ども見へぬバ訝り乍ら身を問けど  
 更らよ其甲斐も無く只立踞りて如來を睨み立たるを大迦葉の身構して直も取挫んと立寄を  
 如來の如意にて隔給ひヤン迦葉早過ぎし渠の早天臺の縛繩も懸られたれば争身動きの成べ  
 きやと云つゝ乙女お打合ひ如何お女女ぢは是迄造りし罪の報ひ來て既お御罰を蒙りたり悟  
 らば疾く懺悔せよ然らずば苦患を免れじと宣ふおつれ四天王達の縛繩を太く締上ればさしも  
 の摩尼鉢も堪へ兼てお苦し堪難や聊か弛め給へれかし我身の程を語らんよと叫べば自然  
 と身くつろぎ聊か自由を得たりしうら吐息を嘯と繼ながら開も妾の鬼子母の妹よて名を摩

尼鉢と云ふ者なり未だ夫を持されば家又遊びて居るがゆゑ姉の食する人の子を料るを勤め  
と致し侍りぬ爲て其姉の素性の如何然る姉の此嶺に居る歡喜と云る猫王の女よして毎日  
くみ人の小兒を勾引して食とすると年久し然るも今宵勾引して連返りし男子を例の如く  
ふ料理せんとて今庖丁を立んとせし其泣聲は是迄の小兒と異なる聲音なれば妾も不審と  
猶豫所へ其方が來まして遽敷止めらるゝを思ひ廻せば此子の親も有んずらめ若し親御  
ならば返し侍らん早く此幼子を伴ひて疾々茲を逃去給へ此一言の妾が寸志もて苦患を助か  
る報ひよこそ隙取て三人の命も危ふし率々急ば如來の打點頭給ひ歡べしき其一言恩を  
報る心わらば假令鬼畜の身もせよ我説法をも悟る可し姉と妹の血のいつなり然らば姉の  
惡逆をも竟り論し見す可きぞ斯れば其方の是迄は姉の巧し事どもを一々言明すべし是  
第一の孝心もて聊か不義の相成らず最優かお聞へ給へば否此上の故ありて假令命を召る  
るども打明られぬ事のあり唯其方衆の我姉の返らぬ内お逃延るが二人の働きなり我身の越  
度右も左も分疎せんわの子を連て早疾々せられよ其替りよ我手足を元の如く弛へて  
と事を分つゝやすよぞ開言すとも心得たり開も其方の身の苦みを助り度ば誠心以てた

南無佛と唱へて見よ心根安く其三熱の苦みをも死するべし這の嬉しや安き事と此方へ打向  
て南無佛と言んとすれど口籠りて云ふ事の成ねば身をわせりてわら口惜や其一句を云んと  
すれども言難し開の汝ちが心中未だ信心無くして口も已唱ふる故も適いぬとなり眞實心  
を改めて助け給へ南無佛と唱へて見よとありければ實も争ひれぬ佛の道如何も今發起  
せりと言つゝ今回の氣を落付て佛法歸依の心を凝し助け給へ南無佛と速お唱へければあ  
ら不思議や忽然又四天王の其縛をゆるしつゝ邪氣正道無量善と嘆じて立去給ひければ摩尼  
鉢の其身其儘生れ變りし如くなり斯る所へ姉の鬼子母の嬪伽羅を探し飽みて我子も迷ふ闇  
の夜又狂氣爲つれば本体の鬼神の姿を現して如來の前へ馳來りノフ二個の旅人我子を杯  
匿せしぞ疾く嬪伽羅を渡さずやと云は如來の微笑給ひ知らぬ山路へ行吟旅人争か人の子杯  
を隠さん開を何として我も問ふや然らばア那の山は在柳の木蔭お沙門の居て左迄は嬪伽羅  
お逢度ば家も留めし客も問へど一人ならず二人ならず幾人も居て教じぞや爲て夫等の皆見  
知の者もやイヤく知らぬ者のみなれば其名を尋ね侍りしお我々が名も汝ちが家の旅人よ  
問へば知べしと言よきチ、左もわらん扱又汝ちの是迄は幾人の子を持ちや然らば我子の千人

わりぬ見よ左程迄多き子を僅一人の末子を無くせしめて深く悲み騒ぐ事かノイヤ開りや  
 何をか宜ふぞ凡そ親子の思愛の末子こそ止るなれ然からし失し嬪伽羅も九百九十九人の  
 子を比べても尚ほ一人の方が寵しき可愛き忘れぬ心も乱る計りなり疾々出し給へか  
 し然ハ能くこそ開汝ぢの是人の子をのみ多く捕食へども凡そ人間たる者ハ子を持こと二人  
 又ハ三人あて中あも一個の子を持て身も世も替難く養育者を取食ふの如何なる所存な  
 るや其方の現在千人の子を持たながら唯一人欠たりとて左迄打歎くが人間が唯一人の子を  
 捕れての如何計りう歎くべきぞ其方の之れを思はずや其心根を出まほし今我匿せし嬪伽羅  
 を返すとも又返さずとも開此答へ一つは依れり如何よくと宣へば鬼子母ハ泪を流しつ  
 つ如何も仰せの事乍ら我生れ得て人の肉を食物と定めたれば余儀なく人の子を取て  
 年頃一命を助りぬ然ハ我今汝ハ好食物を與ふ可ければ今より後の人間の子を取るべからず  
 然らば食も與へ嬪伽羅をも渡し得させん其替りも我等が授る所の三歸依と云るものを受よ  
 かし此を身も受れば即座ハ六根涼しく殊も未來も尚ほ身を安く持るなり先此三歸依を受る  
 からし其殺生を慎むを第一とす此儀如何よぞやサア夫ハ出來ぬと云ふ事ならハ食も嬪伽

羅も與ふる事の成べきか未來も鬼神の界を通れまじ憫然の者の心うなど仰せらるれば何渡  
 さず逆愛子を取返さずやハ置べきか夫其内こそ怪しけれと負を目掛て近寄ハ迦葉之れを立  
 支るを如來ハ押留て其負を渠ハ渡して見物せよ此鬼子母ハ通力以て金剛力を逞しくし須彌  
 大海を動すとも其負ハ揺ぐまじ見よやくと宣へば鬼子母ハ得たりと負ハ手を掛引寄んと  
 爲てけれども大盤石の如くもて更ハ動す事を得ず又其蓋を取んと爲ても夫さへ取ぬハ流石  
 の鬼子母も氣を落して我を折たる様子を見給ひて如來ハ微笑輕々と件の負を引寄て其蓋を  
 開き給ひて嬪伽羅の手を取やをら抱上給ひヤヨ嬪伽羅を能見上よ汝ぢハ發起の導きも九思  
 の佛の辱け無くも飯も末子と生れ出無常菩提を悟らしむ其證ハ此嬪伽羅の形狀を篤と見  
 よ八十二相備はりて諸佛結縁在せば金光邊りを輝すとして敬ひ給ふ御詞も露も違ハぬ産の  
 子の尊き氣高く愛らしき抱取ん逆立寄んとすれども五脉踰踞て得も立れず狂氣の内も子  
 を思ふ心の實もて今ハ身も世も忘れ果如來ハ向ひて轉び伏わら有難や此上ハ如何なる苦行  
 三歸依をも受奉らん願くハ其子を妾ハ抱かせ給へと鬼女の眼も泪を浮め眞實見へて述る  
 を如來ハ聞給ひ未だ知らずや此子の是汝ぢハ子よしして子ハ有ぬハ抱くハ先袈裟を掛三歸

依を受たる上と云つゝ、如來の身も附給ふ袈裟を取て渠も掛させ且懇切な法を授け而して嬉  
 伽羅を渡し給へば訶刹の嬉しく受取て抱きしめつゝ、撫さすりする優しき狀の姿より似合ぬ  
 乍らも心根の思ひ遣られて不便なり如來の此を御覽じて迦葉を近く招き給ひ最前奥の小座  
 敷なる窓の外よて一樹を見たりわれこそ名を吉祥果とて开も是迄は數多の入り子を取食ひ其  
 骸骨をわの邊りお捨たりし其骸骨より生出たる木の實なれば其味ひ人間に異ならず此を  
 以て此乳母の食物お與ふべしと仰せの下ふ大迦葉の其庭に馳往て彼の果物を取來る是を斯  
 今俗に石榴といふ云ふとなり其時如來の吉祥果を手から取て與へ給ふを鬼子母の進み受戴き  
 て其果物を食試みるお聊か以て人の肉の味ひは異ならず而も旨味の増たれば天も仰ぎ地も  
 伏て歡ぶ余りも嬉ひて云ふやう今日より後有ん限りは是迄入り子を取喰ひし其大罪を購ふ爲  
 我の勿論千人の子も人間の子を相守らせ子無き者より子を授け産婦を屹度守る可く此事  
 の聊かも違ふまじ鬼神も横道今より無しと詞涼敷云放ち一念發起の折こそわれ虚空よりし  
 て瑤瑤と天衣の閃きて如來の御手も留るより是を鬼子母も着せしめて法躰も直されぬ情又  
 此以前も鬼子母の夫具足圓滿の提婆の方より馳戻りて見てけるも案も違ひし宿の不吉さ物

陰にて聞取ば今の妻も妹も力ど頼む可き者ならぬ渠も俱お一挫と兼て準備の釣棟の扣へ  
 の繩を切放さんどて裏手の方へ潜かゝ歩行とすれど心の憤りの自然と現れ足音の荒々しく  
 響くが故も摩尼鉢の訝りつゝ後より往て偵へば姉の夫の斧を以て今既お一室に仕掛し釣棟  
 の繩を切んず形狀を看より吠と取籠り是はノウ雲時待て給兄上圓滿廣告度事の山々ありと云  
 ふ聲高しと睨附て搔拂へども手足も纏ひ尚ほ放さねば圓滿の焦燥己れも俱おと思ひしよ此  
 へ出くさり邪魔するか夫已ならず女房迄二人を賺して此處へ釣寄せ早殺せしと思ひの外辰  
 つて見れば大膽も却て渠も馴親しむ妻子兄弟も今の仇世の壁へも七人の子を産ども女  
 んの心を死すと勿れと實よ我妻の千人の子迄も産ながら頼み甲斐無き今日の仕末我往時ど  
 返る迄纒の間お心變りて我を忘れ親を忘れ千人と云ふ子を忘れ不義非道の心ありて連添  
 事の扱愚影法師見るも腹立ち汝が計りの迫ての事我も同意して渠等を殺しお山へ往て有様  
 を斯と告なば舅御のお悦びの如何計りぞ斯迄も事を分て言聞すれば得心して密にお謀る  
 可しサア其處放せ放さぬか時刻過ての仕損ずると斷を傲して呵り懲せと摩尼鉢の尚ほも頭  
 りを振イヤ兄様お腹立のお道理なればマア聞しやんせ夫も是も謂れありわの二人の身

の上のニ、黙れ聞ずとも知れてある開の悉達太子なりよしや此を遁しても提婆様の方まで  
も已も手筈をなしたれば何様せ通れぬ二箇の奴輩我手も殺せば譽れあり逆も訶利の最う此  
限りあり姉の替りよ今よりの其方の我も運添て千の子を養ひ立て吳よかし此仕事を旨く爲  
れば提婆様の方よりの莫太の恩賞を受るが上は姉の矢匿も賞られんイヤ〜一の姉様よ  
り今の姉よの取分て明暮何かと思あるゆゑ先止りて妾が云ふ事を篤と聞免も角も計ひ給へ  
と掻口説つゝ止められて今詮方無き儘も圓満早速の智慧を以て態と詞を和けて噫成程遣  
りや我誤りなり妻や妹が信する程の渠を殺すの愚なり心安かれ止まらんと云ふも嬉しく摩  
尼鉢の其様なら私しの云ふ事聞て止りて下さんすウアラ有難やと縋りたる諸手を僅も放つ  
や否や斧を振上叩への繩をはつと切つ那方おの大盤石を積上たる天井の一度お震動して  
ドット落くる其の音を殘して圓満は逸足出して歡喜の方へぞ馳行ける

釋迦八相倭文庫三十三編終

釋迦八相倭文庫三十四編

扱も圓満具足夜刃の彼の釣棟を打落して跡を暗まし雲霞も猫王山へと飛行つゝ歡喜大王よ  
聞敷我家の形狀箇様〜と詳りよ物語るを聞も終らず歡喜の忽ち満面も憤りを現して鬼  
子母摩尼鉢の害心を憎み又圓満の變ぜざる心底を殊なく賞ていざ諸共よ彼奴等が釣棟を撃  
れて死したるを見るも聊かの腹をせなれば案内せよと立上るを出来し面なる圓満の須臾と  
袂を曳止め開の御尤もよ〜と悉達太子の此所ふて亡たる事を少しも疾く提婆の方へ報  
知ずば無益よ軍の支度もあらん雲時が程お往て參らんと暇を告て立んとせしよ數多の小兒  
等が一列も居並びつゝ詞を揃へて悲み云やう祖父様も我儘の心を翻改てあの如來様を二筋  
よ信心爲給ふならは三途の難も通れ給はん我々共の母様の懺悔の功德よて今よりの佛果を  
得たる者と成て後世安樂の身お侍りと云ふを聞より圓満の渠等を穢と睨み附てヤア未だ舌  
の根も廻らぬ癖お何を小癩な妄言誰教て言するぞ己れ等が母親の我手お懸て殺してま  
ひ其如來と云ふ奴も母侶俱も亡へり是から變伯を言くさると誰でも渠でも川捨無く嬪伽羅  
の如くも挫殺して仕舞ぞや父が言ふ事を能聞て成人の後親の爲も成り小兒の役なるぞや

祖父様のお側へ居て能くお給事を爲たが宜我の提婆の方へ往ども直様返る程も待て居よと  
 又立掛る袖も絶りて夫のよしなや罷てたべ父様のふと双手を合せつゝ多勢の子が一同お南  
 無阿彌陀佛南無佛と唱ふる聲を聞よりもアラ思々し己れ等の父の血脉を受ながら父を棄て  
 母を附ぞ左程も母が戀しくの残さず捨り殺して死んだる母めも合して呉ふ夫共父が言ふ事  
 を聞かば育甲斐なき奴等なれども免して此に置いて遣るサア何と聞分たかど呵りつ威しつ勝せ  
 ども幼き身ながら如來の方便自我得佛の果報を得て自然と心根の定りけん少しも臆する氣  
 色なくチ、茲も居るのの厭じや〜我儘心の父様も養ひれての未來とやらに奈落の底も落  
 ると聞く我々の唯母様の在す所へ遣つて給疾く〜と同音も威々云を聞敢ず實も此奴等の  
 足手がらみなり我産の子と思へばこそ詞を盡して勞りしが早母の死しども知らずして尙ほ  
 其の後逐ふならば是僥倖の厄介拂ひなりサア來よ俱も息の根を止て冥土の母へ會せて呉ん  
 と云はば數多の小兒等がノッ嬉しやと我勝も手も絶り腰も纏へば圓満いよ〜堪へ兼て裏手  
 の山の高見も連行て何奴等も茲より落して母も逢して呉ずんと數千丈の底を臨ませ劫し  
 ても駭かず何れも疾く未來へと母鳥暮ふ時鳥不如歸と鳴て我産し子の子有ぬ驚の聲音

憎しと先一人を掻搦つゝ差上て夫母親も會するぞと谷間へ深く投て見すれば残る幼子共の  
 我も〜と先を争ひ進み奇を圓満のはや足迄と川捨も情もわらけ無く捕ての投込搦ての投  
 或ひの蹴飛拳飛し無慘や九百九十九人を猫王山の絶頂より抛捨て後をも見返らざる丈夫の  
 魂歡喜の見届大音おア天晴〜首械手械の子の片附如來も最早亡へば今よりして五天  
 竺を魔國とするの汝ちが働きなり疾く提婆の方へ往て夫等是等を告知らせ先一番も迦毘羅  
 城へ攻入る可しと傳へよかし褒美の我等が胸も有と示す折しも遙那方も攻鼓の音喧しく  
 風の間も〜聞ゆる者りら歡喜の耳を欬て岩の高見へ突立上り目の下遠く見下せば數万  
 の軍兵の旗押立て閃く鉾の宛然お野邊お芽花の茂るが如く人馬の物音幽も最嚴然攻來る  
 形狀を圓満も之を見て道何國の兵が何故あつて此山を目懸て斯の押來るぞ但し提婆の  
 方よりして來たる味方の勢なるかと伸びつ縮みつ透かし見れども山の高根の霧も隔だてら  
 れ旗の色目も見分からぬ折りもこそわれ大迦葉は如來の御使ひとして摩尼鉢小案内をさせ  
 て此高山も上ぼり來り歡喜が住家へ到りしかど渠の見へされば摩尼鉢のいふやう然も百國  
 一覽の高岩も在べしとて其處へ往て見れば案の如くも圓満と軍評議の半なり大迦葉の如來



の如意を以て一山の惡氣を拂ひつゝ岩下座して大音を呼て云ふやうア魔王の長たる歡喜大王へ三世俱通の本師佛釋迦牟尼世尊の御使として御徒弟の其一人なる大迦葉茲も参りたり率速にお問答せんといふを聞き歡喜の岩上より踊り上りて髮逆立唯一擷も取挫んと飛掛れどもおら不思議や正道得たる大迦葉が威徳を押し付けて邊りへ近寄れず斷を爲しつ見る程も摩尼鉢も俱に居たりしうべ殆ど呆るゝ計りなり圓滿も此形勢を夢かど計りも驚きて須臾物をも言ざりし大迦葉の忽ち聲を勵して本師佛我命せられて汝も説示す事余の儀も非ず汝が女圓滿の妻なる鬼子母の如來の濟度お依りて已に魔心を翻改佛弟子となりたるは是最大の功德なり汝等是を龜鑑として三歸依を受ける者ならば今世も未來も安樂の位置の自然と具らん左なく佛の御罰を受けて天地の間は住れまじと説教を聞き終らず歡喜の眼を腫れ腫せ遣の舌長き云言かな他國の知らず此山の彌勒出世の以前より我血統の領地ふして時の天下の替りても外にお如何なる者といへども來て住者も無く況んや犯す者も無し然るに今白濟道の提婆の父が領すと雖も此山計り入り手を入らず開も人間に云ふも更なり鳥獸虫蟲に至るまで此山中の草木お觸ぬる時即座お死する程の別世界なり然るに此程汝等師弟

が不思議も此山お上る事古今類是無き例もこそ遣の我運の傾きしかと愁歎臍を嚙しか先も圓滿が來りて云々と物語るを聞き其摩尼鉢も汝等俱にお打殺されしおわらざるやそれ今茲も來るとい先之不審の第一なりと云ふも大迦葉莞爾としておら愚なる事をぞ云ふ開も三歸依を受たる者縦へ水火の内へ入るとも其禍ひを免るれば高の知れざる釣棟の機械や陥し穴の仮初事杯を受べきや斯る難儀のあるとき眼前は天臺より天神を以て救せらるれば彼の釣物の綱一切ても宙お止りて誰一人怪我せし者も更お無し扱又此山の昔より魔王の領となりしかと世尊此世も出給ひて山の角海の底何處如何なる所と雖も佛法の届ぬ方も無ければ過おし頃達婆太子の秘置たる如意摩尼の二つの玉の飛去て如意寶珠の大惡の聞ありし優樓頻螺が手に入るとも渠今佛弟子となり其玉を我師に献じければ其れを龍宮も戻して三熱の苦を除き其一つなる摩尼寶珠の此山も來りて其止る所より柳の生出て自ら觀世音の淨土となり今補陀洛山も及ぶ程の淨刹となりしを以て最早魑魅魍魎の居住お成難し又如何程如來の徳あるとも佛法の縁無き此山へ履を入らるゝ筈のなし已に昨夜彼の鬼子母が嬪伽羅を失ひて此山中を探せし時二人の沙門お出會て嬪伽羅の在所を知り度い宿の客



小問へど教られつるの其柳の邊りて即ち柳体觀音の自現なりと畏くも如來より我を語り  
 給ひ是等の由を歡喜お告正し正し歸するや又尙ほ邪止るや否を尋ね來れどありたり斯れ  
 ば近頃欽婆羅の邪を改めしを龜鑑として志しを相改め今速に如來より三歸依を受奉  
 らずやと聲凍々として説示すを熟々と聞終りさしもの歡喜も心の内お如何様渠が云ふ如く  
 近頃此山も目馴ざる木の生山夫よりして後翹魅翹の眷屬等の何と無く順次く又失果て  
 今斯る奇怪を見る事の口惜さよ然に迎我如何おして怯まんやと彌焦ちて中々も邪を翻  
 改心へ無くて圓滿お疾く大迦葉を亡へて眼配すれども圓滿の今更小氣味悪くなりて猶豫  
 内お早攻鼓の山の麓は近寄ら若しや提婆の味方なるか先見定めんと岩根を下り往んと爲つ  
 四邊を見お是迄の獸はあるか鳥一羽も此山の岩の勿論草木も觸ても死するが故も鳥獸の  
 道さへ絶たりしが何處の里より逐れ來つるか鳥獸の夥敷麓の方より上るを見て圓滿の太  
 く力を落し又寄來る人馬を看れば提婆方の味方おあらして如何なる仇か此山を取巻形状お尙  
 ほ駭き急ぎ此由を歡喜お告れば歡喜の益々我慢を張て然に汝ぢの疾く提婆方へ往て加勢を  
 請ひて集る軍を撃す可し我の茲て彼奴等を取挫け最易し急げくと急立を摩尼鉢の疾く

之を押止めて開の愚なる心なり如來の功德の廣大おて邪を改むれば過去し科を免して未來  
 迄も安樂の身と爲しめらるゆへ今速にお二個共正を信じて歸依おらば今よりして妾等  
 と幾世も同じ法の友朝夕お心安からんと云を圓滿院附て小癡な留立我汝ぢ等と同意する程  
 ならば九百九十九人の子の足手纏ひを棄てせず有餘の惡の上お惡を積て善を挫身と成ま欲  
 ければこそ拔と云を摩尼鉢の又押し止め其方の未だ悟らずや九百九十九人の子を目前お拗  
 れしが其子の母の佛果を得たる功德お依りて慈悲深くも如來の一人も殺し給はず神通力以  
 て受留め給ひしゆへ皆息災なる开が上お今の不殘須陀洹果を得て鬼子母の側お附添居れり  
 疑の敷に往て見られよ夫是不可思議なるの中々語るも慥なり妾の眞身の誼を思ひて其方達  
 を助けたきも大迦葉殿を伴ひぬ惡敷のせまじ速にお如來の法お歸し給へど勸る折柄寄手螺  
 貝鉦の耳を貫く計りお聞へければ圓滿今の迎も適いぬと心る定め此を遁れて謀らんと忽ち  
 其身を隠しけり大迦葉は是お懸念せず尙ほ歡喜お云けるやう如何も大王速にお唯今邪念  
 を翻して發心せずば即座お身の滅亡して亡靈の永く三途お苦しまん仮令茲をば遁れても  
 天の天神地神の地神魔界の栖に此處計りなるが此とて最早佛法の届きて淨土と成變りて

五十二類の虫けら及び鳥獸も栖ほとなれば魔魅の輩の居るお居られぬ汝ちが身体最早毒石の奇特も失てあの軍勢の攻太鼓の此處お寄る音の聞へずや心を鎮めて分別せよと責る詞お歡喜大王の立たる高岩を踏鳴してわら妬まじき言事うな飯令天又天神あり地又地神あれバ迎我の即ち空中へ住て世界を飛行なし永く如來の須陀洹果俱通の法を妨げんと四方を睨立たる所へ奇手の人數のはやひたくと取詰て歡喜がイむ岩の廻りを十重廿重又押取卷先又進みし軍大將大音おて呼のるやうヤア猫王山の歡喜大王汝の命運盡し上からの我國王の太子の仇速お討れよかし斯云者の外ならず迦毘羅衛國の奇手なり先攻撃べし者共と采配振つゝ下知なせば數多の軍卒の雲の如く心得たりと攻詰ければ歡喜の進退越ふ谷りて通るべき手段も無ければ運命盡し時節を覺悟し自五脉を搔裂邪念を疑せし効ありわら恐ろしや口よりして數方の猫を虚空へ向けて吐し此猫の影の如くおして現る形を現さず飛違ひ断廻りて奇手の軍勢を惱す程又聲のみ有て取留べき形なれば諸軍勢の聲おも討れず只持餘して呆れ果たる其隙お歡喜の容の消失よける是よりして世の中お猫と云ふ物普く出來て世尊三世俱足の正法を妨ぐるは是の歡喜の怨念なりと今の世迄も云傳ふ然らば如來も猫

のみの太く憎ませ給ふが故卯月八日の御涅槃も五十二類の鳥獸虫蟲迄も集りて皆歎ぬの無りしよ此猫のみの來らずして永く佛を恨るとぞ聞ゆ切又奇手の軍兵の歡喜が容の失しより彼の蜻蛉の如くある猫の形も見へずなり行て事なく鎮りしが大將の諸軍を纏て凱歌作り打連て此山中を廻りしよ不圖大迦葉と摩尼鉢を見出して事の様子を問ひ質すよ迦葉の云々ど有し儘を答へけるおぞ此旨を總大將なる迦毘羅衛國の女帝の問召されて直様二人を引連て鬼子母の家お渡らせられ如來お對面なし給ひて越方の事ども詳細語りつゝ唯一人の太子を失ひての斯軍お勝たれども本意無き此身と歎かるれば如來のやをら豫て助置たる太子を出して見せ給へば女帝の悦びの限り無く扱も不思議の方々な近頃小兒の失る事日々夜々の限り無ければ新關を立置て出入の者を改めさせしお關守のいふより只今云々の者來りしが關を越へずして此山お上ると聞よりも是を奇怪の曲者ならんと後より軍馬を差向しよ案お相違して此方の味方お尊や有難し是よりの先我國へ伴ひて待遇んとて太子を受取禮を逃いさせ給へと勸れども如來の其儀を堅く辭て否某し此よりして古郷なる迦毘羅城へ急げば御定も隨ひ難し君我恩を思ひ給ひ善歸したる鬼子母が輩の身の落附を頼み侍

るなり先は波優祇耶の市に於て我徒弟等が集りて侍居れば少しも疾く急がんと聞敷暇を  
 請ひ給へば女帝も今力無く追てもの事お茲にて戒を授からんとて五戒を授り畢然に此  
 より波優祇耶の市迄警護の爲お我士卒を半分て附進らせん又鬼子母の族の今より一生涯  
 養育ん事の心安しと固く誓約致されければ如來の殊のふ悦び給ひて女帝の別れを告げさせ  
 られ迦葉を隨へつゝ波優祇耶を差して下らせ給ふ「去程は波優祇耶の市より早目蓮優樓頻  
 螺其外も皆來りて如來の御來臨を待ける所へ舍利弗の疾く迦毘羅城より優陀夷を伴ひ此處  
 へ來りて事嚴重に指揮して市々を警護させ目蓮優樓頻螺其外も對面して瀝く勞ひ又道路  
 へ見星を附用意等閑無かりしかば波優祇耶の市の云ふも更なり遠近より貴賤群集して恰も  
 鎮守の御神の祭の如く賑へり暫ありて豫てより迦毘羅國へ一兩人遣し置し斥候の者  
 馳返りて威儀嚴なる優陀夷の前へ進み寄て告るやう我太子今已お猶王山より迦毘羅衛の  
 軍の諸卒は送られ給ひ程なく此へ御入りなりと聞も終らず御腰休は出來したる飯家の前へ  
 優陀夷を初め待り待たる目蓮其餘の徒弟等も残らず出て居並びたる程もあらせず如來は  
 や迦葉を隨へ給ひ悠然として此方を差して歩行られ御身の前後左右を迦毘羅衛の軍卒どもが

警護爲て已お渡らせ給ひしより如來の迦毘羅衛の士卒等を瀝く勞ひ本國へ返し遣し給ひけ  
 る其時優陀夷の一番は進み出て先如來の尊顔を熱々拜するお産れ立より朝な夕な拜し奉  
 りし面影の在さず是が我若宮かど疑ひ感ふ心の内は歎へて見れば已は十二年十九の御年の  
 盛の御容の何處も一つとして残りもせず然ながら其御氣色の何と無く氣高きの以前お百倍  
 して我から自然と敬のれ飯初めの詞も出ず唯感涙お吳居る程お如來の御聲爽然とアラ久し  
 や優陀夷の臣我王宮お在し時の太く汝お心配懸たりしが其後も無何吳と心盡しの有つらん  
 开いとまれ今の再會は互お無異息災なる對面の最悦はしきことならんや早我徒弟の輩も  
 此は集ひ侍るよやと仰せの下は優陀夷大臣歡喜の泪を播拂ひ遣は最長き太子の御詞なり何  
 の免もわれ先彼處なる設けの飯家へ入らせ給へどやせば如來の眉を打擧給ひわら心無き云  
 こと哉我お向ひて今更は太子との开も何事ぞや我今回遙々と王宮へ還り來りしは妻子族の  
 恩愛お引れし故の事ならず化下隨緣の爲なるゆへ此れを心お記して忘れなせぞ先往ん案内  
 をせよとあるお優陀夷の彌拜承つゝ漸くよして身を起しお先お立て飯家へ往り待設けた  
 る徒弟の輩の皆々地上お拜伏して其御入りをぞ歡びける又其外此市へ八方より集り來る

數萬の人々隨喜の聲須臾の鳴も止ざりけり諸如來の飯家の内に入りて暫時休ひ給へば優陀  
 夷の槃特を引連出て恐れ乍ら御發心の後御初めてなる見奈の證の施物お某し一人の子息  
 を奉らん何卒御弟子を爲し給へ然ながら此者儀の今も以て愚鈍なり其所の所を能く知し  
 召れて幾重も御教諭を請願ひ奉ると述べ如來の莞爾として這の好事を聞者かな此身  
 への施物の外お無し常々佛身なる者を欲くのみ思ふなり今日の古郷へ還り初めし功德よ  
 て先好物を得たり飯令千萬里隔つるも一人なり出家する者ありとし聞は直ちも往て貰ひ受  
 べき誓願なれば今槃特の愚鈍なりども我能く教化濟度して何日かの悟りを開きせんと語ら  
 せ給ふ其折柄舍利弗の御前も進み出愚僧像て御意を蒙りて其旨を逐一御父君も聞へ上奉り  
 御歸洛の事ども某し奉行仕り此より直横迦毘羅城の青龍殿へ入れ奉る計ひを仰せられ  
 たり其處にて御親子の御對面ある可しとす上れば如來の點頭給ひ開の嬉しや賢くも計ひ異  
 たるぞ其背龍殿と云るは是忘れもやらぬ故摩耶夫人の埋り給ふ所なり這の何寄の法座ぞろ  
 し然らば少しも疾く急ぎて赴き度の思へども徒弟等も夫々用意の事の有べければ先暫時見  
 合せん皆其用意整へ疾く知らせよと仰するも最早優陀夷の手當にて彼是の支度も調ひ皆

御前も出來りばや御歸洛を勸るおぞ優樓頻螺が云けるやう如來の堅固の御身なれども是よ  
 り僅ながらも提婆の領地を踐せ給ふゆへ是まで目出度御身もて今茲もて聊かたりども妨げ  
 の筋之ありての第一は帝の聞へ世間へ對してよしなれば迦毘羅城より警護の人數を招れ  
 ての如何あらんと談ずるを聞優陀夷が云やう然ばこそ其事なれ我等も左様も存ずれば急ぎ  
 士卒を呼寄んと云を舍利弗押止めてイヤ／＼夫お及ぶまじ如何程提婆が謀るも高が凡  
 夫の智慧の海少しも浪風の立事なし今左様のお手當ありての却て事を招ぐも似たり縦へさ  
 る不虞のことありども是迄如何なる者も後擲を指せしこといあらじは何處如何なる事よ  
 も一度たりども怪我過ちの無かりし事の皆已も知る處あり左の云へ錦を着て古郷へ返ると  
 云ふ諺もあれは御車の用意の有度此儀の如何と伺ふも以來の何れをも止め給ひて各自の  
 了簡の我意も違へり最前優陀夷も告ぐる如く元來恩愛の羈お引れて古郷へ還るもあらぬは  
 通俗の儀の好しうらず唯汝ち等と侶俱も袈裟も衣も師弟を別たす同じ容お打扮ん況てや警  
 護の士卒杯の思ひも依らずと論し給へば皆々是非も無く其も定めつゝ夫／＼支度を調へけ  
 れば優陀夷の手勢を隨へて先第一番も進みたり扱其次の優樓頻螺其弟那提伽耶各自徒弟を

引連れて如來の左りの道を譲り舍利弗目連富其那の三人是も徒弟を引連れて右の道をぞ譲りける斯て如來の金光の御身を隠し給ひて徒弟等と同じ色なる御衣を着給ひ羅漢の中へ交りて摩迦陀國へと急がせらる此道の邊に集りて如來を拜せんと待居る者の斯る形勢みて通らせ給へば何れが實の如來ぞと拜し惑ふ者も多かりけり「是より嚮ふ鬼子母が夫の圓滿具足夜乃に兼ての味方ある提婆の方へ飛行て悉達太子が古郷へ返り來れる趣きを詳う告る程よ提婆の如來の通行を日よく待詫居たる者から猫王山まで大概仕留ると聞者の心元無く思へるれば彼の大惡不敵なる阿闍世太子よ件んの趣きを告げれば阿闍世太子の此度の事我れ最善事打挫んと心安く承諾提婆の悦びて先然に三千餘騎を引卒して出向へ給へどありければ阿闍世の得たりと取敢ず即座よ三千の勢を卒して撃て出つ、維沙那國の入口又陣を据間諜びを出して様子を探るよ優陀夷の臣先の程此所を通りしが必ず其迎ひの爲ならん而も人數の少ければ討取り易しと聞き阿闍世の悦びて待所へ遠見の者又馳戻りて阿闍世よ向ひ述るやう某し遠見の役を裝りて密に波優祇耶の市へ往き事の様子を偵ひしよ彼の悉達太子今の早釋迦如來どか名乗つ、此方の領地なる猫王山へ攀上りて鬼子母を初め摩

尼鉢迦渠が宗門を靡して一千の子供等も皆佛法よ歸依すれば具足圓滿深くも憤りて歡喜大王と謀りしかど其巧空くして圓滿の身を隠し歡喜王も惜ひ哉亡びてけるどの風聞ありと告る詞を半も聞て阿闍世の賭と憤りを現し爲て其後の如何よく然ば夫よりの波優祇耶の市あて弟子共ど一つよなりて程無く茲へ到れども皆法師のみなれば仮令幾万人あればと片腕も足らぬ奴らなり唯手強きの優陀夷計りのみ夫も僅の供連なれば斯の如き味方の備へを知らば各自聞怕して此所を通過るまじと告れ阿闍世も打點頭然に旗を卷鋒を伏て伏兵を以て撃べしと軍の備へを皆引せて勝れし兵士を擡出で弓千挺を携へさせ二手よ分て蘆茅茂き道の左右よ深くも忍ばせ相圖の太鼓を聞たらば皆起りて射殺す可しと堅く約じつ、阿闍世太子の太木の梢よ高く櫓を組せ其上よ上りて太鼓を構へて待掛たり時よ天の帝釋の此謀計を知し召て天呪を以て鼠を現し夥敷天降らしめ彼の伏勢の弓弦を盡く噛せ給ひぬ然ども夜中の事なれば兵士共の皆之を知よし無く片唾を飲て扣へ居る其内追々忍びの者馳戻りて今已ふ彼の輩の此處へ近附來る由を秘密く告る内も程も無く大路の方よ多數の人音聞へしかば皆々相圖の太鼓や鳴と耳を傾して待居たり阿闍世太子の太木の櫓の上

みて彼方の形勢を偵ひ見るよさしもの大勢一郡宛ふ來ると雖も列を亂さぬ其内は夫と見別  
 る者も無く何れの群も如來や在と殆ど見惑ひ困じ果たる其折柄後なる羅漢の一群も金光の  
 朝も輝きて伽羅旃檀の香氣仄々馨れば扱ひ是こそ如來ならめと睨つ睨めつ打守り此ぞと  
 思ふ圖を量りて相圖の太鼓を焦強く拍鳴せば道の左右の伏兵共一口同音も矢聲を發し弓  
 を携へて踊り出つゝ見當る者を射倒さんと爲けるお遣ひ如何も誰の弓も弦なれば途方  
 又暮しが此上の刃を抜て討んとすれど眞の闇路も黒衣敵の黒白も見別ねば討べき目當も覺  
 束無く又迂濶に進まれず唯器々々と嘯くのみあり然るお斯る大難お出合ながらもあらず不思議  
 や如來を初め奉り羅漢達の聊り駭く氣色も無く素知ぬ体にて悠然として往過るを見て阿  
 闍世の隨兵の呆れ果つゝ尻込して取お足らざる出家なりとも斯大勢の續くを見ての愁な  
 る軍もならず殊も千挺の弓の弦の残らず切しも不思議なりと隠し私語ども知らずして阿闍  
 世の相圖の陣太鼓を喧しく打立たる其甲斐も無く味方の勢の火の消たる如くお鎮りて凱  
 歌を上る様子も無ければ扱心得ぬ事ども哉と吻き乍ら櫓を下りて諸勢を集めて仔細を糺す  
 る皆々有し不思議を語りつゝ手さしのならぬ由を述て等しく詫るを聞敢ず阿闍世の驚き且怒

れど并も亦誰の科とす可き押へ所も有されば是非無く其夜の其儘お一先陣を退せける「開  
 の間話休題却説く迦毘羅衛國の軍兵の如來の後を追拵て猫王山に到りつゝ歡喜を亡し奪れ  
 たる太子を易く取戻して女帝を初め臣下一同皆如來の徳を尊びて此上無く悦び合りしよ不  
 思議や歸洛の程も無く太子の御顔の脹爛れて俄然も苦み給ふが故も所有典藥等お見せしめ  
 ければ是の世も例無き御病なれば御藥の調へ方を辨へず遣ひ正しく鬼子母も捕ひ給ひ  
 魔界の毒氣を不意受給ひての事ならん外お仙法も無ければ先解毒の藥を奉らんと種々な  
 る毒消を調合爲つゝ進めけれども其効験も更お無く順次お重りて日々お頼み少くなりけれ  
 ば女帝は殊更悲み給ひ自ら只管も天神を祈り給ひしよ或夜其靈夢を受けて俄然も重役なる乳  
 人を呼出し夢の次第を告らるゝやう楮太子の病の例無き事なれば我心の中お天を祈りて平癒  
 の藥を索しよ不思議や昨夜の靈夢も此病を癒さんとならば青鸚とて八つ翼ある鳥を索めて  
 其羽よて標を作り座せしめよどありぬ其鳥は是迄見聞もせぬお索る事最難からん汝等是  
 を知りたるやと尋ね給へば其座の者開の聊かも存せぬ鳥なり併し我々が知ぬとて強ち無し  
 ともやされず早速其由を觸流さば近國遠國へも云傳へて萬一手お入る事もあらん何の兎も



われ开を聞て少しの力を得たるなりいざ其事を謀らんとて其役々へ云附れば或は辻々橋々  
 又彼の鳥の名を認めて此鳥を知り告る者あり一万金の褒美を遣りし一廉の役を取立れば下  
 賤の身も直々女帝對面遊ばさる此れ偽りならぬを達し給ふと觸たる者うら忽ち國  
 中の云も更なり他國へも疾く聞へしかど是を知者更ら無かりしとぞ然る所も近き頃新參  
 お抱へられたる奴僕を部屋長が引連れて奥庭より御用く遣入來れば何か知らず女中達  
 早速女帝の御前へ傳ふれば女帝の斯る舉動も彼の鳥の注進ならめと豫ての手筈も有者から  
 御身も顧み給はずして端近よ立出つゝ其訴へを聞せらる部屋長の兩手を拱て恐れ乍ら直々  
 お上奉る今回珍りあるお觸の出たれば部屋中の下人共へも其由を申渡せしよ此新參者  
 が其鳥を見知しと申せば取敢ず召連れて出來りぬ所下人の癖にて心悪く其御褒美を疑ひて  
 參るまじと拒むお依り這の憚なる證あり役人方の取次ならず此大國の帝様が直々聞召は  
 夫も疑ひ晴す可し御大切の事なればこそ御對面も遊さる左無く我々風情の者がお直  
 出來やうぞと意見を加へて漸く召連れて參りたりサ、其鳥の大畧を申上よと急立れば簾の  
 内よりも勅定の御詞を掛させらるれば彼の者余儀無く平伏の頭を僅く擡實よ以て畏くも

憚り多き事ながら御尋お任せお直々失禮の儀を仕る其お尋の鳥の儀の委敷在所を存ず  
 れば何卒私し御同道よて御役人を遣りされば生捕て差上んとすを女帝の聞敢ず簾上さ  
 せて出給ひ開の役人を遣りさすとも我自ら赴かん急ぎ準備せよと女ながら一國を持程の  
 君なれば少しも臆する氣色無く程なく用意も整ひければ件の奴僕お案内を致させ直ち宮  
 中を立出て白濟道の側よりして山又山を越ければ途ある大川の邊りも出て其岸邊を暫時往  
 て茲等と思ふ所よて彼の下人々那方此處を索ね廻り居たりしが遠敷馳返りて女帝お見へ  
 告るやう件の鳥を見届しが兼て御沙汰も有如くかならず一萬金を下さる上御知行を給  
 る由の實よて侍るおや世の寶物杯詮議致させ漸くおして尋ね出すと其儘望の褒美呉る  
 どて首斬れる者もあり然る事よて在ぬなら幸野生が其鳥を御覽よ入れんと先立女帝  
 の争り偽らんとて附人等を其處よ待せ弓矢を携へ往て見るよ實よ其鳥の水際よイみて長閑  
 お遊ぶを見て先や弓矢を番へ狙ひ近寄其体を見るとき雖も彼の鳥の飛去もせずして女帝  
 お向ひ道何ゆへ我を射るやと人の聲して物云ふよ女帝の不思議の鳥と思ひ給ひて然  
 り汝ちを射留る仔細の我太子の魔界よ捕りて夫より不思議も悪瘡の發して今已危ふ

くなりしかば是を歎きて天神を深く祈り侍りし所有難くも靈夢を蒙りて八つ翼ある鳥の羽の褥に座せし癒るどありぬ是ぞ正しく天神の告なる上り速く人の命を替りてたも太子の病平癒れ及ひ我氏神を祀る可し命の屹度貫ひぬと云つ放つ矢を咬へて須臾待れよす事あり圖らず我名我容を告られしは是天命ながら開も此に在よしを何者よりして聞れしぞチ、汝が此等も居る事はこの下人が知せたりと聞て彼の鳥のつらくと下人が面を見て涙を落しわら情なの人心哉其奴の此川に溺れて已死す可き所を我身を惜まず兎角して命を救ひ取せしう報をせんと只管云しを我其報を争受べきぞ若し此恩を忘れず我此に在事を必ず人みな沙汰せまじと堅く戒めて返せし早其恩も打忘れて我在所を明せしとわら口惜き魔界の鬼畜哉道理を知ぬ等ながら鬼人への横道なし畜類だも恩を知る本石を背負て助けしあり劣りたる放逸邪見の舉動の何を譬へん方もなし如何に女帝其奴は是其方の國の生れよして今魔界の長となり種々の邪術を巧み我之を度せんが爲も助てより以來の殺生を禁じざる甲斐も無く未だ邪念の直らぬ幾万業の果も無く三途も迷ひ苦まん其方の太子の病と云も元其奴が業なりと告ると女帝の聞取ず涙はらく落せしが

瞎と怒りて彼の下人を取挫て宣ふやう是迄の鳥を救し大恩人と敬ひしが今や邪念の様子を聞て涙の出る程いと口惜きのみならず我太子の病とても汝が業と聞時彌助置難しと降魔の弓狙ひれて彼の下人突立上りわら腹立しや斯なる上り隠す可き様も無し我は是鬼子母の夫具足圓滿の態の果何彼の仇たる迦毘羅衛の國を魔界に爲て呉んずと猫王山より容を變て下人へ入込て僥倖も出世の手藝も大概整ひしと茲にて化を現す上り何奴も此奴も腕ガサア討り討るゝかの勝負の時の運任せとすらりと扱たる長身の刃女帝の急しく供人等も下知して戦い令んと爲る程も彼の鳥の忽ち髣髴たる菩薩と化してヤマ早過へからず暫時待れよ抑我等の鳥類ならず此程世界も三世の教主釋迦如來の出現せし其瑞も現れたる者もこそ其奴の其儘も棄置とも己れが科の己れも戻りて太子の毒瘡の渠も傳染て太子のはや平癒せり疑ふ事無く戻りて見よと云ふ一言を殘しつ疾くも天上へぞ上りける時不思議や圓滿夜刃の面色の忽ちも脹爛れて威張し腕も痿れつ持たる刃を投捨て悶へ苦みて七轉八倒打廻りつ死してける然れば眼前も斯る奇特を見てければ女帝の深く菩薩の徳を尊び給ひ天を拜して勇敷直ち本國へ立返り急ぎ宮中へ入りて見るお實も靈鳥の告も違はず太子

の病の本服しければ女帝の悦び譬へん方無く彌天神を祀りつゝ是より鳥獸の殺生を堅く禁ぜしかば其後の國土豊饒榮へしとぞ○偕又如來の王宮を還らせられて皆々小廣大無量の御說法ある由の次の卷の始めに委敷解説へし

釋迦八相倭文庫三十四編終

釋迦八相倭文庫三十五編

去程は迦毘羅城にて今日如來夕陽山に還御なさせらるゝ旨豫め觸られて帝を初め橋曇彌の方も彼處に渡らせ給ふ程に月卿雲客の更なり諸司の面々地下非官の者迄も皆夫々に役儀を守りて時刻を謀りて相詰ける程に已にして見星の者追々に馳戻りて早御登山も間近き由觸込儘に殿上殿下の尚ほも嚴重な警護なす間もなく聞ゆる御先拂ひの聲に續きて徐々ど一千五百の羅漢達の陸續として上り來る中又如來の在せども何も同じ色めにて分別もなき法衣なれば上下の官人の目も斐々何れを我若宮と見別る者も更にさく唯疑ひてのみ平伏せしに御跡よりして優陀夷大臣の後押の供連立て魏々として通御濟しと告報知ければ扱ひ今の羅漢の内に若宮の在せしか如何に十二年程過つる迎わの如き人共に見紛ふ様ひなかる可きにと人々不審の彌増けり扱初大臣を奉行として御修造に美を盡せし青龍殿の右の床に帝並びに橋曇彌夫人續ひて百官女中の輩の所狭まてに居並べり又左りの床に如來偈俱羅漢達に皆打込に列りて座禪を組て居給へば何れか如來と見も分らず唯守り居る計りなり暫有て優陀夷の帝の前へ進み先以て我若宮唯今恙なく御歸洛を遂給ひしころ愛度けれ那

處は集ひし羅漢達の皆々如來の徒弟に侍れば是御家臣にも同じき事なりいと御對面然るべしと述るを帝聞召わら幻なや優陀夷の臣如何に十余年を経しとて我血を分し者の係だに見紛ふ事の恥しき汝ぢの知やあの内に悉達太子の在方を物思ひし氣に宣ひする御心に一層立て嘸かし美々敷光景にて歸洛すべきを左になくて賤敷徒弟と一様に見る影もなき御容にて返り來るを其儘に坏て優陀夷の伴ひしと思す御氣色を悟る者から優陀夷も其處に豫て心附とも唯何事も尊きお身に論しケ間敷一言も憚りあれば強兼て仰せの儘に致せしと云ふにも言れぬ此場の仕儀如何のせんと答へに差詰りたる其心中を如來の疾くに知召は舍利弗目蓮其外五六人の御弟子を従へ給ひて閑敷進み出帝のお前に平伏しつゝ稍ありて頻迦の如き御聲にていと爽然に絶て久しき御對面の其悦びを述終り又越方のごと何呉と盡せぬ縁しに父母の海より深く山よりも高き御恩の事どもよりして十二ヶ年の其間御心痛し不孝の科を謹て詫給へば帝の唯打點頭未だ一言の返答もなく呆れ顔して見ろなれしアラ無慘や是が我子かと思しめする道理なり九重の昔に替る御風情にて年ころ若木に纏る藤の衣の屑も最薄く如何に深山は籠ればとて瘦れ果たる枯木の如き御容にとなり給へぬ然ながら斯計

り多き弟子共に侍るゝこそ尊けれ此の景況を當王宮に在せし時より比較べつゝ夫此思ひ給へば綾錦を重ねたる御身も漫に寒氣立て宣ふ事の有餘れど唯忙然として老眼より御泪のみはらくと落させ給ふ形勢を傍に伺ひ拜せし輩及び附隨ひし御家臣女中下賤に至る迄も俱に泪に咽びける須臾ありて帝に漸くに泪を拭ひせられてあら嬉しや悉達太子能く得難き正覺を遂て事無く歸洛せられたれ哉く今日土産に老を養ふ教諭なりども聞ま欲しと宣へば如來の頭を上給ひて最憚りある事ながら開け此方より願ふ處もころ畏くも聞し召とて父母報恩の事よりして無上菩提の妙法を心の儘に説せらるれば帝の感歎大方ならず如來を尊び給ふの余り心の内に如來の御足を敬ひ拜し給ふ者から那方に在する如來のお眼に其様の現見ゆるを以てあら勿体なし父上の我足を拜し給ふ予這の如何にせんと拜承乍ら如來も亦心の内に父の御足を只管に拜し給へば淨飯王の凡夫ながらも父子の恩愛の感通して是を悟り給ひ彌尊く思召て何卒如來に國の政事を譲らんとと思せしかども先今其沙汰に及ばずして追て優陀夷を以て告しめんと心に藏て濕く勞ひいざ然に橋邊彌優陀夷の妻の云ふ迄も無く其外御身を守立し者共にも對面して妙法を聞せよかし朕の片時も御身の側を離

れん事の憂てけれど女共も疾くよりして無かし會度待詫ん又見へんと立上りつゝ簾の内へぞ入り給へば那方に御聲を聞居たる橋曼彌の方を始め優陀夷の妻其外女中一人も残らず恐るゝ進み出先如來を上座に押直しつゝ御傍へを透間も無く取圍み流石女の習ひどて御機嫌様宜敷どの其一言に千万無量の心を籠て拜する中に唯々辛く悲しき橋曼彌の方の御惱なり今は目の見へ給ぬべ何の様なる御容にならせ給ひしかど心で數へる十二年替れば替る我姿を恥る仔細も身の科の今更何と面目なげに掻探りて膝を進め御手を拱へノッ若宮能く還らせ給ひぬる妾の斯る病に苦み御姿さへ見も分ず何卒近く寄給ひて親敷語ひ給へかしと左も詫し氣に宣へば如來も流石に悼しく間近く進み給ふに予優陀夷の女房の橋曼彌の御手を取つゝ如來の側に寄進らすれば橋曼彌の姫に御身の内を此處彼處と掻撫しつ試て俄然に駭き踰限伏遣の若宮に余も有まじ如何に年頃王宮を離れて在したればとて御髪を縛れどいひ又着衣も彼程に手荒き太布の此形状の何事ぞ又探り見つ撫さすり訝り給ふを片邊より見る目悲き優陀夷の妻開の道理想なり妾等いさらゝ心附ざりしイテ先衣服を進らせんと立上を如來の之れを押留め開の宜なし今の身も美服の却て肌寒し此藤の太布こそ綾

錦に立勝り此身を飾る法衣なれ是に増物の外になし開の兎も角も叔母君のお眼不自由にあり給ひて無かし氣鬱にましまさん昨日今日と思ひしも早十二ヶ年の過越方別れさせし其以前に生れて其儘御手まほに此身の養育に御心盡しの其辱けなき報恩に御眼の曇りを瘡させん併し先御心を正しく清め信を疑して一戒二に懺悔三に布施の三つを守りて平瘡を祈り給へかし何のともあれ久々もて此拜顔ころ嬉しけれと敬しく宣ふ程に橋曼彌の久し振にて還りし太子にもて囉され抱かへもせらる可きと兼て心も思ひの外斯る姿の身とありて今の詞も改めて云度事も言ればこそ唯懐しかりしと已云つるも後は泣給ふ外無し其時優陀夷の女房の近く進みて如來に向ひ御覽の通り御皇后様への過つる年よりして御眼の惱にろれゝの醫達の手を盡し侍れども未だ御平瘡あざざりしが唯今の仰せに御報恩の爲に貴君様が御平瘡を祈らせらるとい開の何奇の御悦びなり今のお諭之れ無き内よりある仙人の告に任せて御心をも清められ世にまがなき者共へ布施物杯多く施されて絶ず御平瘡を祈らせらるれど其効験の更になし何卒如來のおん功德にて片時も疾く瘡させ給ひ此上も無き御孝々と述べ如來の打點頭開のやす迄もなし願てぞ平瘡の時至らん先能く御信心有

可しと論し給ふ其所へ目蓮の閑敷次の室へ参りて如來にすすや唯今あれなる御階の下へ  
 二人の武士馳参じて某しを招ぎつ、何卒如來の御弟子に爲し吳よとて斯の如くに二個共髪  
 を切て渡しければ辞はず受取侍りぬ御對面の上宜敷戒を授け給ひるべうもやと述るを聞て  
 橋邊彌も優陀夷の妻も妨にやなりもやせんとて其座を避て傍の一室へ入りける如來の目  
 蓮のすすを聞給ひて二個の武士の出家を望法身に成しどの開の最殊勝の舉動なれども武士  
 とありての等閑ならず先優陀夷へ其由を聞へて後に戒を授け師弟の誓約を致す可しと宣ひ  
 すれば目蓮の如何にも其儀につきての念を入れしに彼の兩人共口を揃へていふやう我々今  
 俗を離れて御弟子の數に入り世棄人となるからに、舊の姓名身分杯を御糺し無くとも宜し  
 からんと言れて愚僧も考ふるに如何様佛の高きを恐れず又賤しきを侮ずと聞く然る御弟子  
 を望む者の武士山樵の隔無く御法弟に着給ひ、彼の二人の悦びて歸依の心も深かる可し斯  
 法身に決定して出家の容と成たる者の氏索性を糺す時の憚り乍ら却て罪にはあるべからん  
 と存じぬると言つ、彼の兩人の携し髪りを差出せば如來のやをら更取給ひて熟々と見て宣  
 ふやうあら不思議や是のこれ二つ共に正しく我知縁の者の誓りなり急ぎ此方へ呼入よと宣

ひするに拜承て其儘立て二個の者を案内爲つ、閑敷御前に伴ひ出ければ如來の熟々之れを  
 御覽するに一人の阿難一人の可難にて何れも眞身の從弟とち通れぬ中に在せば直ちに片邊  
 に招がせ給ひて這ひ久しや二人共又我等と同じき志しにて浮世を厭ひ出家召るゝ事なるか  
 最志ほらしき所存よなど宣ひするに二人共唯平伏て居られしが阿難太子の漸くに赤らむ面  
 を擡つ、面目無氣にすすや先以て久々にて御安泰なる尊顔を見奉る歡べしと夫に附ても  
 我々二人が今日速に此所へ参りて願ふ仔細具に告るを聞召て海山積る身の科を免して御弟  
 子と爲し給へ中々以て出家を望む善心とてい無かりしが不思議に佛の引成を俱に悟りて今  
 ひしも信心堅固の身となりぬと述るを如來の問懸て如何様と身達は唯身一つにて來られし  
 い定めて族が出家を止めて歎き支る夫故に逃隠れての事ならめイヤ、左様の事ならず先  
 某しより身の惡事を懺悔致すを聞召開も耻敷事ながら如來正覺を遂んとて宮中を去給ひし  
 後更衣の瞿陀彌の某しに親み睦と語へんとやせども不義を愛てく思ふゆへ辭退しながら我  
 も亦強よ見棄心も無ければ若し此宮の御暇出たる其上の兎も角もと云し詞にからめられて  
 竟に俱に煩惱の犬となりつ、妻ならぬ妻を重ねし瞿陀彌が事を淨飯王の聞し召忽ち我を

御勘當ありぬ夫已ならず彼の瞿陀彌ハ可難に添する筈なりしを我疾く密に契りたれば可難の憤りも道理なりと云言葉を引取可難太子も取入乍ら膝を進めて絶て久敷御歸洛の御悦びに参りもせて耻掻やかしき訴へに推参せしもいと尙ほ罪深かる可き業乍ら言て適ハぬ身の懺悔いと願ハしくども聞て給されば其頃ハ瞿陀彌女ハ家に戻りてありければ密に音信親みて妻に爲んと謀りぬる道ならぬ事の父に聞へて我等も直ちに勘氣を受寄邊無き身も妹の縁にて阿難に頼み折を以て我勘當を詫たる上に瞿陀彌を妻になし吳よと頼みし事を聞受ながら父への詫も爲て吳ず利瞿陀彌を周旋事ハ扱措きていつか渠と深くも契り我妹も夫故に見替られしと聞しよりも瞋恚の焰止難く己れ從弟どちの道を失ない我又眞身の睦を棄て瞿陀彌と俱に此阿難を討果さんと覺悟を定めつゝ妹に其知邊を致させ臥戸へ忍び往たりしに我れ何とや爲けん瞿陀彌と見違へて妹柳華を殺害せりと云を阿難が又引取て其間違の元を押バ我体爲の放逸なるを家臣等は太く諫る故に自ら心を改めて瞿陀彌を去んとしてけれど渠のさらし受引ぬバ詮方無くも速に討果て迦毘羅城の勘氣を詫又ハ可難の恨をも晴して眞身の和睦をせばやと思ひ定めて瞿陀彌が臥戸を出るを親ひ討んと構へし折も折可難を

伴ひ我妻の來るも見分ぬ暗き臥戸に討逃じて逃る後より己れ瞿陀彌と聲掛て其一言を目當として忍び寄たる此可難が殺して見れば其身の妹互太く駭く己又詮術も無きものからよし無き詞ばを懸けしより斯る過ちのいできしゆへ我れ先づ腹を切んとするに可難も俱にと争ひしが合點の往ぬハ瞿陀彌が踪跡遠くへ去可き隙間も無きに更らに其姿の見へぬ其跡へ是なる旛の有しも不思議あり茲に列ねし文を見て各自其句を味ハハ佛縁ある事明かなり茲を以て二人とも死を止りて如來の歸洛を今や〜と待受たり斯る憂てきと乍ら何卒懺悔を憐みたまひて其身〜の科をゆるべ淨飯王へ勘氣を詫て共戒を授けられ聊かたりとも成道も趣かしめて給ハらば生々世々の御厚恩何の世にかハ忘る可きと云つゝやをら懐中より件の幡を取出すを如來ハ受取給ひて熟々と御覽ありて幡を拜し押戴きあら尊き此幡や是即ち瞿陀彌なり开も我に九思の佛ありて何れにも縁を結んで正覺を遂させ一切衆生を濟度爲しめん爲めにとて所有菩薩の身を變て或ハ傾城后妃と現れ給ひ發心を勸さ者から已に淫肆の遊女ハ此れ不賢菩薩にまじ〜たり此瞿陀彌の本身ハ聖至菩薩にて在せしが我正覺を導んとて假に苦界に身を墮し給ふも苦墮身と云ふ名に現れたり已に我出家を遂たる故に

又其方二人をも導んとして假初に謀らせ給ふ淫婦の乱行戯けき業も塵の世の塵に交へる佛の方便最辱け無き事ならずや是等の事の無き時ハ御邊等如奈ぞ得道せんや我ハ順縁の出家なり二人ハ逆縁の出家なれども今ハ順逆別ち難き功德ハ同じ聖至の導きはこの帳の文を見よ  
 ○我本因地以念佛心入無生忍今於此界攝念佛人歸於淨土と現し殘し給ふ上の怪我が死したる柳華の身の聖至の功力と主等二人の出家を遂し作善に依りて我々よりも逸疾く淨土の蓮座に着たること羨しくハ思はずや是皆過去の約束なれば驚き歎く事勿れと帳の文を了示させ給ふ實もや色心有無始終一に歸するの誓ひに違はず二人ハ我から六塵を遁れて淨土へ赴く可きあの苦墮らてふ菩提心に轉せられしこそ尊とけれ「偕も阿難可難ハ如來の御諭を篤と聞いよ」歸依の心深く感涙袖を浸しつゝ彼の御幡を尊き佛の御遺物すと頼りに拜して二人均しく又云やう世に有難き御教諭を受けて迷ひも晴渡る真如の月の下陰に心隈なき身の安堵せり其悦びに附てなほも願ふハ御父上淨飯王へ御勸氣を詫給へらば心憂雲塵も盡て天の目を見る心地せん争々ど頼みければ如來ハ打點頭ヲ、夫も亦最易し我先優陀夷に語らハん渠を呼ねど宣ふ所へ優陀夷ハ如來へ帝の仰せを傳ふ可き事のあり迎折能も參りしかば

如來ハ悦び給ひ取敢ず彼の阿難可難が事を具に告させられ今よりの我法門の徒弟と爲せば何卒渠等が罪を免し帝の御前宜敷やう執成て其御不興を宥め呉よと宣ふにぞ優陀夷ハ二人の態を見て雲時の駭きて語をも言て打看りしが稍ありてあら殊勝しき御心や最早出家となり給へば凡慮の時の科ハ消べく殊に尊き佛の結縁何とて帝ハ過去し事を改めて宣ハんや某し好に計ふ可し開ハ措きて先如來へ更に帝の仰せあり先々此方へ入らせ給へと別室へ請じ奉る優陀夷が案内に隨ひて設けの席へ着給へば豫て用意の百味五菓珍味の齋を勧め進らせ而して後に詞を改め優陀夷が上るやう唯今改めて帝よりの仰せハ即ち餘の儀に非ず何卒貴君を此よりして御世繼に直し進らせ奉り國土の政事を任せなば嘸かし宜敷事已有ん此旨聞へ上よとなり驚くは是を辭はず國土を治め給はらば上公卿百官より下萬民に至る迄其悦び是に増物なし如何に拜承給ハんやと謹みて述終るを如來ハ帝の勅命なれば平伏しつゝ聞召しが暫あつて御身を起され扱術なき仰せかな我成道正覺を遂て再度春宮に立べしとハ更々以て思ひ依らざる事予かし父の賢慮に違ふ事罪障殊に深ければ是計りの隨ハ難かり何卒御世を繼せらるゝハ舍弟難陀に願ひ度と宣ふを聞き優陀夷ハ堪はず然ハ君王宮を通れ



出させ給ひしより御世繼之き儘まづ取敢ず難陀太子を春宮に直されしが種々なる違ひめ  
 有て程なく其儀も廢させられ未だ御世繼も定まらずすも如何の事ながら難陀太子の幼き  
 より女の中にて生立給ひ今の好色淫奔の不行跡も成せられて不義の事ども儘われバ迎も御  
 世を任せん事の某し初め存じも依らず然バ今日君の御歸洛なれば殊に愛度折なれども御對  
 面にも出しやされず父上の早や左計りの御老躰にて斯御心勞あるを察し給ひ君自ら御世を  
 繼て國家を治めんと仰せられなば其御一言を聞召るゝ帝の御心の如何成ん百万年の御齡を  
 延す種とやすすべき老の先立例なり父上萬歳の後の兎も角も遊さば遊ばせかし愚鈍の拙者  
 が論がましくはひへ共此事道に背き侍るや背かバ背くと仰せられよ余もや背きの致すまじ  
 罪不孝より大なるのなしと古き詞にも承給ひる此儀の如何と誠心を面に現して思ふが儘を  
 額に汗して諫れば如來のしとやかに點頭給ひ否其詞の我に於ても更々無理どの思ひれず然  
 ながら能く聞かし是迄難行苦行を累ねて折角得たる成道正覺道は是度の世の外に意趣ある  
 由の汝等もあさく知て有べきに今又元の浮世に戻りて王位に即ての二十ヶ年の勤行も  
 皆仇と成て何の役にか立べき予我中天竺の萬民と一世の間養育すればとて百歳千歳の昔と

ならば花の盛を夢見し如くなり我にも限り有世にこそ斯れば世界に有と有所國家の元來深  
 山幽谷川の淵瀬や大海の底となく総なべて有爲轉變の世を示し三途八難の苦みを助るべき  
 事を弘めつゝ弘法濟度をする者の先にも後にも我已にて誠に掛換のなき一身あれば是非と  
 も王位に即難し左の云是ども見棄んや其難陀の不行跡も我又渠を警戒て德行律義を守ら  
 しめ術よく王位を繼せんず我斯云ふからに御世を繼べき春宮の難陀太子に定むべし心安  
 かれ優陀夷の臣と言爽然に宣へバ夫のと計りに口疊りて流石に否とも言兼し優陀夷の是を  
 如何のせんと思案に暮しが今一つ告度事をやて見んと御前近く膝を進めて諸御尤もなる仰  
 せにこそ開の右も左も追ての事に致すべし外に又や上度一儀ありぬ事永くとも聞召御忘れ  
 の余も有まじ君王宮に御座在砌りに婚儀を結ばせ給ひたる耶輸陀羅女の御事なり此姫上も  
 今日尤も疾く参られて御對面も有筈なれども是も聊か障りのありて今日入らせられず其  
 障りとすすも外ならず如來在さ其後にて御胤を産落し給ひて最と壯健に育ち給へど夫  
 に附種々と愛てき事のみ多かりし我女房の陰となり陽となりて漸く其御子の守育て御  
 名の羅喉羅太子とやせども是迄の憂御難儀の日陰の君故世を忍ぶ忍ぶの君と綽名せられ莫

祝者のみ多かりし左に全く君のお胤にわらず遣ひ密夫の胤なり杯と云立られたり开も亦強  
 ちに謂れ無き事にしもいはず父上初め姫君さへ見棄て宮を去給へば杯て御子の出来可きと  
 詞の劔に責らるゝ夫のく姫上も世上の女子の苦みを唯身一つに受たるより尚ほ余りある  
 御艱難にて既御生害迄爲れしが幸も御命の程は恙無く今少しの日陰を出て居らせらる  
 どいやすものゝ中に今も尚ほ兎や角と矢張疑ふ輩も有りぬ此羅喉羅様の御事を初め耶輸  
 陀羅姫のお身の上も先第一に聞へ上度存じたれどもわの如くに數多の羅漢の其中にて粗忽  
 の事をすてゝ如來の御爲如何と憚り茲まで上るなり如來王宮に在せし砌りに耶輸陀羅女  
 と陸事其御覺へ在すにや在さば明白に私しよ仰せられよ惡敷の更に致すまじ殊に姫上も  
 身の晴となりて嘸や安心ある可きにと述る時しも優陀夷の女房の唯一人配膳に出んとせし  
 が折悪しと須臾様子を伺ひ居るに今夫の云ふ事ハ羅喉羅太子の御身の大事なり若し虚と有  
 ば何と爲んど心も心あらざりしが如來の包まらず宣ふやう耻しやノ優陀夷我尚ほ凡夫の其  
 昔に耶輸陀羅女の腹内に残せし胤の在ながら年若ければ恥らひて其方にも告ずに去し故其  
 疑ひころ便なけれ噫是非も無しと宣ふ御聲を聞よりも優陀夷の女房の飛立思ひに我を忘れ

て走り出テモ有難や何よりも其お詞に永の星霜案事暮せし憂ふしの胸の支へもさつぱりと  
 落附侍る嬉しさよ先以て若君様と云ふを優陀夷の粗忽なりと言て眼配に知らすれば其れど  
 心附て容を改めイヤ實も如來様何故にお還りの遅かりし貴君のく聞へませぬ如何に衆生  
 を救せらるゝ御誓願なればとて私し夫婦を見殺に遊さるゝお心か宮を不圖出給ひしより十  
 二ケ年が其間の譬へやうも無き苦勞心配何科有て其苦みを妾等に受させ給ひし予开も母上  
 様御臆胎にならせられたる其時より此身に懸ての御介抱生れ落させ給ふが否や此懐中にて  
 お育ありし其執みを仇らしく待遇給ふ御心ばへ争佛の道に有べきぞ开が上に又其御髪のお  
 姿衣服の荒々敷單の太布は奴僕も同じき步行素足叔母君様が最前の仰せの實に御尤もあり  
 御國の内へ兎も角も邊り近國の他眼も有に那處に集へる羅漢達の皆由緒ある人々にや余も  
 門閥の者には有まじ一目見てさへ筋目の知るゝ其はしたなき賤の男と別ちも無く打交はり  
 殊更同じき衣服にて能もお還り遊しぬ世の俚諺にも古郷への錦を飾れどやせべころ此程如  
 來の御歸洛に附輿御殿の女中達の部屋方まで新なる服を重ねて祝ひ侍りぬ御腹立の在もや  
 せんが無慘や君のお容ハ非人乞食と同様なり何とて斯る態をば爲されし予仮令御車の玉の

興に乘れずともわれ仮初の手興にも召せられ杯て御歸落の遊されぬ予君のお取の帝のお  
 恥なり今日御還りの嬉しさに引替て又百倍に此御仕打の程か恨めし、又た優陀夷殿も優陀  
 夷殿なり疾くお迎へに出あがら此等の事を何故へ品能取扱ひの爲られざりし女の眼にさへ  
 餘るものを心附ぬの第一の越度に侍らずやと泪ほろ／＼落しつゝ、打嘆つを優陀夷の睨附  
 這の喧しき諫立哉夫等此れ等の如來の元來我等が胸になくてやの女なんどの知る事ならぬ  
 夫よりも其方の役目なる配膳の儀を能く勤めよと戒められても愚痴がましくも尙ほも吻  
 くを如來の見返り給ひ噫女おがらも優れたる心の詞に現れぬ否何呉と我身の事、其方夫婦  
 の蔭を以て育ちし恩の父母に比べても尙ほ劣るまじ扱我斯る容と成て身に纏ひたる此太布  
 の夫の十善の位を棄て衆生を救ふ誓ひの程を普く示す法衣なり今尙ほ舊の凡人にて斯る容  
 にて還らばころ帝を初め國民も嘸かし蔑視べし我の早太子に非ず庶人に非ず即ち諸天諸佛  
 にも釋迦如來と拜せらるゝ大千世界の身の譽れありぬ开をしも知らぬバ又恨むも道理なれ  
 ど我に於ては更々耻べき容ならぬバ氣をな痛ぞ左有べころ那處なる羅漢達も皆この我が容  
 を慕かれ美衣を着又車に乘たりとて徳あくバ附隨ふ者の杯て有んや我の唯宜敷事をのみ説

聞するを勤めとすれば容の元來詞さへ更に飾らず繕るのず开を訝るの世俗の習ひなり唯打  
 任せて置ころ宜れ時に優陀夷我の先母摩耶夫人の御墓へ参りて報恩致し度し此儀よしな  
 計へかしと仰せわれバ優陀夷其儀の委細拜承しが唯今聞へ上侍りし御世繼の儀然らんに  
 の君を措き奉り若宮の羅喉羅太子に相定め帝へ奏聞仕らん尤も今日の光明の臣の御留守居  
 して参らぬバ後刻渠ども談合して諸臣等にも傳へし上にとやす詞を打消給ひわら好なし羅  
 喉羅を以て世に立ん事の思ひも依らず聊か我に仔細もわれは是非共世繼の難陀に定めて父  
 上に言上せよ先にも已に言つる如く渠が放逸不義の事、我受合て止むべしと宣ひすれば堪  
 へぬ女房先お待遊せ優陀夷より定めて聞へ上しあらんが難陀様へと言掛るを如來の押留詞  
 を正して否難陀の身の上の最早別に聞にも及ばず再度此事の詮議の無用と改まりし仰せを  
 蒙りて夫婦の案に相違おし押して云ふべき詞もなく口を閉てぞ退きける「扱又人々が今日太  
 子様の御歸落とて驚く中にも最勞の敷の耶輸陀羅姫の身の上なり是まで何角障りの有ける  
 故も目見に出る事も適はず憐れ片時忘れもやらず焦れに焦れて待つ君の十二年目に戻らせ  
 られしを他所に聞居る苦しさに恨みつ歎きつ夕陽山の方へ向ひし部屋の小窓を推開き羅喉

羅太子と侶俱に那方の空を詠め給へば實に大切なる若宮の御歸洛遊す事なれば夕陽山へ赴く者の眼にの見へぬと人音の自ら耳に留れば尙ほ羨しく伸上り見やる眼元に何と無く悉達太子のお容の見ゆる様にて氣も慢然にて頻りに戀しく堪へ兼如何ほど重きお咎めを受けばとても今何として茲に斯して有るべきや女心の一筋に思ひ詰たる胸を定めて局を呼て云々と所存の程を私語て其方も供して參れかしと云ふに局の駭きて开の外の事なり物に狂のせ給ひしか併しお心の急るゝの御尤もに存ずれど輕き方さへ戴きしお絹配りも無き程の障りある御身にて無理なる事を遊しての後日の御沙汰如何ならん今日こそ見へ給へぬ迎程も無く此宮へも入せらるれば其折に御對面の無くてやのあるべき是までの次第の今日優陀夷殿が彼處にて中上實を極めて帝へ奏し今にも召に来るべし其時こそ口離なりども貴女に超る譽れは無しと私し迄も嬉しく待に胸さへ悸き侍りぬ必ずお心を短くして是迄の御辛抱に傷ばし附て給へるな夫も優陀夷の奥方が茲に在るに告試みる術もあらんなれども彼の方も御山へ往れて留守の事あれば外に相談の相手もなければマア御氣長に待せ給へど道理を別て論しければ耶輸陀羅女も詮方なく泣々想ひ止りしが羅喉羅太子へ更らに聞

給はず實の父に逢ふ事を誰が咎むる謂れやある先我の一人往きて父上に見へんと賢き中にも頭是ささに違ひしことのある杯の知し召されば之れを云ふても解らずして強泣せがみ給ふに予耶輸陀羅姫も其御心の最不便に在す故我さへ往らずば後日に至りて左のみの咎めも有まじきが唯案事らるゝの道途の案内にこそ誰をか附て進らせんと思ひ困じて居給へば羅喉羅太子の急立て誰も入らぬわの御山の聲が遠から見て置ぬと解無くも宣ふゆへ然に御心に任されよ然ながら御身の未だ父上のお顔も知らず假令名乗し迎父上も亦我子と極め難かる可し是に僥倖宜品ありと遺物に残りし片袖を取出して渡し給ひ是のこれ父上様の此宮を出させ給ふ其折に御門の扉に隔られ裂れて妾が手に残りしお遺物なれば御目に懸て親子の名乗をなし給へ忘れても賤下なく粗忽の舉動遊して人に指をな指れぬやう御心に懸給へ然に先途中を忍ぶ衣を召とて立寄つゝやをら裾袴を着せければ羅喉羅太子の莞爾と打悦びて少しも臆る氣色無く勇給ふを耶輸陀羅女の見る目嬉しく涙を拂ひ聊か心を慰めて局に云々云附給へば局も流石に留め兼て然に逆案内をなし御庭口より出し進らせ見へ隠れに御跡を附しが不思議や未だ歩行にての外へ出させ給ひし事も無く御年迎も足らざる上の方に

の似も寄ずはかどり兼る路次を歩行馴させ給ふ  
 が如くにてすた〜走りに横目も觸ず只管急に  
 夕陽のお山へ疾くも着せ給ひ御門の内へ入せら  
 るゝを肩の腕と見届て戻りて斯と告るを聞き耶  
 輸陀羅女の笑傾むけて這の正しく血脉の糸の引  
 所かと殊なる悦び給て肩を濡く勞ひつゝ又御返  
 りを打案事且娛みて起つ居つ爲す事も無く待詫  
 ぬ「去程に釋迦如來の摩耶夫人の御墓へ詣て給  
 ひて夫より直に大殿にて父母報恩の御說法又四  
 諦十二行の法輪を轉じ般若の功徳を説給ふに附  
 帝橋曼彌其外も皆此法座に着ぬ無く羅漢達ハ  
 一群に座を列ねて今已に法議の始る所にて今道  
 心の可難阿難も衣を賜へり容を替て羅漢の中へ



優陀夷



優陀夷  
 獅子吼  
 菩薩  
 授戒  
 の  
 劍  
 と

獅子吼菩薩

進出つゝ舍利弗目連より段々  
 々に數多並し其上座を取ど  
 してければ舍利弗も外なら  
 ぬ如來の御親戚に在りて  
 座を禪らんと爲たりし如  
 來ハ此を御覽じてヤヨ可難  
 粗忽なり授戒の後の貴賤な  
 し四大和合して假に身とな  
 る者なれの固より吾我なし  
 驕慢を以て席を正す謂やわ  
 る假令高位高官たり共門入  
 する事の遅ものハ末席にこ  
 そ座す可けれ其の舍利弗ハ

下賤ながらも我宗門の長老にて諸人も殊更敬り御身二個のあれに居優陀夷の子息樂特の次座に若て然べしと示されて可難阿難も詮方なく今迄の家臣筋にして殊に愚鈍なる槃特の下若座も口惜きと心に思へ共二人等く末座より下りて可難阿難と並座すれば如來の又も宣ふやう同じき從弟どの云ながら可難の父の阿難の父の兄あれば开を重んじて前後の席を別つたらんが我門に入る事の開阿難の方が先なりき可難の阿難の出家を見て發心を爲たるなれば阿難が誘引し出家なり然る功徳の阿難が深し上座よりあれと理を押たる御詞は實に動ぬ所ありと二人の新發意の感服して一儀に及ばず座を改めぬ時に如來は優陀夷を召給ふに依り早速如來の御前に進み出て先程仰せを蒙りし御世繼の儀を我君へ聞へ上侍りしに難陀の心底も改まり且如來の定めと有る渠を春宮たらしめん事然る可しとの仰せなり又可難太子阿難太子の御勘氣も故なく死されて深く其志しを愛悦ばせ給ひにき扱召させられし其筋の如何にと伺ひませば點頭給ひ开を聞て先心安し扱汝ちを呼し餘の事に非ずかし我今斯る身と成しも偏に其方の養育によれり其功徳の限り無し是に依りて其報ひとして我今汝に三歸五戒を授く可し此方へ進めと宣へば優陀夷の頭を擡つゝ其儀こそ願しく侍れど私しと國

政を司りて萬民の公事を裁判し刑罰の儀にも拘る身の今出家とならば我願ひの適ひ候共君へ對して不忠ならん願て位を退きて刑罪は勿論軍の駈引にも拘らぬ身となりて後の清く三歸五戒を受もせめ今劍鋒を狭み乍ら斯る尊き戒を受けての却て身の科どもならん斯る障りの是ある故まづ子息をば奉りしと威儀を繕て述終るを聞て如來の微笑給ひわら愚なる事をぞ云ふ开も國政を司れば刑罪及び軍の事の掌にある慣ひなり万一乱を鎮めん爲に甲冑を着刃をかざして敵陣と戦ふ砌りの何を以て後の世の助との爲し侍る斯る場に臨みては念佛より外に頼みの有じ然る武士の念佛を以て娑婆の命を輕んじつゝ攻戦へば勝利ありぬ又郎等士卒等の潔く戰場にて討死せし其報ひの何を以てするや此忠義の魂魄を賞するにも念佛の外に無し此覺悟無き者の戰場に臨みて娑婆に心を引かれて未練の働きする上にきたなき死を遂其亡靈の妄念の此世に迷ふが故に或ひの火となり鬼となるなり是後の世の安かるをしらぬが故の業予かし縦へば軍に出んどならば此賤しき世を去て彌陀の法座にて限り無き樂みを見る可きと觀念すれば心も安く八万四千の煩惱の魔軍共が黨を結びて貪慾の旗を押立瞋恚の鋒先を揃へつゝ愚痴の馬にて路を遮り功徳の寶財物具を剝取んと立向ふと

も念佛にて煉ひたる慈悲の兜忍辱の鎧も立矢の有はころ群がる魔軍等の獅子憤迅の勢ひありて縦横無碍に駆廻るとも十念の間の聲に恐れを爲し我から迷ひて己が手に頓滅する事疑ひなし扱又汝ちが帯せし刃は世に二つと無き功德の物と辨へ知るやと宣へばさんし私しの差料の此劍名の獅子王と言傳へて天晴の業物なれば數度の軍に手柄ありぬ然るに未だ不審晴ざるに此劍を抜度毎に獅子の吼る聲ありて此尖刀に向ふ時の鬼神も其大刀風も倒れ死す既に如來未だ若君にて總頭覽院に在せし時魔界の長本たる法性妙顯が妨げんと爲てけるを某し此刃を以て切拂へば避易して何所とも無く失去ぬ彼程に徳の有者なれば謂れ無き者に有じ其素縁を知し召し御傳へ下されかしと最懇切に請ひすせば如來の御機嫌麗しく然はころ其劍の濫觴をば我宿明通以て能く知れる所なり是の此其昔名にあり二十五菩薩なる第七なる獅子吼菩薩が多門天より授りたる寶玉の上を包むに即ち眞言秘密を以て能作性玉を煉しが其余る所を以て一口の劍を打に八万四千の雜數を當一雜毎に念佛爲給ふに予遣は是菩薩の大功力にて八万四千の煩惱を斷切爲の名作て是予即ち彌陀の利劍あり然からよ此劍にて討る者の非業無慘の最期も似たれど其實の即身成佛の疑ひ無し又此劍を抜毎に獅子

の吼る聲する凡夫の眼に見へねども獅子吼菩薩が獅子も化して尖刀に現れつゝ怨敵退散爲しめ給ふなり斯る奇特の者なれば我祖父の獅子頰王へ瑞縁ありて授けらる然るに近國にて賊兵の起れば之れを汝ちが親へ與へられ其亂を鎮めさせしに亂の固より國も之より能治りて刹へ抜群の忠義を生涯に盡せしが此を傳へし汝ちも亦親も劣らず忠誠を抽んでこそ全く以て其名劍の威徳なれば夢々疑ふ事勿れと諭し給ふを聞よりも優陀夷の打駭き片邊を向て我刀を抜放ちて睨つ睨めつ爲る内にも自然と獅子の吼る聲の邊りに聞へ渡るが故に再拜しつゝ鞘に納めわら有難き素縁かな謂れを知れば身にも世にも替難き寶なり开も此劍の有ん限りの國土豊に子孫まで忠義を盡す嬉しきよ扱御教諭を蒙りて愚痴の存念も改まれは直ちに三歸五戒を授けて御弟子と爲し給へど謹みて冀ふ此一條の御諭しを其座に列る人々の皆感じ入りて聞居たりしが優陀夷も已に御弟子になるべきやうの詞を僅に洩聞より渠が女房の關敷簾の内より此所へ進み出て如來へ向ひ恐れ乍ら上ん帝を初め奉り橋疊彌の御方も優陀夷の出家の先暫時止めよとの御沙汰に侍りぬ惡からず思召て此儀の御用捨下されたと述るを如來の聞召て否今戒を授るとて優陀夷を法身より致さず唯其身其儘にて

歸依せしむるのみなれば位司も身の勤めも是迄に替る事なし此儀を宜敷披露せよと仰せ  
 わりて其儘に優陀夷を招ぎ近附て三歸依五戒を授け給ひ夫より直様諸人の爲に尊き御法話  
 の始れり此時より優陀夷の名を優婆離と改めて内實の十大弟子の内に入りぬ暫わつて御説  
 法も已に半過つる頃欄の方何と無く人立爲つゝ鬘々と羅漢達も立騒ぎて下れ〜と云ふ聲  
 すれば簾の内に居並びたる女中達一人一倍に最喧しきが世の常にて早大變の起りし如くに  
 這の何事と狼狽廻れば邊々詰居る持々の司人等の打駭き御前の近し殊に又世に有難き如來  
 の法義を聽聞の半と云ひ何者の狼藉にや是非に取押しとしてけれども大殿の内隙間も無  
 く人の彌が上に集り居れば身動きもならず起も立れずして唯シ〜と聲を懸れと騒ぎの  
 更に鎮まらず開も何事にて有べきや這の正しく羅喉羅太子の來らせ給ふものなる可し其事  
 の委敷の次編の始めを見て知るべし

釋迦八相倭文庫三十五編終

釋迦八相倭文庫三十六編

然れば羅喉羅太子の親なればこそ子なればころ歩行も馴ぬ路芝の露踏まだきつゝ夕陽山に  
 赴きて覺束なくも父君を尋ね給ひ他眼を忍ぶ身の衣を被て群集の中を分つゝ進み入り給ふ  
 を皆々女と見紛ふ者から警護の者共馳寄て這の粗忽なり扣へずや此處の尊き法座と云ひ殊  
 に帝も入御なるに女人の身をも顧りみず此迄推て還入し正しく魔道の者ならめ疾く立去  
 らず用捨なく擲め捕んと支へる詞の荒々敷聞へければ迦旃延の立出て事の由を問ひ糺すに  
 此者斯く奥深く迄父を索る者と偽り御門〜を越て來りと皆口々告るを聞迦旃延などや  
 かに偽り眞の兎も角も父を索る一言の孝の道にも適ふが故左迄に答る謂れいなし徐に外面  
 へ連出よ如何に此所に其方の父の非ずりし疾く出ずば惡しかりなんいさ疾々と立塞がり論  
 すを聞て羅喉羅太子の被さし衣を掻やり捨て開も我の女人に非ず正しく父に見ゆる者なり  
 汝等知る事ならず其處除くしと押遣りて尙ほも進み往んとするを迦旃延不圖心附備り  
 此者の羅漢の内の子ならんと思ふ者くら押ても止らずに棄置て見るよ竟に法席に進み入る羅  
 喉羅太子の辛くも茲まで來りて座中を殘らず見渡せども多くの沙門にて何れも皆同じ容の



袈裟衣なれば何れを父と別よしもなくあれり是りと稍須臾見慰ひ給ふ体なりしが親子の縁  
 の争ひれず十一並びし高座の其中央なる如來のお前へつかくと進みより右見左見つゝ腕  
 きて携へ給ひし片袖を差出して拜し給へば如來も亦訝し氣もなく高座を半下り懸て其片袖  
 を受取給へば並居る羅漢の眼を睽不思議の童と見てける内に如來の佛に在せども流石親子  
 の恩愛の尙ほ棄難くや御涙をばらりと落し給ひあら愛のしや幼けなき身も誠心の淺から  
 て未だ見も知らぬ父を慕ふて供人一人も從へず遙々尋ね來る事の最憫然なる志しよと宣  
 ひつゝ初舍利弗長老を初め大羅漢達其外の徒弟の面々に羅喉羅太子を見せさせられ开も我  
 未だ凡夫の頃耶輸陀羅女の腹に残せし我實子と侍れども誰にも言て去し故母子侶俱に疑ひ  
 れて愛目を見しと聞たりしが嘸うと我を恨つらんと云つゝ頂を搔撫給へば羅喉羅太子の漫  
 に打歡び給ひ扱こそ唇が父上様よ今仰せの如くに母君侶俱世に淺問敷疑ひを受て數々の責  
 苦を見て世も出る術もあうりしを何と云る仙人の示し事に力を得しが夫さへ人の讒言に  
 裏表を云ふ者われば母君の一人心をのみ痛めて動共すれば御病の出るも道理なりわの廣  
 ひ御殿の内に母と子の便り方に成けるの優陀夷ばうりよて其外の皆仇敵の如くなりし永き

月日の艱難を思し給ひ少しも疾く宮へ來まして母君に見へて給ふ父上と云ふ間も落る  
 ろろく涙細き袂に受ながら如來の袖に縋り附引立給ふすいぢらしき舍利弗初め羅漢達の  
 皆御側に平伏してわら尊き師の因位かな夫ども知て粗忽せし罪の程深く免させ給へと詫つ  
 尊びつ羅喉羅太子の詞を聞て皆く感涙を催しけり扱この光景を遙なる那方の簾の内に見  
 ゆれば淨飯王の不審に思して優陀夷を召て今那方へ來りし童の何者予遠眼も能く分らぬ  
 ども若し羅喉羅羅にの有ざるやと問ひせ給へばさんし臣も左ころと存すれども羅喉羅太子の  
 唯あ一人にて此へ來給ふ謂れの侍らず兎も角もど立て往く後又續きて女房も往て見れば思  
 ふに違ひぬ羅喉羅の君にて在せしかば駭きつ又悦びて優陀夷の如來に打向ひ此和子こそ耶  
 輸陀羅女の産せ給ひし若宮なれ實の如來の御胤なるや尙ほ明かに告給へ其由帝へ聞へ上ん  
 どヤすを如來の聞取ずや優陀夷我何故に偽りを云ふ可きや疑ひもなき我子なりと宣ふを  
 聞く女房のわら嬉しや有難や急ぎ此由を優陀夷どの帝へ奏して橋曇彌其外へも知らせ給へ  
 ど詞漫に告るを聞て羅喉羅太子の女房に打向ひ我身日陰の者と云れて今日此所へ父上の入  
 せ給ふを誰ありて知らせ呉る者もなく母君迎もお免し無ければ唯お部屋に打潜み泣て計り

在するを見るに絶兼て磨り替りて此へ推て参りし事の帝を輕しむ所業なれ定めて御沙汰も有可きが其處等の能く其方達よりお詫すて呉られよ磨が此へ來し事の全く母の勘めに非ず若し科どもなる事ならば母君の御存じ無き事ゆへ此磨一人は負せ給へ此上の頼みに何卒疾く母君を父上に會せてたべ何卒くど左右を見返り播口説かれて優陀夷の女房ナ、御道理様に予然ながら最早明りの立し上の御沙汰なくしてお出有ども何あり咎の有可きや妾迎少しも疾くと存ずれども左すれバ母君已ちらず難陀太子の御腹なる好容夫人鹿野女様杯も渡らせられねバ適のぬとされども此方々の皆先に違ひ目の有事なれば早速お目見へも如何わらん若様の能くころ心利て御出ありしが傍伴にして早是迄の冤罪の科も明かに晴渡れば何寄以て悦べし母上の御目見を憐らせらるゝの道理なれど唯今やせし譯なれば左迄も急せ給はずとも須臾御心を落附て先有難き御説法を聴聞して在せかしと論しやせば聞分て羅喉羅太子の如來の御袖をやちら放して御傍に最柔和侍き給ふに引替て最もどかしきの初めより女房の來るを見るよりも樂特の母様久しや抱てたべと前後又纏ひもつれて妨ぐれども多くの中にてはした無く阿り附んの流石よて詞の我君手の我子を搔拂ふを尙ほも亦大の男が

わまゆる状見る者笑ひを催ふしける時に如來の羅喉羅太子より差上給ひし片袖を人々に見せしめつゝヤヨ方々此へ寄て此片袖を能く見よかし我未だ悉達たりし時宮を出る遺物にとて豫より二十五言の文を以て羅喉羅の事を認め置が別る其時已に姫の手に残り今復我手に戻る因之偽りなき證しなりと宣ひて彼の片袖を取直し翻して片端よりさらくど引放ち給ふを見バ我去後三年過可得於善男子即是我因位爲正汝生來大善知識と明かに識して有は是を見てける羅漢達の云ふよ及ばず優陀夷夫婦も深く感じて俱に急しく此由を帝橋曼彌へ告奉れば二方も實に然事の有けるか然どの知らて母子共に疑ひ受て苦みしも皆自ら等が愚ゆへなり不便の者よと歎かせらるれば數多の女中も唯今こそ是迄の疑念を晴して打歡び且の又耶輸陀羅女の操を感じ最尊く予思ひける扱帝より優陀夷を以て斯る尊き羅喉羅なれば何卒世繼に立度由又改めて仰せらるゝを如來の聞し召て否優陀夷其仰せも重けれど地上に溢したる水の再度器に戻らず君の繪言の云ふ迄もなく我詞も亦堅固なり既に是此片袖に識し置たる文に早大善知識生れぬ先に極め置たる羅喉羅なれば世に立ん事思ひも寄ず一旦仰せ出されし世繼の難陀に極め呉よと答へ給へバ優陀夷も余儀なく此由を聞へ上て

止よける斯て如來の舍利弗を以て羅喉羅太子の勤學の師と定められ即座に翠の御髮の未だ  
 揃ぬを剃しめ給へば並居る羅漢達の其外の皆最欲く思ひぬいなし況てや女房の羅喉羅太  
 子の飾りを剃給ひて見すばらしき御状を見るに堪兼て 鬧敷橋曇彌のお前に進み出てや  
 う羅喉羅太子只今不意飾りを剃せられ早佛門に入らせ給ひたり如何に善事なればとて永の  
 星霜日陰も在して今漸くに人々の疑念も晴たれば是より耶輸陀羅女侶俱に昔に優るも惠  
 以て是迄積りし艱難の落目を購ひ給はず何とやら貴君方を始め私共の罪科もそら忍敷  
 の侍らずや如來の義理を立させられて難陀様を世に立るとの仰せの有ども其處を貴方様よ  
 り羅喉羅様を世に立給ふの如來への義理に侍りぬ有れもなき那の容に和子を爲る御心  
 の若し難陀の御子の御世となりて羅喉羅様も成人まじくなば世を争ひ給ふ事の有もやせ  
 んかと末を圖りし如來の御遠慮なるべきが羅喉羅様に限りて争然る事のある可きぞ尤も  
 御世を繼せらるゝ其筋目の如來様にて其又御子の羅喉羅様ゆへ後々に至りて佞人杯が僻事  
 を勤めまじきにも非ず杯思さん無理ならぬと開の絶てなき事なり右も左も先御出家の止  
 め給へ及ばず乍ら私しもお後に附て此旨を聊か速度存じ侍りぬとさせば橋曇彌の點頭給ひ

諸の羅喉羅の罪を免され疾くも沙門の身と成しが未だ其事の聞ざりしが開の最不便の限り  
 なり今其方がやす所い盡く道に當れり自らの存念と露達ぬぬが先帝へお歎やて見ん其方  
 も妾が詞を繼て忠實に述て給と即座に帝のお前へ出て羅喉羅を世繼に立度事且落飾を止め  
 度よしを云々と願ひけるに帝の之れを一々聞召て二人が願ひの趣きに我心も聊か違はず  
 何卒して爾ある可きやうにと最前も優陀夷を以て懇切に告たれども其事の堅く辞へば我も  
 是非あく諦めぬ我子ながらも如來の早凡夫よあらぬに強に云論す事も適ず如來は斯く難陀  
 を世に立るの我への義理と思ふが故種々に論しけれども渠はや堅く決斷せし詞を聞かば  
 し此後給て云ふ事わらば優陀夷に告て吳よかし斯無氣云ふ時の我難陀を世に立度思ふゆへ  
 どや疑ひんが我難陀の形狀を見るに渠の中々の痴者にて殊も淫奔不義を好み國土を  
 の難かるべし是に依りて世繼をば再三羅喉羅に定めんとすれども如來の難陀の不義放埒の  
 堅く改めざるもわれを強てども云難し此上の兎も角も其方達二人に任すれば宜敷や  
 うに計へかしたと臆底もなく宣へば橋曇彌の赤面して如來が左迄も宣ひて適ひぬ事との露存  
 せず粗忽なる儀を願ひ出ぬ然らば世繼の事の先措きて何卒羅喉羅の沙門をば止められて宮中

に尙ほ有しめて給ひるやう這の止難き願ひに侍りと述るを帝の又も押留給ひて开も我の已  
 ん心附しが羅喉羅の生れぬ其先より善知識と定むる程の不思議の證を見し上の云ども又其  
 甲斐なかるべし唯諦めるより外なしと宣ひすれば二人共一つの願ひも適はずして残り惜  
 さ限りもなく兎やせん角やと思ふ内已に還御のお觸も有らば其儘にして止にける○去程に耶  
 輸陀羅女の羅喉羅の君を唯一人夕陽山へ赴かしめ其御返りを待けるに夜に入る迄も音沙汰  
 の無ければ最々案事煩ふ程に我私しの計ひなれば誰に問ふべき便りも無く旋のあれは夜に  
 入りて局を出す事も適はず部屋の者共皆打寄て秘密くど私語のみ詮術も亦折ころあ  
 れ局々は最と俄然に驚きて人音繁く聞ゆれば扱ひ今轡曇彌の方の御山より御還りならん此  
 御人數に打交りてお返りも有しかど夫と無く伺へども其様子に會てなし扱ひ道に迷ひ給ひ  
 しか但しの狐狸にても惑ひされぬ給ひぬか若しやと怪我の無かりきかど彌心も安居  
 されば耶輸陀羅女の思案に詰りて此上の何とせん我其過りを優陀夷殿の内儀に告て急々に  
 詮議の事を頼むべし我身の科の兎も角も羅喉羅太子の身上は此儘に棄てて置れずと局を連  
 て間近なる優陀夷の部屋へおもむきけるに僂侍夫婦の今下りて居合せければ述敷まづ女

房に打向ひて今日羅喉羅様の望に任せ不肖なる計ひして御山へ一人おもむかせしが今以て  
 戻らせられず案事に案事て今のはや面伏なる計ひを悔ても返らぬ事乍ら假令妾の如何様の  
 科をさるども厭ひのせし何卒若の御在所を尋ね索めて下されかしと涙さしぐみつゝ頼みけ  
 れば優陀夷の女房の打微笑道の何事かと存せしに羅喉羅様の御事ならば御心安く思されよ  
 早如來に見へ給ひて御父子の御名乗もあり殊に寵み深き余りに直様御弟子に附られたれ  
 ば最早宮へ返らせられずとやすを聞て耶輸陀羅女はわら嬉しや疾くも若の恙なく親子の  
 お名乗爲れしと如何にも是迄暗かりし御母子の冤罪もさらりと晴て其方様も之よりの昔  
 に勝る身の譽れ是に附ても阿私陀仙の告たる一言の不思議にころと云に悦ぶ耶輸陀羅女の  
 何彼に附て御身夫婦の手蓋も成れし是迄の情に依りて今日再度天津日を見る悦びの此上願  
 ふ事無ければ少しも疾く我君に見へて胸を落附たし此儀を宜敷含みてよと頼めば女房の  
 氣の毒なる面して然らば其事なり私しも开を第一に思ふが故羅漢の在さぬ隙を伺ひて其方  
 様へ御對面の事をお勧めせしかど今凡夫を離れたれば我も於て妻のあし逢ふ事適ひ  
 ぬ杯と心強くも宣ふ者から奥方なくして斯計りに御子のあるべき謂れなしと此筋を述んど

せしが左程の事を辨へ給ひぬ如來も在さぬべ何か仔細のある事と先其儘に聞て措きしが折を見てお目見の私し宜に計ひやせば須臾扣へて在せかしと論せば殊なふ悦びて一禮述て別れつゝ其身の部屋へ戻りける程なく夜もあけぬと明渡り庭に雀の鳴聲と侶俱に奥の口を守る者急しく優陀夷の部屋へ來りて夕陽山より御使として舍利弗尊者が來らせらる如何計ひやさんやと云を聞より優陀夷の悦びて直様客間へ案内せよと指揮を爲つゝ支度を改め頓て立出て對面す女房の開も何事にやと案ずる者から次の間へ密に往て伺ひ居つ折を見合せ真人を招きて仔細の如何にと案れは優陀夷の詞を改めて今の何をか包むべき此ほど如來の御法を聞奉りて信心する余りに結縁して三歸依を授られ名も優婆離と改めしが帝のお詞重くして未だ沙門の身と成れぬを最遺憾に思ふあり是に依て我密よ舍利弗に相頼みて實の沙門と成ま欲く來駕を頼み置しなり開も功なり名遂て身退くは是天の道とし云は如來も御歸洛在す上の案事暮せし羅喉羅の君と耶輸陀羅女の事迄も早恙なく濟上の今より宮仕へを退きて墨の衣に世の塵を清め度我願ひなりと告れば女房打駭き道の思ひも依らぬ事予かし左程の仕儀を何故に妾に一言相談せられずや然らば先其方を初め帝へも内々に唯潜かよ

事を爲し其上にて其方へも明しお上へも光明を以て云々と願ふ所存ありと半分聞ずに女房は目に角立開の恨めしきお仕打哉連添ふ者へ心を隔て密に沙門とならるゝの正しく此身に愛想が盡て夫婦の縁を切ためならんアラ聞悪し徐にせよ我何を以て其様なるものあるべきぢイヤ〜左右で御座んする其方が仮令左う爲るゝとも此方の二世の義を守り何國迄も離れぬせぬいで先是より御前へ出て此儀を疾く披露せん今となりてのあの生聖りの舍利弗殿も憎らし〜と最口ぎたなく罵りつゝ果の恥をも厭はずして泣聲洩てはしたなき妻の愚痴にの優陀夷も常惑しぬ左のあれ今更渠故に大事の存念を達せずバ竟に罪障消滅の其期に達ふ事難かるべし且君よりも如何やらの御沙汰あらんも圖り難し此身の今日が實に是一世の浮沈と覺悟を極め豫て用意の品々を取出して舍利弗尊者の前へ出急ぎ剃髮を頼みける「其時舍利弗の優陀夷の依頼を默然として聞乍ら思ひの外に押し止めつゝ懇切に論すやう否優陀夷殿此程の貴方が沙門を遂度とある故直ちに密々や上しに如來の曾て承諾給はず渠の未だ國政を辞退して宜身に非ず且又帝を初めまゐらせ渠が女房も今の尙ほ之を快く思ひぬバ這の兎も角も難陀太子障りなく御世を繼せられ其上にて然るべし急ぎ止めよとありける故斯

未明に参りたり先此度の發願の止り給へど傳へければ優陀夷の咄と歎息吐てあら口惜き事  
 るこそ我國政を退くとも跡に光明其外の精神も扣へてわれは政事より障りなし遣り正し  
 く我女房が唯今愚痴の舉動せしかば开を聞取て其元早速の計ひにあらざるや否中々何と  
 して假初にも我意を以て如來の仰せに替べきぞ扱の寔か噫また何とせん心を決せし發願の  
 空くあるどの悼まし、我の如何なる因果に予一子の左計りの愚に育ち適通世を願ひぬる  
 も夫さへ適の如來の無慈悲と面を赤め涙を含みて嘆ちければ舍利弗の類笑つあらし心なき  
 仰せかな貴殿の早尊くも亦會難き如來を師として戒を授かる上からの我等に異なる事いな  
 きに如來を恨める今の一言粗忽なりと嗜むれば然ばころ一旦戒を授からず斯る願ひもせ  
 ぬものを淨世の果敢なき事を示去給ひ其時已に得脱せしうば其處にて勤務を退きて衣を墨  
 に染んとせしと帝に支へ止められて是も余儀なく堪へしが片時忘れぬ沙門の願ひなり我  
 今容を替ればとて皆是帝の御爲を第一に存するが故なり今斯く富貴に替たる發願の心を挫  
 き給はずとも快く免されてこそ然るべけれど一念凝たる恨の詞を打聞て舍利弗尙ほも膝  
 を進めて噫愚なり〜其迷ひ心を先清めて今某しが如來の仰せを傳ふるを能く聞給へ夫佛

道を信ずる者豈容に依る可きや唯髮を髡衣をだに染れば出家と思ふの違へり开も三界の妄  
 念を離れたる者を指て寔の出家どころの云べけれ然るを欲界と云ひ瞋恚を色界と云ひ  
 愚痴を無色界と云ひ是を三界又の三毒とも云ふなり我妄念に依りて地獄へ落る事の夫の醫  
 道にいふ如く七情に依りて病を得ると云ふが如し現世未來に別れても此理には異なる事な  
 らず故に佛道の唯我心の三毒を轉ずるを以て知識とす先此理を論らしめんが爲に如來の  
 俗の容を替させられぬ是其任と云ふ者なり然るに其任にあらざして主を持親を持者の猥り  
 に俗の身を替るを不忠とも不孝とも不道に違ふなりと示す詞に氣を焦ち這の心得ぬ論し  
 なり如何に某の俗に在とて一子出家する時の其九族天に生ると云ふ教の傳へ聞ぬ然れ  
 ば主を持親を持者の猥りに出家致す事の適ふまじきに今のお詞ころ不密に存すと難じけれ  
 ば如何にも御不審の御尤もなり其出家にも二つの品ありて即ち有相と無相なり世の人多く  
 の貴殿の如くに髮を髡衣を替て容を改めん事を先とし心の三毒名聞を棄る事を知らざる者  
 あり是を有相の出家と云ふ斯の如き者千万人有り迎其九族の天に生れん事の扱措き却て魔  
 界惡道の導きともならん已實に九族天に生るゝ功德の有る所謂無相の出家に止まれり是の

自ら悟りて以て三界の妄念を離れ父母妻子の恩愛を棄て直ちに父母及び庶人を濟度するの利益を持ち凡八万四千の法門ある此れ凡夫に八万四千の煩惱あるを以てなり何と是等を深く悟らば強ちに容を替て有相の出家を遂んより其身其儘心の内の三毒を自ら清めて無相の出家に成れずやと凜然として説示せば流石の優陀夷も歎息して噫過てり其論にて速かに迷ひの愚念を晴したり然るに此儘にと云ふ迄を女房の小陰に立聞して有しが嬉しき余りに其座へ出て噫勿体なや舍利弗殿斯る尊き教諭の爲に來らせ給ふとい知らて恨みし事を免されよ并に兎も角もはや御時分なり先や朝餉を進らせんと川意の膳を闌敷取出して並ぶれば舍利弗の會釋して云ふやう否未だ齋の欲からず志しし受侍りぬ諸今日帝を初め橋曼彌其外の人達へも大切の御説法有べき旨如來の仰せありける故宜敷計ひ頼み入る某し直様戻りて貴殿が法体を止めしを疾く御聞に入れ度と云つゝ夫婦又暇乞して急しく立て出ける去程に夕陽山にて今日御説法ある由を上より下迄聞へければ俄然に夫々の役人達の皆御供を願ひつゝ彼處に赴き其席へ並居て其時刻を待問程なく如來は法座へ出ましければ帝は禪の高座を下りさせられて懇切に御説法を請ひ給へば如來の平身

低頭してあら恐れありぬ帝より元の御座に在せられよ敬ひ給ふを帝の押留イヤ開の思ひも依らぬ事なり譬の下座にて聽聞せん其方の上座に居らん者又有べくとも覺へぬ先疾く高座に直られて説法われがし只管に勧め給へば如來の尚ほ謙遜給ひて君の論言を背くに似たれど開も説法とて外になし皆此天道の一を尊び偏く惡事を戒めて自然と善道に至らしむる機どのみ思せかし先この最第一とすすの恩の一字にこそ侍れ諸此恩に七つ有り先其一の天地の恩第二に國王第三に父母第四に師の恩第五に朋友第六に眷屬第七に衆生の恩なり諸第一なる天地の恩の母の胎内に宿りて成育せらるゝ思なれば是を報せぬ者皆永く無明の暗に迷ひて晝夜を知らぬ科人なり第二國王の恩と云ふは父母を撫育せる思なれば是を報せぬ輩は三界流浪の果も猶ほ地獄に墮して身を焼る第三父母の恩は我一身の源にて此恩を知らぬ者の後の世畜生に身を變て五体不具の報を受く第四に云ふ師の恩は人生れて道を知るの大恩よてあるものゆへ是を報せぬ輩は皆愚痴無智の闇に生れて永く惡種を免れず第五朋友の恩と云ふも亦是夫の師より異ならず身の行ひの思なれば是をしも報せぬ愚昧等の慳貪無慘の界に生る第六眷屬の恩は過ちを改め非を悟らす身の上の恩なれば是をも

報せざる者ハ所謂人非人にして餓鬼道を免れず第七ノ衆生思ハ世に交るの厚恩なれば是を能く報せぬ者ハ來世に孤獨の身と生れて地獄の責を免れず然ハ此七つの恩を知るものを人と云ひ知らざる者を鬼畜とすなり貧道斯る事の有を知れば御父を下座に置き奉り此身高座に上らん事諸天諸佛の冥罰も恐敷存するなりと誠心を迫て宣ふ者から帝ハ御泪を催ふし給ひ實に有難き論しかな此上の御法やある先賢ハ簾を垂て高座にて聽聞せん其方も直ちに高座に上りて疾く說法ある可しと簾の内なる高座に入せらるれば如來も亦直様に飾り置たる高座の上の上らせられて四諦十二行の法輪を轉じて般若の功德を説給ふ此御說法ハ殊更に最有難く聞ゆるに帝を初め其座の者ハ皆感涙に袖を今浸さぬものなかりけり斯る所へ光明大臣ハ花筒に花を貯へて高座間近く進み出我太子ハ辱けなくも正覺を遂給ひて再度拜謁仕るハ優曇華よりも尚ほ嬉しき御尊顔も侍るなり聊か乍ら佛慮を慰むる爲に鹿花一瓶を奉ると述べ如來ハ御會釋ありてアラ久しや光明の臣無事の對面歡ハしく今回歸洛の事に依りてハ何吳優陀夷まて云置し事あり渠と俱に能く計ひて吳よかしと仰せわれハ光明大臣這ハ最畏き尊命かな早何事も承給ハりぬ夫に附優陀夷夫婦より度々願ひ上たりし耶輸

陀羅女に御對面の儀ハ何卒適ふまじきやと述るを本意なく聞し召れて噫五月蠅や聞に堪ず我ハ夫よりも大切なる修行ありぬ其ハ別事に非ず越方金剛の寶石に於て伽羅々仙の告にて知る我母摩耶夫人ハ今初利天の後妃に在ハ是見へて報恩の說法を述んと存する故今より此法堂なる内院に籠りて以て觀念醍醐の法を行ひて初利天に上るなり此儀帝ハ奏聞せよと宣ふ趣きを拜承光明大臣ハ即坐に御前へ出件の趣きを聞ハ上れば淨飯王ハ須臾の別れをも惜み給へど是も余儀なき次第なりとて直ちに御免わりしかば如來ハ高德のお弟子達の内にて五六人を擇び其御用意も頓て整ひ已に法堂の内院へ渡らせ給ふ折しもわれ扉の陰より一人の女人遽立出て會釋も無く如來の御袖に取絶りて打歎くを疾見給へハ是我妻なる耶輸陀羅女なればアラ淺問敷やはしたなし夫執着の妄念ハ菩提身の薪なり疾く此を放たれよと搔除られても困ずまに踰限ながら尙ほも双手に御袖を握手と押へてわら恨めしやお情あし君王宮に在する内ども竟に嬉しきお詞も無のみならず宮を出させ給ひしも其科を妾が身に引受て計ひ侍りぬ夫も何ゆへとすせば毎迄も御縁を繋がせられて頓て逢瀬を懐みに思ふが故よころ君のお望を達せよいらせて已に其御願を遂させられて今漸くに宮へ還らせ給ひ乍



ら無事かど一言の御意なき已あらず愛てや却て疎せらるゝとは自ら又の早愛想を盡して斯く素氣なくも爲給はんが夫の余りのとにこそ足らぬ女を賤し拵へて御願ひを達し給ひし迎開もや如何なる功德があらん総て女子の嫁入して誰を目的に致すや良人一個の心に適ひて幾千代睦む外なし夫も氣達のはしたなく見棄らるゝ例もあれは御意に染ぬは是非なけれど此身に於ての聊も私し事の覺への無く殊に君の在さぬ故に有れもなき疑ひを受けて針の山へも上る如き辛さ哀しさを堪へしも再度おもひの致し度其娛みのあればこそ仮令秋風の立ばとて本意なく別れ進らせし過越方の年月を數ふれば永き十余りに侍るなり又二人と得難き御胤をも宿し學て有者之斯酷らしく遊ど天魔が魅入も致せしか愛想の尽たる此容に疲れ果しも君ゆるぎ又逢ふとあるお詞を命と頼み侍りしなり今日此へ参りしも優陀夷殿の内方の身に引受ての才覺一つにて忍び居たりし甲斐ありて御説法を聞侍りしが親子の子なりと道を分たる教ありしに妻計りの妻迎も妻たる道の無からてやある得て勝手ある御法聞私しの聞度もなし千辛万苦を漸くに忍びて千万人の苦しみを此身一つに引受つゝ育進らせたる羅喉羅様をば取上給ひて私し一人の仇し野の露を消よとの御心ならん消

よならん消もせん脆き命の惜からぬと夫もて貴君の御身には宜と已思すにや其御心との露知らて御歸洛ありしと聞よりも今にも召か今日のは非此方へあ入り有べしと起つ居つして夜の眼さへ合さて待し甲斐もなく斯く酷たらしき仰せを聞上の最早愛目に耻さへ重ね世に存生る心になし左の云へ自ら死にのせむ迫ての君の御手に懸りて果なば此世の本望や君にも妾を御手に懸給ひし此上なき此身の功德になり侍らん如何なるとのあればとて茲をば放ちのせさるべし打とも突とも御心任せなり兼て夫に任せたる此身のさらゝ厭ひのなし能も遣へしお詞を忘れ給ひし疾く御手に懸給ひれと聲も惜まず泣叫び伏つ仰ぎつ身も漫よ震へ悶る念力にわひやお袖も裂るゝかと思す計りの形状を如來も不便に思召ども無明の愛も引されての觀念醍醐も整ぬは是非なく自失外顯の法を心に結び給へばわら不思議や双手を以て腕と押へし如來の容の唯髻鬘と失させ給ひつゝ早法堂の扉の閉切ければ度を失ひし耶輸陀羅女の邊りを見返りて獨り忙然たり斯る所へ優陀夷の女房の最前より片陰に立隠れつゝ始終の様子を見聞して居たりしが是も同じく堪へ兼て睡も俱に泣脹し走り出て姫を勞りりチ、お道理様なり一つとして其方の仰せに御無理のなし其お詞がいちらしく私

しさへも是此様に袂を絞る程の事なれば争如来の御耳にも聞分給ぬ事の有じ开の兎まれ  
 不思議なるの烟に等しく今の今に掻消やうに失給ふ是の如何と云ふ詞に耶輸陀羅女の扱の妾  
 が縁事を其方の密に聞れしか何にしても妾のはや死ねばならぬ者なれば羅喉羅様の事と妾  
 が後をも宜敷頼み進らすると云つゝがばと打伏ていゝと泣断る計りなり折柄阿難の羅喉羅  
 を伴ひて鬧敷此へ來りて如何に優陀夷の内室能く聞れよ最前お頼みに侍れば我等兎や角  
 手都合して如来に姫を逢せられたれども今見らるゝ如くなれば暫く諦め給へかし然ながら姫の  
 歎きも道理なれば此儘にも致すまじ先時を待れよ如来迎も今回の御修行をだに濟なば何れ  
 どうか御沙汰もあらんよしや御沙汰がなければとて舍利弗初め其外も能く心得てゐるとなれ  
 ば所詮悪く計ふまじ強ち短慮を起されては是此に在す羅喉羅様も無悼ましく思すべし先  
 御修行の濟迄の和子をば姫に預くべしと云ふに嬉しく女房の嗟有難きお計ひ哉頼み甲斐あ  
 る阿難様流石の親敷御中らひ此ノ一姫上唯今のお詞を聞き召つらん必ず短慮な事を思  
 し止りて羅喉羅様を御大切に遊せかし先疾く阿難様に宜敷お禮を述給へと言れて漸く耶輸  
 陀羅女の扱も嬉しき思召御禮の詞に盡されず然ながら如来様の御身の如何なりたる乎此に

失させ給ひしの妾が科の所爲なるか否开の聊か心配なしアレ那處を能く聞れば那鐘の音こ  
 そ法堂にて今已に如来の御修行觀念醍醐の初るるしなり开の歡べし夫に附尚ほ悼ま敷  
 の羅喉羅様にこそ扱てケ様に酷たらしく御髪を髡らせ給ひしや這の最尊き御姿にて如来  
 と親子の御縁を切らせられ辱けなくも師弟の縁を結び給ひし故にこそ开の又思ひも懸ざり  
 き親子の御縁を切れしとの如何なる譯にて侍にやとて又潜然と泣給へば羅喉羅の姫に打向  
 ひて然べころ今は譬に父もなく又母もなき一箇の沙門に侍りぬといふを聞耶輸陀羅女は  
 ヤ、父母もなき身との仰なるが夫ならば早若も此身が是迄手一つにて育てし事をも忘れて  
 かイエ〜夫をばうりの忘れてなるべき予如何にも左社わらん夫ならば毎々迄も此の母の  
 許に居て給ひるならめ否沙門と成からに如来のお側を片時も離るゝ心の在さぬと宣ひす  
 るを阿難の押留開の道理に侍れども尙ほ須臾の此方に居給へ又姫も能く思ひれよ強ちに此  
 和子が其方を嫌ひて如来にのみ随へんと云ふに非ず総て浮世の情体にも母を父に比ぶれ  
 ば地と天との違ひあり然ば子の父に附ものゆへ开を重んじてのことなり然ながら天のみ有  
 て地なくんば天何國に有とせん天地和合して此土現る此を思へば天の高き地の低き父の尊

き母の賤き其隔もなければまづ心を素直又持て能く分別を爲るに如じいざ先暫時休  
 ひ給へどて羅喉羅侶俱に邊りなる一室へ誘ひ到れども猶ほ短慮をや起さんかど危ふむ阿難  
 の尙ほも諫めつゝ又優陀夷の女房に中様近頃中惡きとなれども我等此程沙門となりて過に  
 し科を購ひしに即ち如來の御示しに世に毒蛇を見る迎も女人を見ずと宣ひきと云ふを女  
 房の打消て開の最粗忽のお示しなり仮令名僧知識と云ふとも木の端よりの生れ給ひし誰迎  
 母の胎内を借て生るゝものなるに其恩を蒙り乍ら左な憎るゝ謂れやある世俗にも女人を差  
 て諸佛出世の門と云ふなり已に如來の母摩耶夫人の報恩の爲に迎御法の御修行有にあらざ  
 や母の女に有ざるか女人を見ずと示されなば母の吊ひりせずともわれど戯れがてらに難ず  
 れば然ばこそ然る理を以て聖の金言を譏る事更に男の所爲にいなし皆之女の妬にて理に似  
 て却て理に非ず然ば迎其理よわらぬ仔細の程を説んにも女人の論し難きを以て先の示しの  
 如くなり今其方の言しに違はず女人の實又諸佛出世の門なり何條鬼畜毒蛇に之を譬ふべき  
 唯嫉妬の念あるが故なり然ばこそ如何計り慎み深き女と雖も嫉妬なき者の稀にして心一圖  
 に片寄乍ら却て物に感じ安く又變ずるにも安きが故聖達の女人を厭ふよこそ然ば迎姫上や

其方を指て斯く計り事を設けて云ふに非ず總て女の身の上に備へる性を述る已如右の云  
 へども敢て忌棄て只管に之を憎むにあらば一嫉妬の心を改めて能く八敬を守り以て大精  
 進を致す者の女と雖も結縁して如來の直々に戒を授けて得脱せしめ給ふなり能く思はずば  
 有べからずと深くも諭せば耶輸陀羅女の其八敬とやらん斯不肖なる自らなすにも勤る事  
 にやアラ愚の事を宣ふ予誰なりとも勤めて成ずと云ふ事あらん皆志し一つにこそと告げ  
 ればアラ頼母しや夫あらば御身何卒して教て給命に懸ても勵むべし嗟出來されし〜此程  
 徒弟等が談合して御身に見へ給ふやう如來へ聞へ上たりしに夫の八敬と精進とを勤めて堅  
 固ならざれば違ふ間敷由を仰せられたり諸其八敬を勤むるに先塵俗の容を替て行いぬば  
 適いぬものなり生若き婦人への勤る事も難からん夫故其沙汰の止たるが今命に懸ても有  
 一言の何より以て尊けれは速に八敬の守り方又大精進の大概も傳へ侍れば疾く俗身を改  
 められよと其手續きを教ゆる程に一心凝せし耶輸陀羅女の案せしよりも事安らかに教の儘  
 に得道して先清き服に改められ翠の飾りを落さるれば居合す女房の眼も當得ず殊更に打歎  
 けども支へ止めん構もなければ寔に愛度御姿と涙ながらに祝すのみ斯て阿難の耶輸陀羅

女の落せし飾を請取つ、是を以て如来講しなば、嘸や嘸悦び給ひて、お直に戒をも授けられん。早此姿も成せられて、俗の交ひの如何なり先此所に暫時在して、又の御沙汰を待給へど云つ、疾く身を起して法堂さして、予出行ける暫あつて再度來りて云ふやう云々の旨を如来へ、予て御飾りを見せ進らせしに、一方成ず愛させ給ひて、ころ我妻なれば、後刻自らが戒を授け名をも改めさせんと、われは彌々御身を慎みて、暫時此も待給へど、示しつゝ、又女房は打向ひ唯今聞る、由なれば、附人等を皆あ次へ退け、お身の御前へ引取給へ、我等は此羅喉羅の君を如来の御元へ進進らせん、先とてやをら御手を携へて、徐々伴ひ出行けり、去程は釋迦如来の觀念醜翻の修法の爲に法堂に籠らせられしに、怪しや内院の暗夜の如くにして、黒雲覆ひ妨ぐるは、是す耶輸陀羅女の妄念ゆへと、疾くも悟らせ給ふ者から阿難を以て云々と諭して、得道させられしに、耶輸陀羅女は能くも信じて立所に發心なし、直ちに比丘に姿を替させられて、戒を愛度願ひ立れば、黒雲の忽ちに五色に變じて、靉靄として朗かなれば、異儀もなく天上の時を得給ひて、其御悦び限りあかりしとぞ。

釋迦八相倭文庫三十六編終

釋迦八相倭文庫三十七編

去程に耶輸陀羅女の一人一室に籠りつゝ、香華を立て阿難より傳へ得たる法語を唱へて、余念なくも通夜して在しに、夜の深々と更渡りはや五更も及ぶ頃、何時間入りたるか、忽然として机の前に人影の寫り、此れ不思議とつらく見れば、思ひ掛なき、優男の、娜し氣に居る者か、ら燈火の影はや細りて、睡るが如くに、暗ければ、誰と云見定めも、附ねば、俄然に駭きて、經机を携へて座を替んと爲てけるを、彼の優男は、鬧敷姫の袂を引留めて、聲音優しく、忍びやかに、這の耶輸陀羅姫は、したなし左迄に、駭く事勿れ、余の苦しからぬ者なりと云ふ、其聲の聞覺への、おるに似れども、一圓不審の、晴やらねば、袂を拂ひて、嬪に、開も心得ぬ、形狀かな、此を何處どか、思されて、いつ何處より入りてか、女子一人の、裾に、近寄り給ふ、予、仮令其方は、人目を忍るゝとも、壁の耳目の、愚な事、アレ次の室に、侍女共も、數多あるなりよし、あき濡衣着なら、互ひの、恥辱の如何ならん、疾々此を去れよと、又振拂ふ、手先を捕へ、アラ情なき、心かな、仮令此身と添臥すると、も誰濡衣の名を立んば、や見忘れしか、耶輸陀羅女、ヨ我妻よと引留られ、蕪く胸を押さづめて、情々見れば、這の、開も何とせん、此戯れ男の、異人あらず、即ち、悉達太子にて、其御容の、其昔宮に在

せし時又違はず御髻りも艶々として衣服迎も尚ほ以前に眼馴たる錦の袖にして何處に一點の違ひもなければ又も駭く胸の内ノ若君かど今已に言んどせしが氣を取締て須臾猶豫氣色を替つ、側に有合花桶の一枝取て身を構へわら口惜や腹立しや女子一人の夜の住居を侮りて入りし曲者の妾が發心を障碍する者か但し此所に年を経し狐狸の戯か何よもせよ我警戒の一枝を受て見よと無二無三に打懸る花の小枝を鉄杖と思ひし念力の烈きにも彼方の少しも駭かずアラ曲もなき其形勢哉先よく心の浪風を鎮めて篤と聞給へ如何にも夜更て卒事に來れば其疑ひの道理なれども中々に魔性なる者あらず密に此へ音信來るの最前阿難より傳へ聞くに實も尤もなる其方の怨言唇に再度見へん計りに生取晒して辛苦を重ね漸くにして羅喉羅を育て尙ほも其願ひの届ぬに恨むも道理あれ磨迎も再度會んと約したる其詞を採て忘る可き予左の然ながら今我凡人にあらざれば已に最愛の絆を切しが其方が阿難に告たる如く我れ王宮を逃るゝとき科を其方身に引受て呉れしゆへ今有難き身ともなり大誓願を遂ながら今其人の願ひをも聞ずば是其恩を知らぬに似たり夫を憂く思ふが故密に逢て越方の心盡しを謝せん爲に來りし者を斯く酷らしき其形狀の何事ぞ疾く我心を

落居さへて物語して娛まずやと笑眉造りて云ふを聞き耶輸陀羅女の胸の内此我君なりと九分九厘の思へども聊か合點の往ぬ所もあれば如何にせんと途つ追つの思案に困じて須臾猶豫居たりしが不圖想ひ附事のあれに忽ち氣色を和けて太子の御手を押戴きわら勿体なし免させ給へ君どの知らして粗忽の舉動なり扱ひ今より自らを陸み惠ませ給ふとあらば須臾も措て優陀夷夫婦に其旨を仰せ聞られて是より直襟宮中へ同じ車に侍かせ召連給へと膝摺寄てわりなく語らひ給ふを見てわら鬱なや夫が適ひ斯く迄忍びて來りいせまじき予數多の徒弟の面目を偷みて契らん爲の心盡しを察し給へと言つ、傍の燈火を吹消て抱き寄るを身を替し利腕襖と打拂ひてアラ心得ず最前より密に賺し試みしに想ふ違ひぬ紛れ者妾が心を亂さん爲能も謀りし淺量さ我君のはや六座の羈を切て牟尼如來と成せられしに最愛の色香に引れ給はんや妾も最前已に身を改めては淫樂の道を斷り女にして女に非ず斯る堅固の者ども知らずして如來の容を仮初にも色欲を以て誑す什麼や汝の如何なる者ぞ疾く本性を現せかしノ誰をも茲へ出會て怪敷者を捕押へよと云ふ聲侶俱一先に雲洞携へて馳來るの異人ならず阿難なり後に繼ぎて侍女等も先を争ひて出來ればあら奇異や今迄の如

來と見へし若男の忽ち又容の變りて最遅しき沙門となり詞を正していふやうアラ尊き善女人哉其心根を見貫上の如來の方便を傳へ聞せん开も某し目蓮とて御弟子の内の一なるが今回其方の阿難に論されて最愛の絆を斷如來に謁し度旨あれども終て女の物事に感ずるも速なれど又翻るにも速なれば眞に發心遂たるや但し一旦の出來心かど如來の太く案事給ひ我神通を得たるを以て此一儀を試し見よと命ぜられて斯く爲つるに實に早此世の五欲又離れ煩惱を斷ちて菩提に入り如來を戀慕渴仰する本心の茲に明かなれば今疑ふ所なしいて如來より下し置く、法名を渡し侍ると述る片邊に阿難の進みて其扱ひを予爲てければ耶輸陀羅女の其謂れを聞きて目蓮の大神通に打駭き且吾と我心の操の亂れざりしを深く悦び扱渡されし法名を押戴きて披き見れば善哉、比丘妙惠とありければ悦ぶ事限りなし目蓮の重ねて又云ふやう如何に妙惠比丘能く聞かれ今より後の此御山の麓の内に精々なる庵室を作らすれば此に住居て尙ほ堅固に大精進を致さる可し程もなく御母君の御法も濟べ御直に御說法も有可き由我等に仰せ含めらる先庵室の調ふ迄の茲に住居て在す可しと傳へて阿難侶俱に其座を立て罷出けり去程に目蓮の阿難に羅喉羅を預け置て法堂に入り耶

輸陀羅女の潔き堅固の發心を見届けて即ち彼の法名を授けし事を詳細述べ如來の此上なる歡び給ひて既に四月一日より天上の御法初りて七日に滿ずる其拂曉天文に向つて咒文を唱へ給ひて摩迦薩如意を以て虚空を指招ぎ給へば不思議に五色の雲霧き降りて其上に鬘結たる天童子等が並び立て八葉の蓮華座を昇降りて世尊を初め奉り御弟子等迄も各位蓮華座に移らしめ又天上へ上る光景は是唯世尊廣大の法力一つに依る事にて不思議と云も慥なり斯て各自居並びたる蓮座の前後左右より五十二菩薩其外の天神諸佛も居擁し奉る其尊さを御弟子達の唯夢の如くに覺へて身の尙ほ法堂に在と思ふ内に何時か初利天近くへ上る程に頻りに名香四方に薫じて虚空遙に聞へぬる音樂の調べも他に異なれば御弟子達の皆愕然として今更駭く計りなり時に舍利弗の世尊を拜しつゝ我木師の御立願眼前空しからず是こそ夫の初利天にて御座あるやと尋ねやせば如來の莞爾と笑せ給ひて如何にも、アレ那處なる金色の雲の間に光り輝く東の臺の善現殿と額を打ち又西の臺の喜見城南の臺の覺益臺と云ふなり早障りなく此まで來れば各位いよいよ信心を増して我本願を達す可し皆心得よと示し給へば目蓮謹み如來に向ひ开の仰せ迄もあし斯る尊き形勢に誰か渴仰せざる可き扱如

来り此よりして何れの臺に上らせ給ふ开を承給り度いどやせば如來の打點頭然に我此よりして赴く所の南殿なり皆々此儀を心得よと仰せの下に目蓮尊者の神通一の身も輕く彼の蓮華座をやをら下りて瞬く間に南殿の御端近く進み寄り敬ひ乍ら大音にて三界の教主釋迦牟尼世尊觀念醍醐に神沛以て此迄天上致されたり即ち此殿に進み參れば急ぎ扉を明られよと呼り音なふ聲よつれて東の臺の扉開けて頻りに音樂を催ふしつゝ、數多の天女天童子等を左右後へに隨ひしめ辱けなくも天の帝釋の玉の冠を戴きて自ら出現まじくつゝ、如來を敬ひ給ひければ世尊も亦天帝を厚く敬ひ禮を返して我今此忉利天に遙々上り來る事には三つの專用有が故なり先第一にの五十六億七千萬歳の曠に彌勒出世の其砌り世界に所有衆生を濟度せん今其血脈を授けん爲なり又二つにの月藏經を附屬せんが爲三つにの今喜見城に在します御后妃の其先の身の疑ひもなき我大恩の母なる故報恩の說法を奉らん爲なりと宣ひするを篤と聞て天帝の尙ほ敬ひて是や實天上の幸福此上やあらじ迎直ちに南殿の簾の内に如來を初めお弟子達を誘ひつゝ座を設け扱近臣へ云々と事の次第を語り給へば是を聞たる近臣の内に深く之れを怪む者ありて密に天帝へ告るやう如何も今天下に三世俱

通の如來現れて一切衆生を濟度する由なるが今上天致せし其如來よりあるまじく這り正しく羅喉阿修羅ならん先年此方へ召上されし舍締夫人を奪ひ取返らん迎の謀事にて斯く打拵しにあらざるや彼の阿修羅杯の斯る事に賢ければ失策のわらじ其を強ちに實の如來と思しての惡かりなん能々物を考へ見るに如何又教主の佛なり迎开が先つ世の母杯の天上に在を知らる可きや這の油斷する所に非ず急ぎ六所の陣に觸て龍神夜叉を招かれて警護させずば適ふまじ但し其舍締を返さるゝ二つに一つ急速の御思案あつて然る可しと諭しやせば天帝も如何様夫も道理なりと須臾意に當惑せしが暫わつて渠も向ひ汝ちが諫言至極せり侮り難き渠等が神通斯く不意に我住る喜見城へ來る程なれば縱へ六所の陣を招きて其禦をさす迎も事露れての適ふまじ過つる頃の戦ひに天の敗北の皆知る所左すれば此の先靜に密なる謀計を以て如來の虚實を試して見ん其手段の云々して數多の天の童らに宜劍を隠し持せて渠が前後左右を護らせ相圖に依つて欺し討するに如何と私語給へば彼の近臣の悦び感じて是絶妙の謀事なり疾く其手段を調へ給へと勸めて爾予計ひける然る天帝の思案を凝して舍締夫人を呼出し云々と心得させて其姿を取飾らせ數多の乙女を附隨させて如來の前

へ進せければ舍締の如來を見るよりもあら久しや豫て番へたる詞を違へず足らぬ身を向  
 へさせ給ふ有難き雪山の悲みも今の嬉しき天上の榮華帝より御免われ直ちに妻に連て給  
 又もや御意の替らぬ内と最馴々數詞を聞き如來も先に見知たる阿修羅の女て有者から先差  
 當る迷惑さ譬へ方なき其處へ天帝の簾の内より出立て如來此夫人を先つ世の母と云しが實  
 の御身が妻ならん妻ならん明白に妻と云れて召連られよと見相變て云ふ内にも若し妻と言  
 ば即座に欺し討と豫ての手筈をしてければ自らも劍の鯉口くつろげ給へど此方の騒ぐ氣色  
 もなく這の思ひも依らざる事哉此乙女の我索る由縁の者に非ずうと答へ給ふ天帝の  
 案に相違の胸の内左の言れお今那方にて立聞せしに其昔如來も因ある乙女の詞なり然るこ  
 ろ此なる女子の元羅喉阿修羅の婦妻に定りて已も嫁す可き時に至り我無爲の正覺を成就せ  
 んどて雪山にて座禪せし其傍りへ密に來て我を懸想するが故に程能宥め示せし事あり其時  
 聊も見知し者うら先の如くに云しならん我何を以て他の妻を奪ふ可き云れやある我見へ度  
 の切利天の西の臺に在すなる后妃に侍るなり急ぎ其方に會せ給はれ是專用の第一なりと宣  
 へすれば不審の体にて如何にも西の臺の其内に一人の乙女在と雖も渠が年未だ若くて其

方の母との思はれず然る訝き事にての輒く渠も會されず万一體な證も有べ夫を見てこ  
 ろ免と可けれど云ふ詞未だ終らず如來の莞爾と打笑給ひ然る其證なきに非ず开も我の摩  
 迦陀國なる淨飯王の太子と生れて七日過て母摩耶夫人逝去の由を知るよりも頻りに戀しく  
 侍るに予何卒成道正覺を遂て再度亡母に見へて報恩致し度又二つに一切衆生の凡苦を  
 救ひ得させ度發心報謝の難き道を辛くも勤めて今のはや三世俱通の神通を得たり扱眼前の  
 證と云ふ即ち母の胎内も我飲殘せし乳汁の有べ之を以て紛れなき親子の契りを悟り給へ  
 と詳りに明し給へ天帝の漸くに心を落附然る其證を見ん人々心安りれと邊りへ示すを  
 聞よりも舍締夫人の如來も進み寄て這の聞させぬ今更に年頃慕ふ妾を袖に爲給ふ謂やわ  
 るあの雪山よて見へし時仮令阿修羅の屬も居るとも我正覺を成たる上の妻にも爲して得さ  
 せんと番給ひし詞を悞にころ侍りしうお情なしと打歎きて怨すれば如來の微笑て愚な  
 事を言るゝ予や我正覺を遂たる上の其方の懺世界の女子の皆我妻とも子共思へば最心安り  
 れかならず抱き臥する計りを妻との言す信の心を戀慕して我を男と定めなば比翼連理も他  
 所ならず一佛乘に睦む可し懺悔滅罪くど如意にて濟度なし給へば流石の舍締夫人も感涙



に咽て頭を垂て居たりける扱又悼しきの西の臺に垂籠給ふ一人の後妃の天よ二つの月な  
 けれども阿修羅の女が天上してより夜の光りを渠よ奪われ身晦日の暗なれども前世賢き  
 因われ聊う嫉妬の念も起さず一人を懐み居給ひしに頃日頻りに胸張強く乳脹れて殊なふ  
 惱みて徒然として氣鬱に絶ず果敢なく暮し居給ふ所へ久敷音信なりける天帝不意に來ら  
 せ給へば是れと計りに駭けり「西の後の天帝の來らせ給ふを見も敢ず今日如何なる風の  
 吹てり此方へ渡らせ給ひし予自らの此程胸元苦しく病者くら取亂し居る恥しさと云つ、梅  
 を下り給へば天帝の片邊に坐して替此日頃御身の元へ音信る事の等閑されば無うと疎て  
 在べきよ其氣色さへ見せられぬや醫の一入面なき予や扱今不意に音信し異なる事を問ん  
 爲あり开も其仔細の外ならず若しや其方の懷妊ならて乳の出る覺へのなき有りありと明  
 白に告示されよと聞へ給へば后の顔を赤らめて這の不思議なるお尋かな是迄人への包みし  
 うと然る仰せのあるうらに早包みても甲斐なき事なり如何にも日外より妾の乳の張強き  
 が故に胸の苦み堪ざりしが不思議や昨夜妾の病氣の明日はや快きと夢見しう如何なる事う  
 と覺ての後最悦び侍りしと語り給へば天帝の俄然に后を敬ひてあら勿体なしおほけなや抑

御身の前世の是摩迦陀國の主なる淨飯王の妻なりし摩耶夫人にて今日に天上天下に唯一人  
 の釋迦如來の母なりと予醫も始めの疑ひしが其如來の今上天して御身の胎内に飲殘せし乳  
 汁の有を證として親子の名乗有んとなり先や對面せらる可しと勸め給へば深く駭き开の例  
 しなき事ながら實に然る事の侍るにや右も左も自ら容易見ゆる心の先慥なる證を見  
 て後又對面致すべき御計ひ下されうしと流石女の懐み深き思ひ慮りを天帝深くも感じ給ひ  
 て开の尤もなる氣遣ひあり然る一室の簾の内にて我物語るを聞給へとて夫より直に西の臺  
 へ如來を初め徒弟等に移らせ座を定め扱天帝の如來に向ひて尊き御身の示し事を疑ふに  
 わらざれど何卒御身と我后妃と親子に紛れなしと云ふ慥な證據を見せ下されと宣へば打點  
 頭て實に道理なりお主等の皆天樂に世を送れども亦五衰と云ふ事のあれば疑心の發るも凡  
 夫に等く惡き念もあるべき故今目前に其證を見せん开も親となり子となる縁を譬へて言  
 須彌山の絶頂より大海の底に沈たる針の穴へ糸を通すよりも尙ほ難しと辨へられよ斯るい  
 みじき親子の因を結ぶと云ふ如何程の深き縁ぞと心得て親を敬ひ子を憐れみ互ひ睦み睦  
 みるゝを親子の道と云ふよこそ我等も之を重んずれば今再生の母に見へて過去の報恩を致

し度今目前よまづ其證と云ふ西の臺の御階の元ある庭の砂に盡く作佛の二字が備りあらん心を留て御覽せよと言れて天帝の訝り乍ら近臣に仰せて試し見るも實に此なる庭の砂に皆件の文字の現れたれば天帝の駭き且感じて彌如来を尊びつゝ扱其來由を尋ね給へば遣り過し時雪山にて毘羅梵志と阿修羅との座隠の石を一目偷て梵志の勝に爲したるも我因位に八千度娑婆へ現れて作佛せし其功德に依りてなり先初阿僧祇の間に七万五千佛の出家に逢ひ第二阿僧祇の間に七万六千佛に遇又第三阿僧祇の間に七万七千佛に會り合せて三祇九十一劫なり此間の難行苦行の譬ふ可き物逆もなく皮を剥て紙と爲し骨を削りて筆と爲しつゝ唯一心に道を求めて善惠菩薩と云たる時兜率天の内院に上り又性善白と名乗作佛の時至り天降りて御母の胎に宿れり此時天の諸神等の菩薩今回成佛に天降れば我々も其説法を聞ま欲とて諸國の王臣婆羅門長者居士等の家々に天降りて夫々の女の胎内に生したり夫より我の即ち今の我にして難き勤めを辛くも遂て三世俱通の身と成ぬ先や其籠の内なる厚恩渥き前世の母君よ其儘にて乳を絞り給へ茲にて拜味仕らんと彼の鉄鉢を差延給へばわら奇なる哉籠の内よりの蜜の糸を引が如くに乳汁の發りてさらさら〜と鉄鉢の内

に溜りければ三度拜して押戴き飲せ給ふ形狀に天帝初め其座の者共の感に絶たる其折しも籠搔上て件の后妃の如來の前へ踰限出て御衣に取纏りてわら難有や尊やな親子の一世と聞つるに前世の因尙ほ尽す親子の名乗致す事天に地にも又有じ然ども是迄知ぬ身の罪障重かるべし來世を救ひ給ひれよと泣つ口説つ宣へば天帝も亦低頭して何卒尊き御法を説給ひて天の眷属を洩す事なく濟度あれと予願ひける「開の先備措きて提婆達多の阿闍世太子を遣はして維沙那國にて如來を初め附添者を盡しよ仕留んと企てたりける謀計も不思議の妨げ已ありて事整の暇分疎なくして阿闍世太子の其儘に勢を引て直ちに迦毘羅城を賣取んと我慢を以て言募れば提婆も其勇氣の程を悦び乍らも是迄に種々手を替品を替て迦毘羅城を攻んどせしかど毎度取のみを取て味方の謀事の裏を謀るに此れ彼處の舊臣なる優陀夷めが爲す所なり夫ゆへ渠を亡へんと種々工夫をしてけれど才智と云ひ又不思議なる渠が佩帶劍の奇特の世に稀なる業物なれば等閑なる戦ひして却て身の禍ひを索めて難儀に及ぶ可し夫に附我先つ頃より熟々考へ置し事のあり貴殿夫を能く守りて事を爲す千に一つの手違ひも有まじきが何と夫を引受て行のさやと談ずれば阿闍世太子の聞敢ず開の如何

なる事なりとも斯く成長の思われ何迎辞む事あらん先其手段を示されよ我よく守り行ふ可しと誠心願して承諾す扱々能も言れたり其手段の外もあらして開も貴殿の古郷なる王舎城の頻婆娑羅王の迦毘羅城と同國にて其勢ひも亦迦毘羅城に立並ぶと云ふ聞へあり臣家に者婆月光の二人ありて其名天下に隠れなく是又迦毘羅城なる優陀夷光明の二人に劣らず故に何卒して貴殿の父頻婆娑羅殿を我味方に附る時、豈迦毘羅城を恐れんや打平ぐるの掌を返すよりも最易し是に依りて一度貴殿の本國に立歸りて云々の謀事にて竟に迦毘羅城を攻取り二人榮華を極めなば又樂しからずやと詞巧に論されて阿闍世太子の何の思案も亦く尤も爾なり心得侍りと受引ば提婆の悦びて俄然に酒肴を調へ取並べて首途を賈し又許多の珍物を臺に積て飾を附させ夫を國への土産に與へて腹臣の者一人を差添三百余人の同勢を随ひしめて警護の諸道具何具と心を配り方立派に打扮すれば阿闍世太子の殊に其手當の厚きを深く悦びつゝ暇乞して潔く急ぎ發足を予爲たりける去程に阿闍世太子の古郷に錦を飾り日を重ねて王舎城も已に間近く返りければ供司の者一人先立て馬を走らせ城門の傍りに到り供を留めて下馬すれば見張の番人の出來りて其姓名を尋るに予維沙那國

よりの使なりと答ゆれば心得て其者を直ちに案内しつゝ玄關に伴ひ行云々と通ずる程に取次の役人立出て一室に通し對面して其仔細を問ふ儘に渠の提婆の教し如くに詞を違へず阿闍世太子の事を一部始終告示すに取次の者の殆ど駭き先取敢ず夫々へ通じければ程もなく頻婆娑羅王を初め韋提希夫人へも聞へて一度の太く驚き又殊なふ悦び給ひて皆一同夢の如しと立騒つゝ其使を先奥の一室へ進せ頼て頻婆娑羅王對面ありて自ら使者の口上を聞扱年來の御養育殊に歸國のお手當まで残る方なく満足せり先暫時休息あれど勞ひつゝ奥へ入りて急ぎ者婆と月光の二人を呼出し給ふに何思ひけん者婆の到らずして月光一人御前へ出れば頻婆娑羅王の笑氣に如何に月光不思議の事あり過し年波牟天亞にて不圖失たる折指の豫て提婆の元に助り居て彼處にて成人已に唯今多勢を差添て遙々送り來りし由思ひ圖らざる我使侍にのわらざるやと語り給へば月光の殆ど呆れし面色にて開の怪しかる御事なり其送り越されし之餘も折指様にて侍るまじ君にも聞召つらん提婆達多の名にあらう法性妙顯を師と爲して所有外道の法を行ひ其業を以て人の眼を眩す杯に至つての達人どころ承給る開を疎に思されての悪かりなんと諫れば頻婆娑羅王眉を瞋らせ縦ひ提婆が邪法を以て

眼を眩す業をするとも他人を以て我太子に作り替の成可きや爲て又汝ぢの折指にて有まじきと云ふ其由を何如にして辨へし乎然バこそ其事なれ方に一つ折指様御壯健にて在するならバ坏て其頃送らざりけん永の年月秘し置て前麻に其報知も得せずして斯く突然に送り越す事ころ輕卒至極にて不審の第一なり是某しが最疑ひ思ふ所なり然のわれども若しや又實の折指様あらバ極めて深き様子ありて帝の禍ひの端どやあらん這の御分別肝要なりと恐れ氣もなく聞へ上れば汝ぢの常々に石の橋を叩きて渡る心あれバ定めて折指が生れ立の不思議なりしを案事てならんが開は愚痴の至りなり此年頃他人の手にて異儀もなく人と成たる者が今奚ぞ父の身に害ある謂れやあらん我已に老の坂も上り詰たれと一子なく朝夕歎き悲むを天の恤に與れバころ失たる者が索めざるに自然と我に返れるの國土の榮にあらざるや斯る便宜を聞からの阿私陀仙人の示せし詞ばも當にのならぬと思もへかし今維沙那國より數多の費を厭はずして送り越たる誠心を憐みて受ぬ謂れやある若し又賈の者あらバ其時又詰問せよ先疾く人數を調へて急ぎ迎の者を出す可しと仰すれども月光は唯平伏て有無の答へも爲ざる所へ韋提希夫人の走り出月光の側へ礎と座して其方の何の遺恨ありてか我

子を見棄侍るにや不思議の便宜の此方の身に優厚華よりも尙ほ嬉しく思ふなるに斯く情なき事をも云ふ其方の諫言のばや存分なり一日聞へ上たれば万一粗忽の事あるとも其方の越度になりはせずお年召れし我君の詔りを違背せず急ぎ其川意をしや是自らが頼みなり何卒くど歎き給へバ今月の月光も詮方投首して仰せ拜承侍りしと僅に答へて力なく其場を退き出よける之ぞ此御二方の身の禍ひの初めなりとの後に予思ひ當りける然バ月光の詮方なくして用意を夫々へ達せしかば俄然に太子出迎ひの人數を調へて使番の者の遠敷其道筋へ赴きける斯りし程に輿表の俄然に上を下へと立騒ぎぬる其中に唯一人當惑せし其蓉と云る女中なり此者の過し年波牟天亞の狩倉先にて重役の人々の中附どの云乍ら太子を非業に失ひたる其當人にて有者から今失給ひし夫の太子の歸洛あると聞よりも這の何とせんとて生たる心地も更になく途つ追つの悲みを見るに忍びぬ朋輩共の打寄種々に賺し宥めて余もや實の若君が御歸洛ある可き筈のなし方一助り居給ひ其頃直様維沙那國より仮令お返りなき迄もお知らせなくして適のぬ筈なり然るを年ごろ聊かも其噂さへ之れ無き者が争か實て有べきやと是非を争ひ居る所へ一人の女中走り來りて御出迎のお使番より唯今還らせ給

ひしの實の太子なる由の御注進にお二方の天を拜し地を拜して起つ座とつ御歡び宛然御  
 狂氣なされし如くなりと云を芙蓉の閑敢ず夫見やさんせ皆さん達世より不思議のなしと言  
 れず實の若君のお返りあらば何迎お目見なる可きを過越方の兎も角も斯く恙無く返らせら  
 れてハ帝様の勿論お后様とて争此身を其儘に措給のんや人手に懸りて責苦を見んより自ら  
 死ねハ潔よし止さんすなど云張を尙ほも一人の女中が押止仮令實の若様なりとて以前なし  
 たる僻事を其方の科とい言れまじつゝむる所にお上の爲に重役達のお頼みれば少しも氣遣  
 ひ致されなど宥めつ論しつ爲る折柄老女ハ急しく出來りて漸くに押止自ら伴ひ行て部屋へ  
 籠らせ置たりける程なく太子ハ御着ありて御二方を初めとし諸臣等に見へ給へハ上より下  
 迄一同御運強き若君かなと詞を揃へて慶賀を述其御祝ひの事杯も最華麗にものせらるる情  
 提婆方よりハ許多の聘物を贈りて以來ハ親族の因を結び音信贈答絶ず致して未永く親む可  
 き杯使者の口上を述べられ頻婆娑羅王ハ何が扱世になきと思し愛子を助られたる大恩われ  
 ハ幾万歳の限りもなく親族の睦を爲ん事此より頼む所なり逆多くの品々を取揃へ答禮とし  
 て贈られつゝ使者ハ勿論供廻りの仲間小者に至る迄夫々に給物ありて懇切に勞ひて馳走さ

し頓て本國へ戻られける去程に頻婆娑羅王韋提希夫人ハ折指太子の健に人と成り又最愛々  
 しく名をも阿闍世と改めたる由を聞き召て彌々歡び給ひ提婆を殊なふ尊ぶハ附屬に此太子  
 をなくしてより頼み無き世を哀みけるに此程迦毘羅城の悉達太子正覺を得て大勢の羅漢を  
 引連歸洛して夕陽山ハ留給ひ其御修行ある説法の摩迦陀國に廣て俄然に人々の歸依する故  
 王舎城へも羅漢達の度々托鉢に來るを招きて菩提の道を聞き布施物を施して信心する故全  
 く其功德にて斯る悦び有し杯と阿闍世にも語り聞せ尙ほ信心を勤められければ阿闍世太子  
 ハ吠と打驚き其如來ころ我等が仇と言んどせしが兩親の信心爲給ひて殊に又其功德の効驗  
 を聞て頓に心を翻へし密又思ひ旋すやう我提婆にハ思われども亦如來にも何の恨みハ無し  
 是迄仇と思ひし者の提婆の味方に附ゆるなり斯れば此後如何にもして提婆に助られたる其  
 恩を別に報ひて我兩親の信心ある如來を亡す企てハ止る可しと不圖も俄然又我と我身に善  
 心の發しけるハ如何なる故にか不思議なり扱又提婆の方よてハ過し日阿闍世を送らせし使  
 番の戻りて頻婆娑羅王の返事を述斯く答禮に許多の品々を贈られて是より永く親族の好を  
 結ばんと堅く約し其身ハ固より供人等迄も賜物厚く何異と恵を受て戻りし由を事細かに聞

へ上れば提婆の思はず手を拍て謀計圖に當れりと歡ぶ事限りなし然る上の近き日によき便宜のある可しと勇て使を待ける又日を経れ共その沙汰なれば短慮の提婆の堪へ兼て然此方より使を遣りして其様子を伺いせんと先其人を撰ぶ所に其口不圖王舎城より使者來れりと通じければ提婆の扱ころど悦びて直様與に招き入れ對面せしに件の使者の携へ來りし聘物を敬しく捧出し取並べて述るやう先以て尊君御健勝の儀何より以て大慶至極千秋万龜と賀し奉つる扱過る年我太子不慮の危難又掛りし時助給ひる耳ならず永き間の御養育其上歸國の御手當迄厚なごしめられたる事管ん方なき御恩の程國王初め家臣一同辱けなく存じ奉つる是に依て些少なれども國製の品々目録の通り外に又一万金贈り越されてはなり這の聊か御養育の報ひ迄に以得ば宜敷御受納下さる可きやう偏に願ひ上る由披露なすを熟々聞て欲に眼のなき提婆の歡び其目録を披き見て這の皆何れも尊き品々殊に又大金を惠まれ満足至極なり然ながら御配意過て親族の因ある中何とやら他人を間敷思ひるれど切角のお志しなれば受進らすると答へければ使者の其儘に退かんと爲るを見て提婆の不審の面色しつ否御使暫時く此外に未だ阿闍世殿より御口上か但し又書簡にても無かりしかイエ

何も此外に言聞られし事もなく御呈書とてもいはず夫の合點の往ぬ事なり其元の本國を急に出立致して何か取遣せし物のなきか又の忘却致したる緊要の事之なきや能々考へ見らる可しと言論されて使者の侍不審の思ひ乍ら暫時兎や角打案じ某の何も取遣し又失念の事之なきと最憚なる再度の答へに提婆の胸の目算狂ひけれども又現にも云れぬ事ゆゑ夫とかく裏問ふやう否何もなく夫にてよし扱阿闍世殿の國元へ還られてより後の何を所爲にせらるゝや然れば我國王の太子を失ひけるよりして唯老の身の頼みなき世とて只管悲みけるに頃日我同國なる迦毘羅城の悉達太子成道を得て歸洛の後數多の徒弟と侶俱に夕陽山にて御修行ある説法歸依の折柄なれば太子も父の意見に隨ひ俱に信仰せらるゝなりと聞も終らず賭と憤りて提婆の眼を腫出しヤア何と云ふ阿闍世の疾くも我等の厚恩を忘れて如來の佛法を父と侶俱に信ずるとや如何にも左様ありアラ口惜や何とせん頼み難き人心哉我金銀財寶が欲くて彼奴めを助のせず一つの頼みの有べころ此を發足し暇乞をする時迄も命の親と敬ひしよ返るや否や變約して事ころ依れ我仇なる如來を信する無得心半腹男の曲者よ此聘物の助られたる報ひと雖も財寶よて人の命か買るゝか若し買るゝならば我も亦万

金を以て購ひ求めて命を二つ持ちたし然る思ひしき事聞て此品々も中々に見るさへ眼の  
 穢れなりと云つゝ其儘立上りて邊りに美々敷飾りたる進物を威投出し掻遣捨て果の使の士  
 の襟髪掴んで捻倒し已に殺しも爲す可き處へ法性妙顯の走り出アラ短慮なり粗忽なり此儀  
 の我に任せ給へと言つゝ止めて使者を勞り主人提婆の性質にて奇なる病の不時に發れば  
 今の慮外の偏に免されて御歸國の上の帝を初め諸大臣へも宜敷様御執成を頼み入ると懇切  
 に詫て賜物杯に心を附て使者に贈り且珍味を以て渥く待遇頓て國元へ返したる是の心の  
 善か悪か開の此次編の卷の初めを讀て詳細筋を知り給へ

釋迦八相倭文庫三十七編終

釋迦八相倭文庫二十八編

法性妙顯の提婆の憤怒を抑制めて王舍城の使者を饗應漸くよして返しつゝ提婆の前へ進み  
 出わら愚なり嗜されよと言せも果す急上す提婆の眉を逆立てヤア愚どの何故ぞ是迄巧みし  
 事も適はず阿闍世をよめく返し遣し無念と切の御身も半腹よて今阿闍世の方を持よ  
 や持べ持れよ兎も角も貴殿の貴殿我の又我の才覺あり噫頼み甲斐無き人心なりといと憤  
 れる色を見て妙顯の冷笑如何様尙未も年が若し其御心よて如何おして佛の敵對なる可き  
 ぞ大功の細理を顧みずと云ふ俚諺を御存じ無きか笑止千万なり我先王舍城の使者を饗應  
 返したるは是莫大の謀計あり先其手筈を詳かふ語りやさん氣を鎮めて先よく仔細を問給へ  
 今早如來の身あり諸天の神達擁護して守護せらるれば中々針を立べき所も無き堅固の  
 身と成たれば腕力の思ひも依らず唯謀事お依る可き已其謀計の種とす彼の阿闍世の外  
 よなし今其者を失ひ何を以て便りよせん能々思案召れよとされて提婆の頭を搔如何おも  
 夫の然る事乍ら渠お心を翻へされての否夫の苦よならず元の心お戻す手術の瞬く間も幾等  
 もありぬ然らば我れ奚ぞ心を痛めん然どの知らて粗忽の一言必ず心お懸られな何夫等のと

い少しも氣入の懸ねども何ぞれ彼ぞれ短氣よての事ならず之れを心得て以後を慎み給へか  
 し御身の萬事お賢けれども人の尊敬薄きが疵あり其証よの御身の相こそ三十一の備のれど  
 も一相の欠る所あり若し其身体度よ適ひ三十二相備のらば諸人の敬ひも夥しく隨ひて方の  
 望の心の儘なり然らば其欠たる所の第一の白毫相ふて面を照す相よ侍りぬ是さへ有らば御身の  
 直様如來の容よ打扮ても誰ありて見分る者も無し其白毫よ似寄の物よて照させ度思ふが故  
 一つの寶珠を調へ置たり即ち御身よ差上れば是を額よ押當て面を照さば諸人の尊敬を受ける  
 已り速よ變身して王舍城へ赴れ釋迦如來と拜れ給ひ謀計を旋らさば阿闍世の勿論頻婆娑羅  
 王も御意を背く事の余も有じとて玉を渡して勸れらば提婆の又忽ち面色を替其の忌の敷事よ  
 こそ仮初も如來と成て拜れては是佛なり笑ぞ今更仇とする佛を真似て世を取んや此寶珠  
 の寶ふても諸人も尊敬を受けるのみよ止り佛を真似る事杯の再度聞も耳の汚れど我慢の詞も  
 一理われれば開も御尤もの仰せなり然らば某し今よりして變身なし王舍城へ到りて阿闍世の  
 心を翻へせば御心安く待給へど其場て直様忽然として天女の姿お變じつゝ虚空をさしてぞ  
 上りける扱も提婆の彼の玉の手よ入りしを大よ悦び先其徳を試みん迎近臣の者女中達を我

眼の前よ据らせ置て件の玉を取出し額よ附て儲いふやう我容の已ふ三十二相調へば寔よ尊  
 く見ゆ可きぞとて手を放て玉の轉びて更らふ額お附事無く幾度附るも手を放せば轉び落  
 るおぞ並居る者共の眼を見合せて笑ふも悪しと堪ゆれども堪へ兼たる可笑さを咳お紛らし  
 て起もわり中よも近臣の詔ひて君のお容の不思議おも一段尊く拜るゝと空額着をするもあ  
 りぬ是妙顯が深き智恵よて提婆が憤りを宥る迄よ玉を與へて氣を休めし謀計ぞぞ思ひけれ  
 る扱又彼の阿闍世太子の本國よ立戻りて不圖惡心を改めて父母の歸依しぬる如來の法を信  
 じければ頻婆娑羅王御夫婦も悦び給ひて然る上り早速よ家督を讓る儀式を調へて國中へ披  
 露せん是よ附ても宜姫を迎ひ取て娶いせなば開の悦びの限りなり迎月光お命ぜらるれど渠  
 の能くも未前を察して彼の太子の宿ならぬ事を能くも見極る者からお兎お角我心腹よ落人  
 ぬべ唯遷延お扱ひ置しが太子も疾く世を繼て大國の主と成らば其樂み如何ならんと待よ待る  
 る一丸寐の淋しき枕を嘆ちけるよ或夜密に枕上よ琴を弾る音のすれは不圖眼を覺して是を  
 見るよ宮中お見馴ぬ一人の美人が一心お琴を弾べつ謠ひつする謠の文句の聞も傲りざる皆  
 是雲井の琴のみなれば遣り正しく天女ならめと夜の物を搔やり捨深夜の臥戸よ前後分ず粗



忽の舉動免し召よ察するも御身の若し天津乙女は侍らずや我斯く一人寐の夢を慰むる其謂れを聞き欲しと尋れれば件の乙女の婿も漸やく琴のしらべを留めつゝ如何も御身が詞も違はず妾の開も帝釋天の歌舞の菩薩も侍るあり左こそ在さめ然る又尊き御身が何故此へ天降りましませしぞ然ればとよ妾の天の帝釋の詔りを受侍りて御身を慰め参りたり開の何故とならば帝釋天の御身の徳を深く尊び給ひて斯の形勢なり御身は是世も冥加なる御方なり夢々疑ひ給ふなど告るを聞て太子の駭きあら尊とや天帝の詔りとあるから何卒永く此お止りて我妻と成給へらば天上の榮華も及ばずとも一國の御璽と敬われ衣食住も不足のあらじ偏も受引給へらと云べ乙女の微笑て開の辱け無く思ふなれと御身の父の何を以て世を其方と禪の可きや世を受繼ぬ太子は是日陰者迎誰一人之れを敬ふ者の有可きぞ其妻の尙ほ更にお炊女杯と等しかる可し世も日陰の身の妻を指て御璽と云ふ事未だ聞ずと云ふ阿闍世の不審氣もあら思なる事をぞ聞く我今世を繼て御璽に入る其用意半なるもと云ふ乙女は打消てイエ〜開の皆父君の偽りなり聊か御身も世を譲る心無き其證を潜かよ告侍らん開も御身の母君の胎内もある内も弑せんと思して父君の種々の毒藥を用ひられしが御

身の徳の天迄も通じてありければ僕伴も其毒も當らずして竟も臨月も及びしかば余儀無く出産の手當のあれども是唯母君の身の上も恙おらせじとの設けなれば高樓の遙下も夥敷劍を植させて其中へ産落し給へども今云ふ如くの高運なれば芽花の如き劍の穂先を打揃へし其中の聊かなる間へ能くも落給ひて危ふき命を助りしは是天上の針の目途へ龍宮より糸を投て貫すよりも最かたき事なり其証しより御身の手の左りの子指の生れし時植たる劍も切落ぬは何よりの證なり我身何の故を以て左計り親不和の家も妹脊の縁を結ばんや扱又頃日摩迦陀國の太子の諸人如來と仰がれ天も上りて故摩耶夫人の再來も見へつゝ報恩の御法を説るれども固より天の帝釋の左已も是を敬ひ給はず其仔細は今下界も提婆達多と云ふ者あり是こそ聰明英智として頼て天下を一統すべき吉瑞ある者なれば迎深くも信じ給へばなり御身も其提婆又の遁れぬ因われこそ天帝も亦敬ひ給ひぬ左無く争う穢れし此下界へ妾を降し給へん事中々以て思ひも依らず妾の最早一旦の役目も濟べ此儘暇ずて返るなり雲井の秘曲も是迄なりと終りの一手を掻鳴す折しも松風の通ひ來て彈の色音の妙なる中へ乙女を目的の襖の陰よりきらりと突出す鎗先も乙女の姿の消失て鋭き穂先も太

子ハ驚き曲者入りしと云つゝも手疾く鎗の柄を取止て引ハ襖のばつたりと倒るゝ途端も月光大臣鎗をかざして飛掛る乙女の有て茫然たる此形状も再度駭く阿闍世太子ハ我を害するならんと呆れつ惑ひつ大音も月光の臣我を弑す何れも出合て逆臣を疾く組止よと呼ひる聲も月光ハ劍を捨て恐れ敬ひお氣遣ひ遊されな某ハ逆意おれハ御寐所へ化性の者入込しを打乗ん逆斯の仕合せ口惜くも取遁して君の疑ひを受るも道理なりと歎息吐ハ太子も聊か安堵ハすれど其意を得ざれば月光ハ向ひ尊くも我閨室へ今宵天女の天降りて天の秘曲を彈べつゝ我心を慰るハ是天帝の命なる由夫を敬ふ心亦くて化性の物どの心得ず汝ぢガ耳より尊き調へを何と聞しや願ひても尙ほ合難き天帝の賜物なるを辨へも無くして無法無慘も追奉れハ遁れ難なき天の咎め我身ハ杯か及びざらんや一老臣の身を以て斯る粗忽ハ何事ぞと額ハ汗を拭取ず言ふも騒ぐぬ月光ハ威儀を繕ひ座を進めて賢ハ太子ハ鬼瘞ハ取附れ給ひし故然る事をこそ宣ハすれ能く御心を落居させて某ハのヤすを聞し召今宵深夜ハ及びて老女達より告越したる仔細あれハ遠敷ハ次迄伺候して逐一様子を見届しハ姿こそ天女なれども本来魔性の證ハ靈香の薫りも無く管の花も色を失ひ謠ハ聲音も呂律ハ違ひ一つとして尊

ぶ所感ずべき事無き耳ハ鷄犬の夜鳴常ハ變りて不祥を人ハ示すが如し彼と言ひ是と云ひ魔性ハ極る上からの即座ハ退治せんと思按を定め鎗掻取て目的を定め物越ながらも突當たるみ手應へハ儘ハ有ながら形の無きハ不審なりと云つゝ以前の鎗取上尖鋒を篤と改め見て然ハこそ此を見給へ是ハ聊ハ鮮血の附たり假令容ハ捕へぬ迄も斯く血沙の色を見れば某ハ胸も聊か晴たり構へて物ハなうかされ召など事を別たる論言ハ扱ハと思ひ諦めて今宵の事ハ是限ハ必ず外へハ沙汰なしと互ハ口を堅めつゝ内分ハしてぞ止ハけり然れども阿闍世太子ハ天女の告の心ハ懸れハ我生れし時の様子を糺し見んとて女中達を甲乙と無く身近く呼て左りの搦を見せ給ひ我此搦の無きハ開も如何しての事ならん人として五体の内ハ傷を附るハ此第一の不孝と聞ハ棄置れず糺して心を落居たし生れ乍らの事なるや又幼き時徒らせし我過ちハ侍るやと夫も聞き是も聞と知らて言ざる者もあり又知りて之を言ぬ者もありぬ然れども隠すより顯るゝハなと云ふ世の俚諺ハ違ハ事無く且阿闍世太子ハ惡念の再返る時至れるハや皆々包む其中ハ一人の女中ハ年を経て古き掟も覺る氣ハ心弛みや爲たりけん不圖阿闍世太子の搦を見て思ハすも口ハらし其御案事ハ然る事ながら御自ら過ち

給ひし傷あわらぬべ聊う以て御不孝の成侍らずと云ふや否や阿闍世太子の急立て其根本を聞かせば件の女中の呪と計りお驚き乍ら仮初云紛らせんと爲てけれども如何なく免さばこそ囁附如く急おぞ後悔ながらも止む事を得ず明白お其傷の云々あて御誕生の折刃の中へ生れ落させ給ひたる其時のお怪我こそと云ふお扱の父母の情なき事を悟りて阿闍世太子の夫よりして其女中を賤し拵へて種々の事を兎や角問ふも女中も是非無く其昔有し事ども物語るを聞か太子の過し頃提婆の方まで聞たるお聊かの違ひも無ければ心中深く憤り凡そ世上の親の心の善かれ悪うれ愛お引れて寵み育つるの鳥獸虫蟲迄も替る事無き習ひあり夫何ぞや人倫の司と敬はるゝ國王の身を以て非義非道も性善を以て生るゝ子の西も東も別たぬ者を刃お突裂殺す巧み悪鬼ども毒蛇ども譬へ様なき不慈悲なり左すれば尙ほ此外も我身の事を告られし夫の天女こそ是寔の天帝の御使ならめ开も如何しておほけ無くも身の僥倖を告られし其功德も報ひ奉らん殊お天女の御身より血を出したる月光の科も畢竟我からなれば追ての天の論の如く再度提婆も因を結びて大國の主となり天帝を祀り奉らば一時の罪も消ぬ可しと有ぬ惑ひも其日より一室お籠りて兩親を初め月

光等を深くも恨みて密又一味の者杯を彼れ是擇み杯しけり去程お頻婆娑羅王御夫婦の久しく太子の音信なければ度々人を以て呼せけれども病を稱へて出来らぬべ然る薬治を進めよと醫師を擇みて遣せども阿闍世太子の更お取合ず我病の汝等知る所も非ずとて脈も取せず追返せば竟お御兩親へ對し異心ある事の顯れける故種々も勞り賺せども尙ほ閉籠りて聊かも用ひざれば韋提希夫人の殊更お是を案事困せしが不圖思ひ附事のありて彼の芙蓉を密よ呼て宣ふやう兼て其方の女子も稀なる才智ある者故過し頃も彼れ是と表役より太子の事を刺まれし程なれば何卒太子の心を宥めて妾よ安心させて給れ察するも渠が異心のまだ家督を譲らざるとお付てか且の又未だ定る妻の無きを憤りての事ならん妾が心の少しも疾く世を譲りて宜姫を迎へ娶んと思へどもあの月光の許諾無きゆへ斯くの延々もなりたるが又妾より月光へ嚴敷沙汰す可ければ其處等も宜し傳へよかし若し又其方を留め置べ何事も辞すして渠が心も随ひ吳よ夫こそ妾如何様なる願ひも適へて取す可し是が適い其方が身の國の寶と思ふなり偏お心を盡してよと又他事も無く頼み給へば芙蓉の疊も頭を拱て重きお谷め蒙る可き身を免されし御厚恩殊も足らぬ我し風情を國の寶と御意あるの冥加も余

る身の懸れなり此より直様お部屋へ赴き是非とも御意見を申上て若し御心の直らぬ其内の御前へ再び出侍らじ左らばお暇をど云つゝ急しくおん前を下りて部屋へ戻りて身仕舞をなし過つる頃戴きたる韋提希夫人の裾を着して夫より直様阿闍世太子の許へ赴きて先様子を見るよ住荒したる室中の如くよて何と無く物怪しくして斯る詫しきお部屋の内お争太子の在すかと疑ふ計りの形勢なりしが固より覺悟を極めし事なれば聊か恐るゝ氣色も無く襖の外より詞優しくノッ太子様在すう芙蓉と申す賤女が御見舞お参りしと云ふ聲の届きて阿闍世太子の又も母君の迎ひなるかわら五月蠅此上一人宛來り面倒なり有ん限りの女共の打連立て一度も來れ一人も残さず討果して此世の暇を取しなば明日から心よく眠る事も出來なると最荒々敷聞へければ否御迎ひよていひのず久しく惱み給ふなれどさしたる御保養も在さずと承給へれば痛のしさお足らぬ身なれども聊くの御心をも慰さむ可く又お給事をも致さんと此身の心一つおて御機嫌を伺ひ侍るうし苦しうらさずばお側へ召れて何吳彼吳お心置なふ御用の程を命ぜられなば何程うお嬉しう存じ上侍るよこそと述る詞も何處もやら色を含る爛しき太子のやをら見返りて然る筋ならば落居たり此方へ這入れ物語らんと身

を起しつゝ宣ひする聲音も既お和らぎければ然らばお死し遊されよとおつゝお側へ進みけり「阿闍世の芙蓉を熟々と見て其方の聊か見覺の有やうなれども急速よの中々思ひ出されず何處ぞよて逢ふたる事のあらざるやと尋ねられて如何おも左こそ在すらめ太子幼稚在せし折又御供して波牟天亞の狩倉よと云掛るより思ひ出して扱ひ此奴其折も我を彼の深谷の内へ突落せしよ違ふまじと思へど素知ぬ風情よて如何様其時こそ親敷見たる者あらめ我の氣臆の悪くして幼き時の事杯の少しも覺へし事の無きよ其方どの如何なる縁ありてか尙ほ俯を忘れぬお又其方よりも音信しぬ最満足の至りなり見らるゝ如くよ一人寐の枕淋敷我なれば今より此よ居て給れ三度の食物を運ぶ外よ人の通ひもあらざれば父母も知られまじ我頼て世よ立バ重く取立て召仕のんまづ〜我近くへ寄りて心隔てず又語らへうしと言れて芙蓉の恥し氣よアラ勿体なき御詞哉妾は頃日何となく太子の御身の心よ掛れば何となく問ひ奉りし甲斐こそあれ足らぬ此身の口づらう兼ぬる事乍ら其御仰せよ偽り無くばお側へ召れて御不便を加へ給へるお心おや何偽りの有可きぞ夫承まひりて安堵侍りぬ然らば君のお爲おなる事の若しやあらば私しげ御意見を致しても御用ひ下さるべきかテ、身

の爲どあるならば何ぞ聞捨お致す可き又其方迎も仮初ならず我と枕を並ぶるからわ我云  
 事も背きのせまじア、争か御意を背くべきぞナ、夫間上の安堵せり然る上の早速頼み  
 度事こそあれど一つの巻物取出して如何芙蓉此磨身の出世は是より披きて見よと渡  
 し給へば芙蓉の受取恐るゝ開きて見れば這の如何お思ひ掛無き謀叛の條々其企てを書記  
 したる連判状どの見ゆれども未だ一人の名も載ねば駭き乍らも是僥倖お諫言せんと思案し  
 てすらゝと巻納め之の如何のお心より思ひ立給ひしおや斯る事を遊されずとも世繼の太  
 子の外お無しお心永く待せ給ひ、御家臣の昔君の者と言せも果す眼お角立否わの父母の如  
 何よして我等も世を取せんや迂濶としてあらんよ命も竟お危ふき事鏡も掛て明かあり其  
 証據の云々なりと有し事ども宣ふ芙蓉の之れを打聞きて借の何事も已に聞知られしか夫  
 よての是非もなけれど我の只何所迄も知らぬ面よて事を爲すに適ふまじと意を定めて尙ほ  
 も詞を和げていふやう開の然る事の在せしか妾の少しも存じ侍らず唯常々母君の最潜やか  
 なるお咄しよの我太子の何故よや幼き者お似も寄らず人を害し禽獸を殺す事を頻り好め  
 ど開の思の敷限りなり其事さへ止侍らば餘お障る事の無きおと深く是を歎け給ひて自ら

密よ齋遊して天つ御神を祈らせ給へば其御神の御告おの太子の殺せし人畜の數ふる違わ  
 らず其者今浮みもやられて地獄の巻も行吟り其者を見度ほりせば夜お入りて庭面なる井筒の  
 内を臨む可し其輩の面影の見ゆるなり夫を一々吊ひて佛を厚く祀りなば自然と善心よ立返  
 らんと最も賢き御告よ母君の深く感じ給ひてお庭の井筒を夜お入りて密よ臨み觀給ひしお  
 君の御手お懸りし者水の面よ何と無く影を浮べしを見給ひてより其靈魂を懇切に一々祀り  
 給ふなりと語るを聞て冷笑ひ開の又愚痴の限りなり迷へば自と分別の悪きが故よ心くら夫  
 等の物も眼お見ゆれ我殺したる者何を以て庭井の内よ寫る可き是第一の妄言なりよしや兎  
 もあれ角もわれ其寫る者の我眼も見へぬと云ふ事の有されば先今我も井筒お臨みて寫ら  
 ぬ事を其方よも見せん先々俱お來れと云は仕濟したりと密お悦び芙蓉も俱よ立出る其夜の  
 月の幽照せば手燭も持て苦蒸さる件の井筒を覗けば水底迄の明かお見へぬおも無く見ゆ  
 るおもわらず不思議や二人の外お異形の面影寫を見て流石の阿闍世太子も之の儼易して  
 頓お我慢も挫けて芙蓉よ向ひ如何よも不思議の有物かな今こそ母の御詞も胸よ當り覺たり  
 斯る上の彼奴等の愁念我等よ纏りて障碍を爲すかも知る可からず然る今より前非を悔て渠

等の得脱を深く念じ年頃日頃の罪を謝て此以後の殺生を弗お思ひ止る可しあら面白からぬ  
 今宵の形状哉急ぎ我部屋へ戻る可しと芙蓉の手を取急ぐ途端に芙蓉の蹶き轉ぶ所を助んと  
 する其手先は障る物ありければ心得ずと手を取上て月を光り透し見れば懐劍なるおぞ扱  
 ひと駭きつゝ芙蓉を蹴倒しアラ口惜や初めよりして疑惑なる者と思ひしゆへ賺し見んとし  
 てける己れの母の間者おて隙を偵ひ我を殺さん這奴が巧みなり腹立しや开も其昔龍角を欺  
 きて殺せし上も我をも谷間へ陥せし奴と夙も聞たる事あれば今回如何なる巧やするぞ知つ  
 て知る待遇の欺し賺して父母の様子を深く探らん爲めなり夫故おこそ今迄も優しき詞を  
 懸置ぬ扱又井筒も寫せし其影も己れが業どの知り乍ら知らざる振もやはり又其方の氣を弛  
 させたる我手段なり斯なる上へ隠し持たる其面を出して化を現さずやあやき心お毎迄も小  
 兒と思ふも道理ながら大望ある此身なれば争然る事を豈賢とせんや疾々面を出せかしと詰  
 寄れば芙蓉も是迄なりと覺悟を定め隠せし面を取出して最早斯る上りら何をり包み侍る  
 可き仰せの如く私しの勿体なくも其昔君を谷間へ陥し侍りし者おて淺量なる女儀なれども  
 大切なるお主を害し奉れば善も悪もわれ妾の固より存生る所存はさらく無けれど死

ぬるも死なれぬ義理詰り御母君の重きお詞のわれはこそ今宵音信侍りしも寤の母君のお指  
 揮なれば迎も生ての返らぬ心よて懐劍を所持したれど今更君を害す可き心の夢々非ずかし  
 愚も女の一圖もお心を枉直さんと巧し事も露れての最早再度韋提希様お目見へ致す事  
 もならぬが最長く侍れど君の刃を身お受させて越方の科を購へせ給へかし併し暫時待せ給  
 へと言つゝも襦袢脱取て是の之れ以前韋提希様より賜りしお召下なり之を着ながら御手  
 へ掛らば母上様の尊体も刃を當給ふ事おなれば是をば茲も脱捨ぬいさ此上り少しも疾く此  
 世の暇を取せて給といひければ阿闍世太子の氣強くも冷笑て如何様其方の賢き者なり憐れ  
 な筋を言立て我刃を鈍らせつゝ此場を通るゝ手段の程の實も感じ入りぬ然ながら生て置て  
 後日の妨げよし懐中へ入る鳥なりとも一旦の科も有れば望の如く暇を取すと云ふより  
 疾く刃を抜て渠が肩先をはつしと切し折こそあれ透り俄然お震動して眼前お忽然と現れ出  
 し者われは芙蓉を捨て驚き見届けヤア夫なるの何者なるぞと劍をうさして詰寄れば何者ぞ  
 どの何事ぞ我の开も天津御神の御使なりと云ふり正しく衣冠正しき一人の貴人なれば阿闍  
 世太子のはつと敬ひて开り又尊き御身として何故此へ天降られしやホウ何故どの愚なり先

ふ天帝乙女を以て汝ちが徳を尊び給ひて種々の論しと有けるお家臣の者の勿体なくも歌舞の菩薩の御身を破りて血を出せし五逆罪なり臣家の罪の主また何を以て免れんや此も依りて諸天の神達の此國を伐んと有しが汝ち已に提婆お組して一流を立る時極めて天下を一統すべき明德の吉相ある事天帝委敷知し召ば彌提婆お組するや又父母の命お附や其否を疾く傳へよ夫次第て天の誅罰の瞬く間お定る可しと聞より太子の仰天して某し一旦親を棄られ提婆お厚く養はれて一つの契議を約したるが不圖其心を翻へせし歌舞の菩薩の御告を得て今後悔脛を彌侍りぬ何卒再度提婆お隨ひ以前の約議を調へて永く好を結ばんと早疾くより覺悟せり然ども今父母を初め月光菩薩お至る迄某しの存意も適ね外お工夫を旋らして先服心の者を語ひ此身國王と成たらば思ふ事一つとして適にぬ事の有べきや先後會の吉左右を待可しと提婆の方へ恐れ乍ら詔りを下し給へと訴ゆればナ、其詞お偽り無くバ今回の天誅を免す可し天意も適にぬ彌提婆お羅王親とて必ず油斷すなど云ふよぞ仰せよや及ぶ可きと私語後お手負ながらも芙蓉の此を聞取て迎も今消る身なれば早惜からぬ命も掛て國家の仇を失いんと思ふ最期の一念力お壁り寄りて阿闍世太子の脇腹を懐劔おて刺

んとするを左知つたりと身を捨りて太子の芙蓉の腕を捻上未だ死お切ぬりナ、夫々其方おの好馳走が有ぞとて芙蓉が身をバ彼の井筒の上へ引上つ、此井の其方が冥土の捷徑なりわいれ此世の暇乞お女の姿を見する水鏡なるぞ何と見へたり見へたるならば明後日來よとて直様水入と陥し入れ手お附し血を邊りなる千草の葉よて押拭ひ先母人の廻し者を斯の如くせりと打笑バ御使の神の點頭てナ、夫の好き前ひなり然バ我の天上へ戻らん必ず約を變ずるなど云つ、袖を翻へして虚空をさしてぞ上りければ阿闍世太子も其儘お部屋へと戻りけり扱又彼の妙顯の提婆の方へ容を現し我先に天女と變じて阿闍世へ生立の事を逐一告又天つ神の使と現れて謀叛の一儀も力を入れさせ已も味方お取込たり渠も一味の枝葉繁らば程なく吉左右を告來らん開の先夫おて安心せしが我術を以て天上の様子を密偵しし此程如來の羅漢を引連喜見城おて母の爲とて説法を説れしが最早下天の時至りて已も此近國を通行するをおめくと懐中手して見て居らんも何とやら智慧無きふ似たれば一つの手段を旋らして下天の道よて戦はん夫お云々の謀計あり好しからんか如何よぞやと密告れば提婆の悦びて其謀事こそ面白し疾く行へとて侶俱も急ぎ魔族の輩を呼集めてぞ談じける

時又如来の天上よて前世の母なる摩耶夫人の爲に報恩の說法を爲給ひ帝釋天其外も御法を傳へ給ひければ諸天の悦び大方ならず尙ほ何迄も留め給へど已に說法も殘る所なければ頻りお下天を急ぎ給ふも是も亦是非無ければ逆天帝俄然又下界をさして三つの棧を造らしむ其結構壁へ難くして恐らく凡夫の巧み似もやらず僅の間お調ひければ如来の殊なふ悦び給ひて羅漢と俱に天帝を拜して件の棧も臨み給へば天上の皆々別れを惜む其中も摩耶夫人の后妃の最歎き悲みて御衣の袖も縫りつゝ大方ならず名残を惜まれ自ら簪の花を取て御遺物お迎捧給へば其外の天乙女も同じく簪の花を以て如来を初め弟子達へ御餞別の心を表して俱に心を慰めけるお程なく天の諸神諸菩薩の如来の前後及び羅漢達を整々と打護りて七寶の橋を下られけるも程も有せず波羅奈國なる山の峯をさして天降まじまじけるも俄然又邊りの朦朧として無明の雲霧霧き覆へば是唯事非ず迎お弟子達の立留りて我師先暫時休らひ給へ事の様子を見届く可しと云を留めて如来の微笑し否駭くまじ危ふきも臨みて危ふきとせぬは是我身も積し年頃の功德なり此山の麓なる大河を越れば其儘も我古郷の領地なれば仔細に有じ疾く往んとていさゝか事ともせず俱に降りて程も無く大河

の岸に到り給ひて此川も渡せる橋を凡そ百歩も進みしころ橋の下よて鉦鼓を俄然又打立る其響きの宛然震動の如くなれば舍利弗目蓮其外もあなやと計り又打駭きて案の如くも賊徒等の謀計も陥りしかど後を急見返れば這の如何も橋板を十間計り切落して早立戻る事も適はず又往く先よの炎々と火焰の一度も燃上りて柱の大木もめりくゝと半より焼折て各々焰も包まれ火焰の浪風も飛つ流れつ雷電の水を走るお勢も彌羅漢の足を空おして断廻れども前後共も遁るゝ道のある事無ければ争我師を助んと橋の那方お打向ひて大音も叫ぶるやう三世の教主茲にお在すぞ誰なりとも舟を進らせて賊徒の難を救ひなば未來の功德の云ふお及ばず今世安樂の身とならしめ摩迦陀國の恵も興りぬ願ひの望も任せんとも云ふ内も早間近く燃移る橋の半も如来のイみて少しも動ぜず泰然として居給へども羅漢達も川の面の援をのみ求める内も小舟一艘漕出ければ楮の此舟こそ皆々を助るおやと能く見れば中も提婆達多のありて長柄を構へて立返羅漢を見上て罵るやうサア此舟も乗度バ釋迦の首を土産お持て乗移るべし賃銭なき舟の何國もあるアモ小氣味よき形状かな今日如何なる吉辰小や渠等を魚腹に施す事善き善根どの云ながら枯木の如くなれば腹お飽まじ日頃の無念も



重なれば彼奴等が溺れ死を詠める事の面白さ者共唯せ諸へと嘲りつゝ、舷叩いて居る所へ  
 妙顯の焼討の手筈を濟せ解よて茲へ漕寄せアレ那處を見給へよ離れ嶋の狗子の如くおて何  
 處へ逃べき所も無ければ者共彼處の人数を引來りて此橋の下に集りて今彼れ等の溺れ死を  
 見物せよと皆くを眼前に呼集めて劍を振て悦ぶ内にも前後の火焰の魔風は吹れて已お如  
 來の前後は近くよぞ益々驚く羅漢達の下なる船は提婆の在と見てけるより再度詞を出さず  
 して唯一同お袖をかざして如來を弄と取圍み命を天に任せけるの最危き事の限りなり其時  
 如來の天に向ひて今日唯今魔界の眷属の提婆は紐して我侶俱お法弟迄も亡いんとする其災  
 ひの尤も急よして死るゝふ寸暇なし然る此由を天お告て其援を待つ已なりあな畏くど訴  
 へ給ふ折こそあれ天帝已お四天王及び諸天神お如來の危難を救ふ可きよしを命じ給へば眞  
 先よ名おちう韋陀天の天降りて天風以て魔風を嚴敷防ぎける然れば此天つ風は是君子の徳お  
 る風よて不徳無慘の小人の魔風向かい以て適ふ可き草よ風の聖語お違はず唯一當よ火焰の  
 消て清風の薫りの却て魔賊の鼻を突眼よ針を刺るゝ如くよ染渡りて惱み乍らも落なば討  
 んど橋の下へ集廻る其上なる如來の在殘焰の橋のドット一度お提婆妙顯の頭上へ落てけれ

二人を初め其外の者お至る迄斯る形状は打驚き逃るよも防ぐよも其隙の無ければ頭と頭  
 を打合せて悩むもあり舟板は壓れて潰さるゝもあり或の流るゝ船の下に壓伏られて數多の  
 鼠の陥お掛りし如くよなりて蠢き乍ら調子異なる聲を發して泣叫ぶも亦多かりける此時妙  
 顯も提婆達多も橋の下おて船を碎りれ最危ふりりし此二人の惡運の強きおや外の船お乗  
 移りて漸く命を助かりぬ扱又如來羅漢達に落たる橋の只中お尚ほもイみて在せしが不思議  
 や主無き一艘の解の漂ひ來りしを是僥倖と乗移れば其舟の自然と摩迦陀國の岸の方へと赴  
 くを見るよりも妙顯提婆の濡鼠の荒るが如くよ立騒ぎ總身よりの車に垂る袖を結びて僅よ  
 残りし魔界は下知して如來の舟を追掛れども天津風は吹立られて十尋進みては五尋戻り五  
 尋進みて十尋戻されければ妙顯の斷をなし此上は是非もなし皆々持たる其劍を投附よて下  
 知すれば魔界共の心得たりと氣を勵して如來を目的お鋒劍を投る事恰も木の葉を山風は吹  
 立るが如くなれば流石よ如來羅漢達も此劍尖を防ぐ可き楯の扱措て唯破たる衣一重のみな  
 れば甚だ危ふかりけるが件の鋒劍は如來羅漢の眞甲お飛來るよと見てければ這の不思議よ  
 る其儘劍の尖刀の投たる方へと飛返りて魔軍共を貫くよぞ魔界の仰天の大方ならず殆んど

戸は打礫も異ならず加之天よりの輪を降して魔界を打事宛然篠突大雨は霞の混る如く  
 おしてさしもの妙顯提達達多も之を防ぐと違なく切拂ひ打落して一心不乱又我身をかばへ  
 ば更な如來の行方も知らず斯る所へ先刻も如來羅漢の乗乘し以前の解自と茲へ流れ寄し  
 を妙顯疾之れを見附て遠敷夫又飛乗て改め見れば船底へ隠れ居たりし下輩の魔賊の盡く  
 威死果てありければ妙顯の聲を怒らして呼立るふ其内の一人がアツと答へて蘇生ぬ妙顯夫  
 お打向ひて汝ち等の何として皆斯くも呼吸の絶たるよやと問ひければさんい最前橋の落た  
 る騒ぎも恐れて此舟底へ隠れしは俄然又板甲の重くなりて出る事更も適はず思ひ依らざる  
 災難あて如何とも詮方なく唯一同又聲を發して舟を破りて出んと爲れど其力の及ばぬ板  
 甲の上あて大音も我々お向ひて云ふやう百種の外道等有難く儘も聞かし开も三界の教主よ  
 敵對せし其天罰を通るゝ上又禍ひ却て福ひも佛足の下おなりて佛縁又開かれ未來まで  
 の苦を轉身して阿羅漢果を得べきなり再來の時至らば皆佛恩を報ず可し斯く引導する者の  
 十大弟子の其一人なる目蓮と云ふ者なりと云ふかと思へば舟の内の忽ち光明の輝きて自と  
 歡喜なしたるよや南無と云ふ聲を限りおて皆々斯くの仕合せなりと語る所へ提婆も來りて

今此様を聞や否やア見るも忌敷其奴等を急ぎ舟より掻出して魚の餌食おせよかしと指揮の  
 下は魔賊共の舟の死骸を川中へざんぶと打棄ければ等く下流へ流れけるは是果して得  
 脱せし證なるう又目蓮の神通なりや其虚實のまだ圖られず扱又提婆が強惡なる再度の危難  
 にも困ずして擊波されの士卒を頼み今より又々摩迦陀國の道へ直様追掛行て迫て羅漢の  
 首一つなりとも手も提て返らずバ今宵の争う寐お着る可きと彼の性質の我慢を以て齒を嚙  
 拳を握る程も妙顯も今日の負の殊も口惜く思へども又詮術の無き者くら夫といなしお氣を  
 焦つ提婆を押留て諫るやう御身左な悔み給ひぞ今日の戦ひの利無きも似たるも實に此方の  
 勝ぞかし其譚の摩迦陀國へ渡せし橋を焼たれば渠が不便利云ふ計りも無く今より後の通路  
 を失ひ幾万人の難儀も及ばん下輩の魔界を聊か計り失ひたりとて幼子らしく左計りお氣を  
 落し給ふな夫万卒の得易くして一將の得難しとす事の内へは御身と我と阿闍世との三幅  
 對みて如來の首を見る時の杯か無からんや其時こそ其眞の勝なれいと先今日の返らせ給へ  
 と宥め賺して侶俱も其場をそこへ立去けり

釋迦八相倭文庫三十八編終

釋迦八相倭文庫二十九編

さる程は如來の一度提婆妙顯が偏執の謀ふ墜ち入給へど諸天神の擁護よりて御身の勿論羅漢達も些少の過ちなく御船の向の岸に着て皆々陸へ上る程は羅漢の中にて達者なる者の申すやう急迦毘羅城へ馳せ参りて還御の旨を告げまつらんと賢しらだちて語らふ程は如來の是を聞かへずアラ愚くなる事をぞ言ふ皆々此の所を何地と思ふぞや爰は是夕陽山の法堂の中なりかし我先の日は一念醍醐の法を以て天上より身を顯し又鎮夷山の麓にて提婆妙顯の邪言を挫きたる其折迄も我正身と思ふの愚かなり是れ神通の方便にて別な姿を顯はせり速凡眼の雲を拂ひ各々眞眼を開らき見よと言ひつゝも御手は携へ給ひし摩訶薩如意以て虚空を拂ひ妙なる秘文を唱へ給へり忽地法堂坐禪の床とぞなりよけるさて今如來の静やか唱へ給ひし秘文の御聲の外は漏りしりや阿難の耳への雷の如くお聞えて最尊き驚きてす天上の御法り果して法堂の扉らを押開きて内へ進めば羅漢達も皆々如來の妙智力を敬ひ尊び御跡は續て青龍殿の大殿お袖を連らねて立出れり淨飯王の勿論橋曼彌の方よりも御使を給へり優陀夷夫婦も急しく來りて其御機嫌を伺ふ程は如來の改めて宣ふや

う我天上の念願も此度異儀なく満したれば母の報恩は何卒して此の夕陽山を精舎となして妙なる御法を説くまほし此の儀如何と談じ給ふに優陀夷の答へて申すやうその殊更も尊き業なり元よりして此の御山の帝の深き思召めて君お御附屬せられたれば御心任せたるべしとて帝は奏問し優陀夷等の丹誠を抽んでつゝ万づ何くれと調へ物して最清らなる精舎となしければ如來の歡び大方ならず是よりして此の御山を摩訶耶山切利天上寺と名づけられて悉なくも父母報恩の法場をぞ開かれたれば帝を始め橋曼彌夫人且宮中の男女その外貴賤群集して悉く法座お進なりて妙なる法味を會得する者幾千萬の限りも知れずたい感涙も袖を浸して其日の皆々立去りぬ是れより後耶輸陀羅女の妙惠比丘の身を安らけく御山の中は庵室をしつらひ爰お移りて堅固お行ひ羅喉羅侶共住居給へば宮中の女ども折々忍び來りて姫の機嫌を伺ひ其心を慰めんとて潜めき々々つぐるやう此愛々しき羅喉羅様を残酷も斯く法師お成れ其方様迄も尼も成さるゝ誰か中言を悪く作りて如來のお耳へ入れしからん但し中途の計らひか御最惜や淺まじやと燃る木もなき其處へ言葉のふしお火を添て焚つけ初むる物から流石の女子の淺はか昔の事杯を案じ出して如何も斯く情なき身と成せ

らるゝも謂れなきもわらずかし思へば辛き母と子成れる末こそ悲しけれと獨り袂を濡らしつゝ、も結ばれし庵の内此度の御法の席へも仰せなきを幸ひお其場へも出給はず猶垂籠てお座折からまだ夜も宵の雨止又軒端はほと々々音信の車か人かと疑ふ時しもヤヨと開けよと言ふ聲の儘か又聞えて妙惠比丘尼の驚きて爰に役目おわらざる他人の出入を固く禁ずれば入口は其の事の正しく記して有ものを知て錠を破るみや知ずの速いねよかし若し止み難き用有べ門守又事を告よかし役目の者よ見付られなば重き咎めを得べきぞとく歸すやと吃りければ御身世お在る中ならば夜中の勿論知ぬ人の音信を厭ひもせめ斯く庵は行ひ澄ませば千種も百木も法の友若しからざる者よこそ速々爰を開けよかしと聞ゆる程猶も不審先腰元らと呼ばんとて一ト間へ赴く襖の際にて思はず人を行當りてト見れば遣り外の人ならずヤア其方の優陀夷の妻コハ姫上おて座するか唯今彼たへ如来様の御案内を致し侍りぬ急きお出迎遊ばせと聞よりも妙惠の胸も塞がりて今取亂せし姿よて我か夫お目もじを何とせんと思索よくれてうろくとし給ふうち女房の急き戸を掻い開きて如来を一ト間へ誘ひつゝ何呉待なさんどて腰元らと呼びつれども何分俄の事なれば些少も其手當り更

もなく唯立騒ぎ周章るのみなりや、ありて女房の姫上の如何よと見まはせども羅喉羅侶共更らよ透りよ見え給ねば此の如何よと尋求めしよやうやく納戸の内お座を見てもどかしげよ申すやうコハ又何と思召て爰お隠れておはずぞや今日如来を御庵室へお連れ申せし働らきの並大体の骨折ならず年頃日頃意お掛ればこそいつぞや如来のお言葉おも天上の御法を濟さば必ず逢んと阿難様を以て宣しとの有れば漸く如来を御勤め申して御供よ阿難様と私のみ誘なれしを何かお氣よ叶ぬ事の有てか打明して聞せ給へ日頃今一度我夫お目見たしと神かけて念じ給ふと妾はも宣ひし其の偽おあはせしか是れ姫上の妙惠様とさし俯きて言葉なき背なかを撫つ動かせば妙惠の漸く涙を拭ひア、勿体なし何を以て夫お偽りの有べきぞ今直よお目通りよ出ると思へば此姿のはすはなるが胸おつかへて兎ふも角も出れず夫故爰お忍び居て心のうち種々ど考へみれば其昔百の司や民草よ世繼の君と敬いれ仰がれ給ふ御方の其簾中の身の譽れに綾や錦の褥の上よ簾もる風さへ厭れしが如何なる宿世か今の早罰もなくして此の姿よ成し妾はあきらむれども唯獨子の羅喉羅様迄がいとこや出家お遊すとい好事おこそ有るべけれど女のたらのぬ心お情なき成